

濟定檢省部文

著也孝材中士博學文

子女

# 史國新合綜

用並學高 校學女第高

社會式株  
院書國帝

教科書  
4  
21  
42-  
20000

43026

教科書文庫

4

210

42-1938

20000  
81620

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

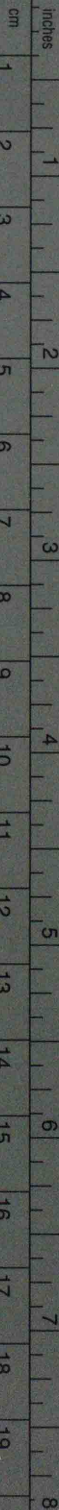


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



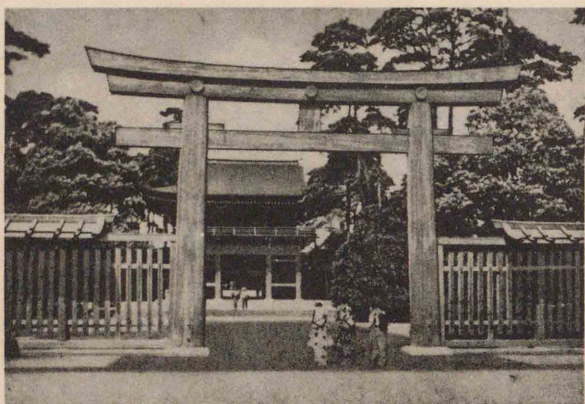


資料室  
文部省檢定  
昭和三十三年八月二十二日  
高等女子學校歷史科

東京帝國大學教授  
文學博士  
中村孝也著

女子  
綜合新國史

高等女子學校高年用



明治神宮

広島大学図書

2000081620



株式會社  
帝國書院

教科書文庫  
4  
210  
42-1938  
2000081620

46  
210  
BB13



綜合歴史



小序

本書は昭和十二年三月改正せられたる高等女學校歴史科教授要目に準據し、主として修業年限五年制の高等女學校用として編述したものであります。該要目は國運の進展に鑑み、國體の本義を明徴にし、國民精神を涵養することを要旨として制定せられたものであります。この要旨を實現するためには、先づ指導精神を確立し、これに基いて教材の選擇・排列を行ふことを要します。その指導精神は、(1) 道德的使命よりいへば、國體の本義を明かにし、健全なる國民精神を養ひ、皇室中心のわが國家を一層立派に護り立てる決心を強からしめ、(2) 學術的使命からいへば、わが國民文化の大系を明かにし、一層立派な世界文化を創造する覺悟を強からしめることに存します。本書はこの指導精神に従ひ、(イ) 特に御歴代の聖徳と國民の忠誠とを述ぶることに重きを置き、(ロ) 既に國史及び外國史の概要を修得せしめたる後を承けて、諸外國と比較して、わが國體の世界無比なる所以を悟らしめ、以て大義名分を明かならしめることに意を用ひ、(ハ) またわが國が如何に外國文化を攝取醇



化し、新なる文化を創造せしかを説き、(二)且、國民の活動が如何に國運の進展に關係ありしかを理解せしめ、(ホ)人文の發達、社會の進展は、政治・經濟その他の文化の相互聯關に依るものなることを明かにし、(ヘ)各時代の特色を把握せしめることに留意し、(ト)特に女性が社會國家の進展に貢獻せることを述べ、(チ)現代の情勢の下における日本婦人の思想態度に就いての覺悟を喚起することに心をを用ひ、要するに低學年における國史教育を基點として、更に前進して内容を擴充し、新鮮なる教材を提<sup>テ</sup>供し、國史の理解と興味とを増さしめることに努めました。尙本書を若し修業年限四年制の高等女學校において、これを採用せられる場合には、(1)小活字で印刷してある參考資料は省略し、(2)本文中、割合に重要でないと思はれる教材を省略し、または簡叙して、規定の時間數に適合するやうに調節せられんことを希望します。但、その爲めには、別に<sup>子</sup>女綜合新國史<sup>上</sup>高等女學校<sup>用</sup>もあります。本書は、姉妹篇たる小著<sup>子</sup>女綜合東洋史・<sup>子</sup>女綜合西洋史と密接な關係を保ちつゝ、編述したものであることを申し添へます。

昭和十二年十二月

中村 孝也 識

### 子女綜合新國史

高等女學校  
高學年用

#### 目次

第一章	肇國と國體の精華	一
第二章	社會組織と國民道德	一五
第三章	大陸文化の攝取	二三
第四章	外來文化の醇化	三三
第五章	武士の勃興	三八
第六章	建武中興	九
第七章	東山時代の文化	一〇三
第八章	社會の革新	一一三
第九章	文教の振興	一二五
第十章	尊王思想の勃興と明治維新	一四九
一	尊王思想の勃興	一四九



二 明治維新……………一〇

第十一章 立憲政治の確立……………一七

第十二章 教育勅語の御下賜と現代文化の發展……………一五

第十三章 現代の大勢と女性の覺悟……………二三

目次終

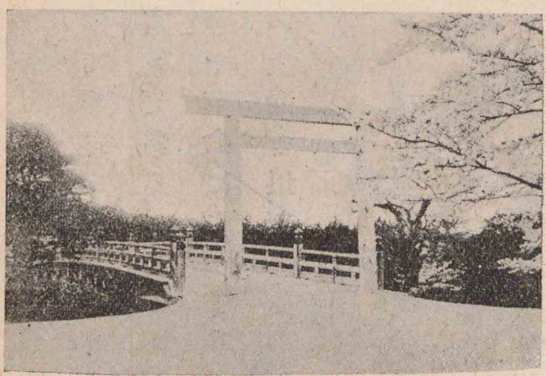
# 女子総合新國史

高等女學校  
高學年用

## 第一章 肇國と國體の精華

序説

優秀なる國體  
萬世一系の天  
皇と忠良無比  
の國民



皇大神宮宇治橋

序説 われ等は曩に、わが國史を學んで神代より現代に至るまで數千年間における國運發展の道筋を明かにし、それより轉じて東洋史と西洋史とを修めて、世界各國の起つたり倒れたりした跡を眺めた。その間に知り得たことは、わが國體とわが國民性とが、共に最も優秀なものであるといふことであつた。(1)わが大日本帝國は、上には萬世一系の天皇



卓越せる國民  
性  
強大なる同化  
力

綜合的大觀  
國體の歴史的  
基礎  
外來文化の同  
化

がおはしましてこれを統治したまひ、下には忠良無比の國民があつて皇運を扶翼しまゐらせ、天壤とともに窮り無き生命を有する國家である。その國體の鞏固にして高貴なることは、諸外國が篡奪や革命によつて、頻りに主權を取換へ、數十年若くは數百年の短い生命を以て終るのに比ぶべくもない。而して(2)この國家を組立ててゐる日本國民は、實に驚くべき強大なる同化力を有してゐる。日本國民は、祖神崇敬の信仰を中心として立ち、長い年月に互つて東洋文化を取入れ、また西洋文化を取入れ、すべての外來文化を同化してわが血肉となし、成長發達して今日に至り、將に雄大な世界文化を創造しようとしてゐる。されば、われ等は今や再びわが國史に歸るに方り、今まで學んで來た國史、東洋史、西洋史の知識を、悉く綜合して大觀すると共に、左には國體の歴史的基礎を尋ね、肇國の大精神を宣揚して皇室中心の國民生活をいよく堅實

天照大神の神  
勅

同床共殿  
三種の神器

ならしめ、右には固有の國民信仰を求め、外來文化を取入れた次第を明かにして、わが國民性の特質であるところの強大なる同化力に對して、ますます信賴の念を大きくし、それによつて國運を發展させ、世界人類の幸福を増すことに力を盡さうと思ふのである。

**天照大神の神勅** 神代の昔、皇祖天照大神は、皇孫天津彦彦火瓊杵尊を、わが大八洲國に降したまふに當り、

豊葦原千五百秋之瑞穗國は、これ吾が子孫の王たるべき地なり。宜しく爾皇孫就きて治らせ。行きくませ。實祚の隆えまさんこと、當に天壤と窮り無かるべし。

といふ神勅を賜はつた。また八咫鏡をとつて、この寶鏡を見ること、尙、當にわれを見るが如くすべし。床を同じくし、殿を共にして、以て齋鏡となすべし」と宣ひ、天叢雲劍、八坂瓊曲玉と共に、これを授けられて、永く皇位の御するしとなさしめられた。瓊瓊杵尊は謹



みて神勅を奉じ、この國に降臨あらせられた。この神勅によつて、わが國は肇められたのであつて、その精神の雄大なことは、東西古今、これに比ぶべきものがない。

神武天皇の創業

祖神崇敬の信仰  
御東幸の動機  
日神崇敬  
神劍の加護  
頭八咫鳥の嚮導

神武天皇の創業 瓊瓊杵尊の御曾孫神武天皇は、天照大神の神勅に基き、天業ヲ恢弘シ、天下ニ光宅スルニ足ルべき地を求めて、日向から大和にお遷りになり、橿原宮において天皇の位にお即きあそばされた。この創業の御偉蹟を貫いて輝ける大精神は、實に祖神崇敬の信仰でいらせられた。(イ)御東幸の動機は、祖神の天業を恢弘せられるためであり、(ロ)浪速を経て大和に入らうとせられながら、日神の子孫にして、日に向うて虜を征するは天道に逆れりとして、退いて紀伊の方に迂回せられたのは、祖神を敬はれる御心の現れであり、(ハ)熊野において神劍を得られ、(ニ)山中の嶮路において頭八咫鳥の嚮導に隨ひたまひ、(ホ)八十梟帥を討たうとせられると

丹生川上の祭祀  
金鷄の靈瑞

堂々たる御即位禮  
鳥見山上の郊祀

き、天香山の埴土を取つて來て祭器をつくり、吉野の丹生川上において天神地祇を祭らせられ、(ヘ)長髓彦と戦はれるとき、金鷄の靈瑞を蒙られたことなどは、孰れも祖神の御威徳を仰ぎ、その御加護を受けられたのであつた。されば、(ト)大和平定の後、皇天ノ威ニ頼ツテ凶徒戮ニ就ケリ、中洲ノ地、復風塵無シ、宮室ヲ經營シ、恭シク寶位ニ臨ミ、上ハ乾靈ノ國ヲ授ケタマフノ徳ニ答ヘ、下ハ皇孫ノ正ヲ養ヒタマフノ心ヲ弘メ、ようと仰せられて、畝傍山の東南に橿原宮を建てられ、紀元元年正月朔日、三種の神器を正殿に奉安しまゐらせ、堂々たる威儀を備へて御即位の大禮を舉行あらせられた。而して更に(チ)紀元四年二月、我が皇祖ノ靈、天ヨリ降臨アラセラレテ、朕ガ躬ヲ光シ助ケサセタマヘリ。今諸虜已ニ平ギ、海内事無シ。以テ天神ヲ郊祀シ、用テ大孝ヲ申フベキナリ」と宣ひ、靈時を鳥見山に設けて皇祖天神を祭られたのは、天照大神に對し、御奉告と御感謝



報本反始の聖慮  
創業の大精神

との誠を致したまへるものであつた。以上を綜合して見れば、神武天皇創業の大精神は、祖神崇敬の信仰を以て貫いてをられることを知り得るのである。

頭八咫鳥と天祖の御加護

(一) 頭八咫鳥については、日本書紀に、天皇が紀伊の山中の嶮路に踏み迷はれたとき、天照大神より頭八咫鳥を嚮導者として遣はすといふ御言葉をいたゞいた夢を見て覺められたところ、果して頭八咫鳥あり。空より翔り降る。天皇曰く、この鳥の來ること、自ら祥夢に叶へり。大なるかな、赫なるかな。わが皇祖天照大神以て基業を助成せんと欲するかと仰せられたとある。

丹生川上における天神地祇の御加護

(二) 丹生川上において天神地祇を祭られたことについては、同書に、天皇が「われ今當に嚴衾を以て丹生川に沈むべし。もし魚大小となく悉く酔ひて流るゝこと譬へば、枝の葉の浮いて流るゝがごとくならば、われ必ず能くこの國を定めむ。もしそれ然らずんば、終に成すところ無からむと祈られて、その嚴衾の口を下に向けて沈めなされたところ、暫くして、大小の魚が皆浮び出て、唼ひながら、水のまに／＼流れた。天皇はこれを御覽せられて、大いに悦ばれたとある。

金鵄と天祖の御加護

(三) 金鵄の靈瑞については、また同書に、皇師つひに長髓彦を撃ち、連戦勝つこと能は

紫宸殿南庭の御鋪設

頭八咫鳥形大錦旗  
靈鵄形大錦旗

萬歳旗

す。時に忽然として天陰り、氷雨降る。乃ち金色の靈鵄あり。飛び來つて皇弓の珥にとゞまる。その鵄光輝燦きて、狀流電の如し。是れに由つて、長髓彦の軍卒、皆迷眩して復力戰せずとあり、殊に名高い話である。

登極令附式によれば、今日、御即位の大禮に當り、紫宸殿の御儀において南庭に列立

頭八咫鳥形大錦旗

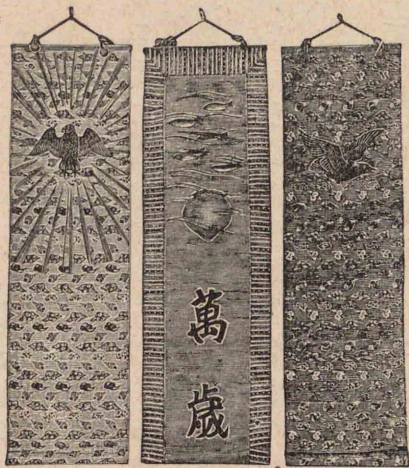
せられる多くの幢旗の中、東側には頭八咫鳥形大錦旗一旒、西側には靈鵄形大錦旗一旒が立てられる。いふまでもなく、前者は紀伊の山中における頭八咫鳥後者は大和における金鵄の靈瑞に據れるものである。またこの東西の大錦旗の前面に、各一旒づゝの萬歳旗が立てられる。これは上方に嚴

萬歳旗

靈鵄形大錦旗

靈鵄形大錦旗

アカヂノニシキ



衾と魚と水の流とを繡ひ、下方に金字で萬歳と書いた赤地錦の旗であつて、即ち丹生川上における奇瑞を表したものに外ならない。これ等の錦旗によつて、神武天皇が常に祖神の御加護を蒙らせられ、その御威徳を崇敬しまゐらせつゝ、大業を成したまへることを拜したてまつるのである。



祖神崇敬

崇祖と敬神

血族的結合と精神的結合

祖神崇敬 このやうに、わが大日本帝國は、祖神崇敬の大精神に基いて肇められたものであるが、祖神崇敬は、分解すれば自ら崇祖と敬神との二つに分れるのである。崇祖は祖先崇拜であり、敬神は神祇崇拜である。祖先崇拜は國民の血族的結合の基となり、神祇崇拜はその精神的結合の基となつた。この結合は、國體の基礎となるものであるから、以下少しくこれに就いて述べよう。

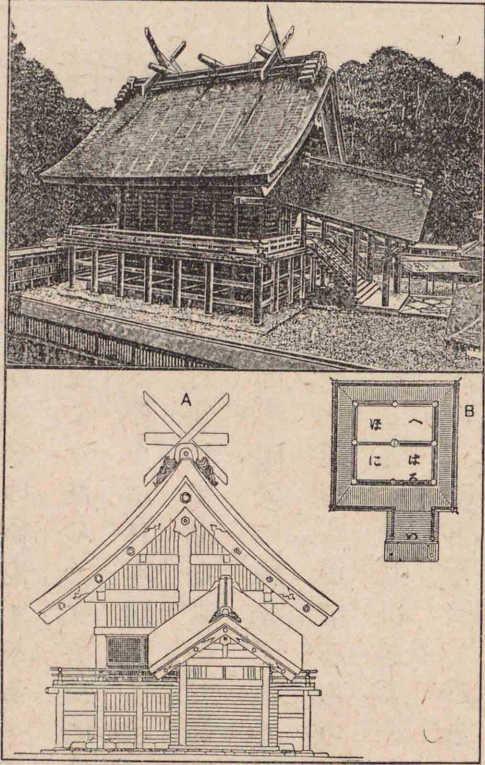
血族的結合より見たる國體

血族的結合より見たる國體 わが國は肇國のはじめにおいて、血族的結合と精神的結合との二大基礎を有してゐる。先づ血族的結合の方からこれを見れば、日本民族は日本群島の上に住んでをって、他國の民族のために攪きみだされなかつたから、長い年月の間に血統が結びついて互に同化しあひ、素質のよい民族になつた。その同化の中心にお立ちになられたのが、皇室でいらせられ、その御血統は、遍く國民全體に行きわたり、つひにすべてが同一祖

民族の中心としての皇室

皇室と國民との關係

出雲大社は出雲國鏡川郡大社町に在る官幣大社である。この圖の上段は本殿の全景、下段Aはその正立面圖、Bは平面圖である。圖中(へ)は御神體を安置したてまつるところ(い)の階段を登り(ろ)より入り(は)に(ほ)を経て(へ)に至る順序である。この建て方を大社造といふ。



出雲大社正殿・正立面及び平面圖

先から分れて出た血族同士になつてしまつたのである。その祖先は即ち天照大神でいらせられる。かくして皇室と國民との間

は、譬へば大木の幹と枝とのやうな關係となり、我々といへどもその血統を尋ねれば、遠い昔において、直接間接に皇室から分れて出

源平藤橘の起

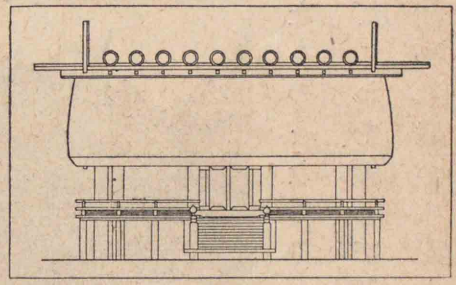
たものとなるのである。我々の苗字は無數であるが、主なる血統でこれを纏めて、源平藤橘と呼びならはしてゐる。源氏の中では清和天皇から出た清和源氏、平氏の中では桓武天皇から出た桓武



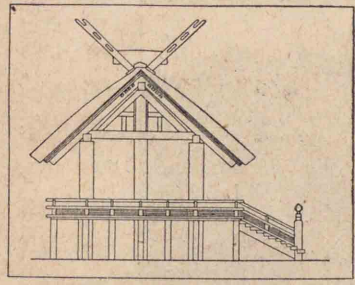
神明造は、正面に四本の柱を立て、柱の間を三間とし、その中央一間を入口とし、側面には三本の柱を立て、屋根は切妻造で破風の下に棟持柱のある建物である。

君民一體の家

精神的結合より見たる國體



神明造正面立



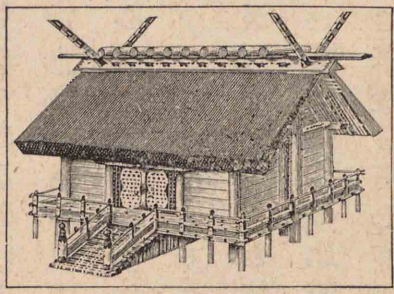
同側面立

平氏が共に最も榮え、藤原氏は天照大神に近い天兒屋根命から出て、殊に中世以後、皇室との御血縁が極めて密接であり、また橘氏は敏達天皇の御裔である。されば幹より大枝、大枝よりだん／＼小枝に分れ、その先に葉がつくやうに、日本國民はすべて皇室の御血統から分れて出たものであつて、皇室の御祖先は即ち國民の祖先であり、君民一體となつて國家を形づくつてゐるのである。このやうにして皇室を中心とする血族的結合がわが國體の基礎となつてゐるのである。

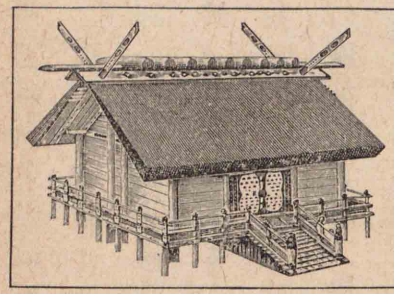
**精神的結合より見たる國體** 昔の日本人は、生命を肉體と靈魂との兩方から見て、肉體

神格と人格

現人神



大神宮正殿



豐受大神宮正殿

は滅びても靈魂は不滅であるとして考へてゐた。故に祖先の肉體は滅びても、その靈魂は永く子孫につき添うてゐると信じ、そこで祖先を神として敬ひ、祖神崇敬の信仰をもつことになつた。即ち祖先は、いづれも神格(神の性格)をもつものとして尊敬せられてをり、子孫はそれが薄らいで、つひにたゞ人格(人の性格)だけをもつものになつたと考へた。しかしひとり天皇のみは、祖神直系の御神裔としていつまでも神格を有せられるのである。國民はこれによつて天皇を現人神と申して尊び敬ひ、天皇は神格を有して國家を統治せられるのである。このやうにして皇室を中心と



政教の合體

日本人の精神  
祭政一致  
わが國家の特質

諸外國との比較  
支那

する精神的結合が、またわが國體の基礎となつてゐるのである。  
**政教の合體** 血族的結合からは、身體の生命の源をなす祖先崇拜の情を生じ、精神的結合からは心の生命の源をなす神祇崇拜の情を生ずる。この二つが合して生じた祖神崇敬の信仰は實に我日本人の根本精神である。この精神が土臺になつて「祭政一致」の風を生じた。祭政一致とは、祖神を「祭ること」と「政治」とが一つのものであるといふことであつて、國語に「マツル（祭ること）を「マツリゴト（政）」といふのは、そのためである。そして天皇は、この二つの中心にお立ちになられ、教化と政治とは天皇の御一身の中に、たゞ一つのものとして存せられるのである。この政教の合體は、實にわが國家の大きな特質である。

**諸外國との比較** 諸外國の國體はわが國と異り、上述せるごとく基礎を有してゐない。(1)今、東洋史の中心をなす支那に就いて

革命

西洋諸國  
民族競争

これを見るに、支那は古より諸民族の競争が絶えず繰返され、漢族のほか匈奴、突厥などのトルコ族、韃靼、契丹、女真などのツングース族、その他蒙古族、西蔵族などが互に勢力を争ひ、多くの國家が起つたり倒れたりしたのであつた。その起つたり倒れたりする原因を押し詰めて見れば、それは權力の強弱に基づくのである。支那の歴史は、このやうにして移り變つて來たのであつて、その移り變りを革命といつてゐる。わが國民は夙くからこのことを知り、わが國體の尊嚴なることを誇となした。興福寺の僧侶の作れる歌の中に、天皇の神聖なることを讚へたてまつりて「君ごとに現人神となりたまひおほましませば、四方の國隣の君は、百つぎにつぐといふとも、如何にか齊しくあらむ」とあるのは、即ち國體の正しい自覺から出た言葉である。(2)西洋史に見える多くの國々も亦、激烈なる民族競争の渦巻の中で、起つたり倒れたりして來たのであり、共和



わが國體の優  
秀

國のごときは、人民が權力を有し、法律の力を以て國を建ててゐるのである。亞米利加合衆國は法を以て治められる國家の一例である。このやうな次第で、西洋諸國には、わが國のごとき安定性が無い。さればわれ等は諸外國と比較して、わが國體の優秀なることを明らかに認識し、この國土に生れたことの幸福を感謝しつゝ、君國のためにすべてを捧げて働かうと決心するのである。

## 第二章 社會組織と國民道德

氏族制度

氏族の意義

氏上と氏人

大氏と小氏

部曲

氏族制度 わが國體の基礎となれる血族的結合は氏族制度と呼ばれ、古代の社會組織を組立ててゐるのであるから、茲にこれに就いて詳しく述べることにする。氏族とは、同一の祖先から分れて出た血族團體をいふ。氏族には族長と族人とがあり、族長を氏上といひ、族人を氏人といつた。氏族が代を重ねて複雑になれば、その本流であるものを大氏といひ、分流であるものを小氏といひ、大氏の氏上は、これに屬する多くの小氏を統べ、小氏の氏上は、またこれに屬する多くの家を統べた。家には家長があつてこれを統べてゐた。氏族はまたこれに隸屬する人民を有してゐた。これを部曲といつた。部曲の民は主として勞作に従事するものであつた。氏上は氏人及び部曲を率ゐて、朝廷に奉仕したのであつた。



氏族と職業

農業氏族

地名と氏の名

工業氏族

職業と氏の名

百八十部

部曲の民

中臣部  
齋部  
久米部  
物部  
史部

氏族と職業 わが國では、國民の重要な産業は、古から農業であり、氏族團體の大部分は農業に従事してゐた。このやうな氏族には地名を以て氏の名とするものが多かつた。葛城氏、難波氏、平群氏、高市氏などいふ類である。その外、工業に従事する氏族團體もあり、その職業を以て氏の名とするものが多かつた。例へば鏡作氏、玉造氏、弓削氏、矢作氏、服部氏、土師氏のごとき類である。農業も工業も、すべて世襲であり、それ／＼部曲の民が、勞作に従事した。この種の部曲の數は甚だ多いから、これを總稱しては百八十部といつた。

部曲の民はその氏の職業に服するものである。即ち鏡作部、玉造部は鏡や玉石の類をつくり、弓削部、矢作部は弓矢の類をつくり、服部は機械に従事し、土師部は土器の製造に従事した。漆器製造の漆部や釀酒の酒部などもこの類である。工業以外の氏では、朝廷に仕へて祭祀の事を掌る中臣部、齋部、軍事を掌る久米部、物部、記録を掌る史部などがあつた。

土地と人民との所屬

皇室直屬の土地  
皇室直屬の人民

領有權と統治權  
統治權の普遍的性質

土地と人民との所屬 氏族は、それ／＼土地と人民とを所有し、族長たる氏上は、これを統べて皇室に仕へた。皇室もまた諸國に土地と人民とを所有してをられた。皇室に直屬する土地を御縣、屯田などといひ、皇室に直屬する人民を、御名代の民、御子代の民などといつた。御名代の民とは天皇、皇子、后妃などの御名を後世に傳へるために定められたものであり、御子代の民とは、その御子なきとき、御名の亡びないやうにと定められたものである。かくして天皇は一面には皇室に直屬する土地と人民とを領有せられると同時に、他の一面には、すべての氏族團體に屬する土地と人民とを統治せられた。統治權は太陽の光の隈なく照らすごとく、一寸の地、一人の民をも漏らしたまふことがない。これを古語には「普天の下、王土にあらざるは、なく、率土の濱、王臣にあらざるはなし」と稱してゐる。



御縣と屯田

屯倉

御名代の部民

御子代の部民

御縣は朝廷の御料となるものを作つた。屯田は田部といふ人民がこれを耕作し、そこから收穫される米穀を貯藏するために屯倉があつた。景行天皇が日本武尊のために建部を定めたまひ、雄略天皇が御名大泊瀬によつて長谷部を定めたまへるは、御名代の部民である。また仁徳天皇が八田皇后のために矢田部を定めたまひ、清寧天皇が御名白髮によつて白髮部を定めたまへるは、御子代の部民である。

姓の制

姓の制 氏の格式の尊卑を示す名稱を姓といふ。政府を組織

臣・連・直・首・造

大臣  
大連

するの別に別に官制といふものがなく、姓の制によつて官職の高下を分つた。姓には臣連直首造等の別がある。いづれも皇室より賜はるものである。例へば阿倍臣・大伴連・漢直齋部首服部造などの類である。姓の中で臣と連とは最も貴く、臣は概ね皇別の諸氏に賜はり、連は概ね神別の諸氏に賜はつた。臣連の中から特に選ばれて大政に與るものを大臣大連といつた。大臣は成務天皇のとき、武内宿禰にこれを賜はりたるに始まり、大連は仲哀天皇のとき、大伴武持にこれを賜はりたるに始まる。雄略天皇のとき、大臣と大連とを並べて置かれてから、この二つは政府における最も高い官名のやうになり、各皇別神別諸氏の統領として政治に與つた。皇別とは神武天皇以後皇室より分れて出た氏族であり、神別とは神代において諸神より分れて出た氏族である。

皇別と神別

氏と姓との變遷

氏と姓との關係の紛亂  
盟神探湯

八等の姓

位階

氏と姓との變遷 姓はもと氏に具はつて、その社會上における身分の尊卑及び政治上における官職の高下を示すものであつた

が、歲月を経るに隨つて、氏と姓との關係が亂れて來たから、允恭天皇のとき、盟神探湯を行つてこれを正したまひ、後、天武天皇のとき、新に眞人朝臣宿禰忌寸道師臣連稻置といふ八等の姓を定められた。これは、その人の社會上の身分の尊卑を分けたものであつて、氏に具はつた名稱ではない。また別に位階の制を正して、官職の高下を分けた。氏は子孫が繁榮し、一族が増加するのに隨ひ、更に



苗字

稱號を分つ必要がおこり、新に苗字といふものを生じた。例へば藤原氏の内から近衛氏、鷹司氏、九條氏、二條氏、一條氏等が出て、橘氏の内から楠木氏、和田氏等が出て、源氏の内から新田氏、足利氏、徳川氏、山名氏等が出て、平氏の内から北條氏、三浦氏、梶原氏、土肥氏等が出たごときのものである。

盟神探湯

盟神探湯といふのは、神意裁判であつて、神前において正直を盟ひ、熱湯の中に手を入れるのである。若しその人が正しければ、手は爛れないと信ぜられてゐた。

國民道德

國民道德

氏族制度によつて組立てられたる古代の社會組織

皇室中心の國民思想

において、皇室は、すべての結合の中心でいらせられた。故に國民は常に皇室を仰ぎまゐらせ、天皇の統治權の下にあつて、安んじて生業に従事し、皇室を戴き、國土を護り、國民生活をして健全なる發達を遂げしめることに力を盡したのであつた。その上、祭政一致により、天皇はたゞに統治權を總攬して政治の中心に立たせられ

天皇は神聖にして侵すべからず

義は君臣にして情は父子  
古典と國民道德

大伴家持の歌

るばかりでなく、祖神の祭祀に當らせられて、教化の中心に立たせたまひ、國民は政教兩面の中心として天皇を仰ぎまゐらせたのである。「天皇は神聖にして侵すべからず」といふ精神は、實に國民思想の根柢をなすものである。皇室は、このやうな絶對の高い立場にをられて、その御仁愛は氏族の末々までも及び、君民の間は、父子のごとき親しさを以て満ちてをつた。古事記、日本書紀、萬葉集等の古典に見える神話傳説、歌謠などは、外來文化の影響を受けることの少かつた古代の純粹なる日本精神を傳へて、わが國民道德の正しい姿を示してゐるのである。それは一言にして掩へば、臣民たる責任の全部を一身に負ひ、すべてを擧げて君に捧げ盡す精神を中心とするものであつた。大伴家持が「海ゆかば水漬く屍、山ゆかば草蒸す屍、大君の邊にこそ死なめ、顧みはせじ」と述べ、梓弓手にとりもちて、劔太刀腰に取り佩き、朝守り夕の守りに、大君の御門の



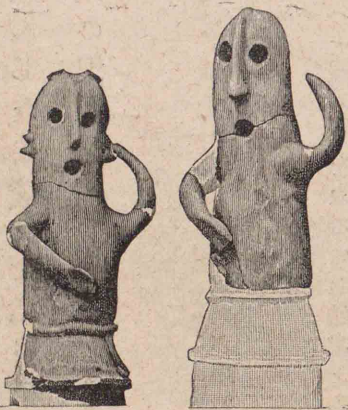
臣道精神の精華

守り、我れを措きてまた人はあらしと聲高らかに歌つたのは、即ち臣道精神の精華を強調したものであつた。

第三章 大陸文化の攝取

固有の文化と  
外來文化

固有の文化と外來文化 すべて國土に就いて見られる通り、わが國の文化も、外來文化を攝取し、これを同化しながら發達したものであつた。その場合、根柢となつたわが固有の文化は、精神的方面でいへば前述のごとく、祖神崇敬の信仰を基調とするものであつたが、經濟的方面に就いては、次にその概略を述べよう。



女 男 踊

古代の産業

農業  
溫帯

古代の産業 わが國は四方に海を環らせる細長い群島國であり、到るところに山脈が連り、森林、原野、河川、湖沼が多いから、漁業や、狩獵や、牧畜や、農業のやうな産業が行はれてをつた。殊に溫帯に



季候風帯  
多雨地方  
米産地方  
瑞穂國の美稱

位し、季候風帯に屬し、多雨地方に屬し、また米産地方に屬する地理的の事情に由り、農業は最も主要なるものであつた。豊葦原之千秋長五百秋之瑞穂國といふ名は、稻の生産の豊富なことの美稱である。故に歴代の朝廷は、特に農業を重んじたまひ、池を造り溝を穿つて灌漑交通に便し、堤を築いて河水の氾濫を防ぎ、以てこれを保護奨励せられた。

食物

上代の食物は、植物性食料では、米が最も主要なものであつた。麥、粟、豆などの穀物、蔬菜、その他果物、海藻等も食用とせられた。動物性食料では、鳥獸、魚貝等の肉が用ひられ、鳥取部、鶉養部、海士部などといふ民もあつて、鳥や魚を取るのを職業としてゐた。

工業  
手工業

工業は幼稚な手工業であつた。石器時代における多くの遺物や、古墳の發掘品などは、その例證となるものである。神話にも養蠶機織の行はれたこと、酒の醸造されたこと、武器や、食器や、日用家具

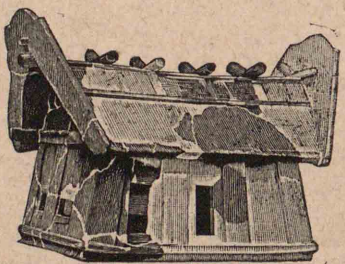
衣服

類が作られたこと、粗末ながら天地根元造といふ住宅建築が營まれたことなどが見えてゐる。

衣服の原料は、植物の纖維を以てつくつたものには、麻で織つた麻布、穀で織つた袴が多く行はれた。動物性のものでは絹があつた。

家屋

家屋は天地根元造といふ頗る簡素なもので、地を掘つて柱を建て、梁や桁は藤葛などで結び、屋根は茅などで葺き、千木、堅魚木を備へてゐた。出雲大社の大社造は、この系統の建方の最も立派なものである。



屋家輪埴

商業  
自給自足の經濟生活  
交通機關  
車、舟

農業及び工業に對して、商業は殆ど見るに足るべきものがなかつた。それは部落毎に、主に自給自足の經濟生活を營んでゐたからである。そして交通機關の發達は極めて低く、舟や車はあつたが、遠行に堪へるものではなかつた。しかしやがて交通の範圍が廣くなるにつれ、物資の交換が行はれ、商業が發生し、市場も出來たが、

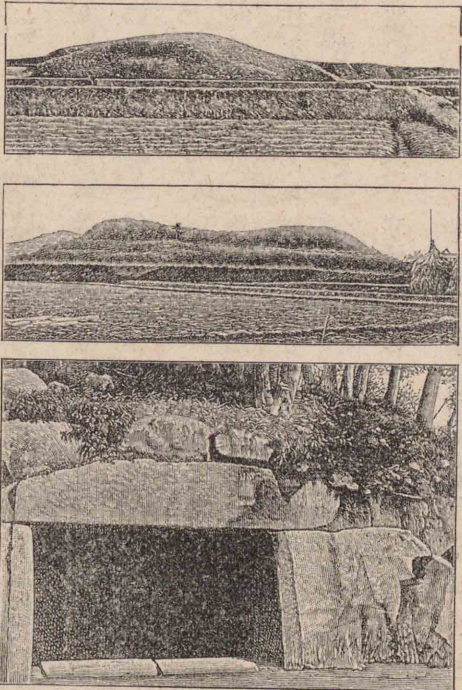


一般に極めて幼稚であつた。

古墳と上代文化  
古墳の種類

上代の文化は、記録と遺物遺蹟とによつて研究することが出来る。殊に古墳は多くの遺物を含んで、よく記録の足らざるところを補つてゐる。古墳には圓墳丸塚、前方後圓墳、瓢塚、車塚が最も多く、方墳、上圓下方墳などもある。古墳には周圍に濠をめぐらしたのもや、陪冢を有するものがある。塚の内部には廣い室があり、その中に棺を安置した。

埴輪  
埴と棺



埴石と墳圓後方前と墳圓

らした土製の埴輪には、圓筒をはじめ、人物鳥獸、家屋器具などがあつて、上代人の生活状態を有りのまゝに示してゐる。

神功皇后と古代文化の發達  
朝鮮との關係

神功皇后と古代文化の發達

わが國古代の産業は、ほゞこのやうな有様であつたが、朝鮮及び支那との交通の開けるに隨ひ、更に著しく進んだ。

朝鮮は、狭い海峡を隔ててわが國と隣りし、素戔嗚尊は、新羅に赴かれた言傳へがあり、崇神天皇、垂仁天皇の御代には、大伽羅の地方より使者の來るあり、わが國より將軍を遣すあり、朝鮮より歸化するものもあり、彼我の關係は古來密接であつた。殊に神功皇后御遠征の後、その文化は盛んにわが國に流れ入るやうになつた。神功皇后は、夙に新羅の文化の進んでゐることを知りたまひ、その都に入られては、圖籍、文書を收め、綾羅、縑絹等を買せしめられた。これは朝鮮より精神的文化と經濟的文化とを取入れられたのであり、皇后の御遠征は、わが古代文化の發達の上に一つの時期を劃せられてゐる。先づ經濟的文化に就いてこれを見れ

神功皇后の御遠征と文化の發達



歸化人と工業の進歩

秦氏

ば、これより後、應神天皇の御代、秦の始皇帝の子孫たる弓月君は百二十縣の民を率ゐ、百濟を経て歸化し、百濟王は縫衣女工眞毛津を上り、韓鍛の卓素、吳服の西素酒の醸造を傳へた仁番も亦朝鮮から内地に來た。弓月君の子孫は秦氏となり、養蠶機織の業を以て朝廷に仕へた。南支那との交通も古



絲を捻に上代婦人 (伊勢徴古館蔵)

くから存し、その地方から應神天皇の御代には縫工兄媛、弟媛、吳織、穴織が來り、雄略天皇の御代には、手末才伎、漢織、吳織、及び衣縫、兄媛、弟媛が來り、それら裁縫機織などを傳へた。朝廷はこれ等の歸化人に、或は官を與へ、或は地を給し、安んじて生業に従事せしめられた。それ等の影響により、ひとり工業ばかりでなく、農業耕作の法も改善せられ、産業の進歩が促進せられた。

儒教の影響

儒教の影響

次に精神的文化の方面を見れば、儒教と佛教とが

家族本位の道徳

傳來して、わが國の文化に大きな影響を與へたことを見出すのである。儒教は支那の孔子の開いた教である。その教は孝と悌とを重んじ、家族を大切にすることを推しひろめて、國を治め、天下を平かにする道を説いたものである。この考へ方はわが國の美風たる祖神崇敬の思想と合するところがあつたから、應神天皇の御代、百濟から、儒教の經典たる論語が獻ぜられたとき、素直に取入れられ、その後、儒教は永くわが國民道徳を養ひ育てるために働いて今日に至つてゐる。これはわが國民が外來の思想を同化して、自分の榮養となしたものに外ならないのである。

儒教の傳來

儒教の影響

論語が、應神天皇の御代に傳へられて後、皇子大鷦鷯尊、仁德天皇は父天皇の御遺志を重んずる孝により、その御弟菟道稚郎子は兄を敬ふ悌により、互に皇位を譲られた美談がある。この中には既に儒教の影響を見ることが出来る。



佛教の影響

佛教の傳來

聖德太子と國家思想

佛教の影響 佛教は印度の釋迦牟尼の開いた教である。欽明天皇の御代にこの教の傳はつたとき、排佛論と崇佛論とが分れて争つたが、これを取入れてわが國の文化を養ひ育てる道を開かれたのは聖德太子でいらせられる。太子の有つてをられた思想は、國家中心の見方であつて、敬神を主とし、右には儒教を、左には佛教を取入れられたのである。故に太子より後、佛教は次第に國家化せられ、神佛習合の風が盛んになり、また鎌倉時代にもまたわが國民が外來思想を同化して、自分の榮養となした結果である。



聖德太子

飛鳥時代の藝術

法隆寺

飛鳥時代の藝術 更に藝術に就いていふならば、支那文化と佛教文化との影響を受けて、わが素樸な藝術は、推古天皇の頃から俄かに盛んになつた。その頃を飛鳥時代といふ。大和の法隆寺の建築及びその中にある佛像彫刻などは、その時代の特色を示すものである。法隆寺は西院東院より成り、西院は南大門・中門・金堂・五重塔・講堂・鐘樓・經藏の七堂伽藍が並び立ち、東院は夢殿を中心として多くの堂舎より成る。その裡には多くの優秀なる彫刻・繪畫・工藝品等が藏せられ、藝術の匂ひ、神韻、縹緲として掬めども盡きせぬ趣を有してゐる。金堂の内にある金銅藥師像、同釋迦三尊像、五重塔の内にある塑像群、夢殿の内にある木彫救世觀世音像等は、いづれも千古

夢殿



藥師像

釋迦三尊像

五重塔内の群像



法隆寺五重塔内の群像(釋迦涅槃)

の名作と稱せられる。金堂の壁畫は、玉蟲厨子に描かれてある佛畫と共に名高いものである。また東院の北に接する中宮寺には、有名な木彫彌勒菩薩像と天壽國曼陀羅とがある。これ等の藝術の様式は、直接には、朝の美術を模せるもの、印度・ペルシヤ・東ロー

藥師像の光背の銘文である。  
釋迦三尊像は、これに師像と共に、止利鳥佛色を表してゐる。

五重塔の第一層の中心柱を廻つて、東西南北の四區に、身長一尺五六寸位づゝの多くの塑像、概ね座像が

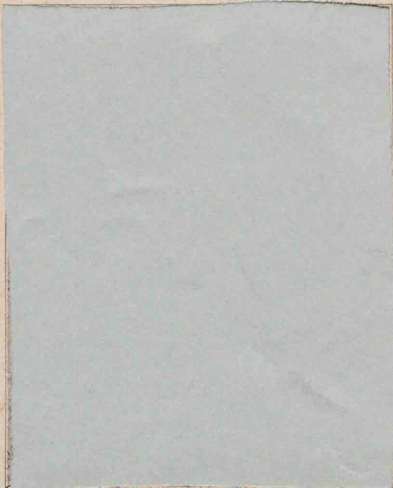
羅の っ 藥 特

夢殿

金堂の壁畫

玉蟲厨子

中宮寺天壽國曼陀羅



法隆寺金堂壁畫

あり、東面には維摩と文殊と問答の相北面には釋迦涅槃の相、西面には釋迦茶毘の相、南面には彌勒淨土の相がある。いづれも巖洞を背景とする群像である。夢殿は太子の斑鳩宮の跡に建てられた美しい八角圓堂で、八角二重の壇上に立ち、二重目に勾欄を廻らし、建築の平面は八角、屋根は八方に葺下し、中央頂上に寶珠露盤を戴き、柱も八角、内部に八本の柱を立て、その中央に佛壇があり、美しい救世觀世音像が安置してある。今ある建物は天平時代の再建である。金堂の壁畫は、四壁十二面に描かれてあり、製作の年代は和銅年間に近い頃のものと思はれる。淨土や佛菩薩を描き、その面相は天竺風を帯びて豊麗圓滿、姿勢は頗る雄渾で、莊重端麗の趣を備へた古今の名畫である。玉蟲厨子は推古天皇御所持の厨子で、宮殿風の立派な構造のものである。中宮寺の天壽國曼陀羅は、聖德太子の薨せられた後、その妃橘夫人が侍女等と共に太子の天壽國における御様子を繡で現したもので、今はその斷片を残して



外來思想の日本化

國體の本質的差異

儒教と忠孝

外 多く攝取 達せ て、本 を認

るにとゞまるが、驚くべき優秀な繪畫である。

輸入せられたる學問並に宗教は、してゐるので、わが國民は、これを血肉となし、自己の生命を成長發も大陸の諸國は、その國體においがあるから、わが國民は能くこれを取り、これに適合せざる部分を

捨てることの用意を忘れなかつた。例へば儒教は家族生活を重んじ、孝を以て百行の本となし、延いて祖先に對する大孝の貴むべきことを教へ、また國家生活を重んじ、君に忠なるべきことを教へてゐる。これはわが國の祖神崇敬の思想と合する故に、直に採用したけれども、わが國は血族によつて結合した國である故に、忠の内に孝が含まれてをり、君に忠なることが即ち親に孝なることとて

佛教の國家化

あり、忠君を以て第一とするのに反し、支那では孝の方を重んずる傾向があるから、無批判に儒教を取入れることをしなかつたのである。萬葉集に「ものふの臣の壯士は大君の任のまにまに聞くといふものぞ」とあるごとく、大君の御言葉を奉じて、踊躍して任に赴く忠誠の至情は、實に忠を第一とする國民感情の現れである。また佛教は靈魂の不滅を唱へ、祖先の靈を祭ることを重んじてゐる。これはわが國の祖神崇敬の思想に合する故に採用したけれども、その世界教たる本質を變化させて、わが國に適當なる國家教たらしめ、これによつて皇室の御安泰、國家の平和、國民の幸福を祈念するものとならしめた。このやうにして、儒教も佛教も、わが國民の偉大なる同化力により、その同じき部分を取入れられ、その異なる部分を取除かれ、日本的なる儒教と佛教とが新に構成せられ、こゝに特長ある日本思想を成長せしめたのである。而してその



祖神崇敬の信仰

強大な同化力

思想の根柢となつたものは、祖神崇敬の信仰であつた。これは實に、日本人がいつでも日本人であるところの根本精神である。この根本精神が確立してある故に、わが國民の同化力は、頗る強大なるを得たのである。同化力とは、譬へば食物を取入れて、これを自分の血となし肉となして身體の活力を發達させてゆくごとき力である。身體の活力を發達させるのに、食物を取入れる必要があるのと同じく、國民文化の發達には、外來文化を取入れることが必要であるが、わが國民の同化力は極めて健全であつたから、能く外來文化を取入れて、取捨を誤らず、これを消化し、これを吸収し、固有の文化を養つて、更に新たな文化を創つて來たのであつた。

隋唐文化と政治上の革新

**隋唐文化と政治上の革新** わが國と支那との交通は、古より行はれてゐたが、推古天皇のとき、公に國交を開かれてから、隋唐の文化が直接に流れ込み、わが政治の上に大なる影響を與へた。その

外來文化の同化

聖德太子の政治思想  
國家の發展に御留意

神祇崇敬

隋におくれる國書

憲法十七條

源は聖德太子に始まる。太子の政治思想は、國家を中心とするものでいらせられた。(1)太子は推古天皇の皇太子でおはしまし、その上、攝政であらせられ、常に國家の發展に御心を注がせられた。(2)そして特に、天皇に申し上げ、わが國は常に神祇を崇敬することによつて、國土の平安を惠まれてゐるのであるから、群臣皆心を竭して、これを拜せよといふ意味の詔を戴き、祖神崇敬の精神を宣揚せられた。(3)この敬神を主とする國家觀念は、外國に對する場合において、鮮かに現れ、支那の大國隋と始めて國交を開かれるとき、その國書に「日出處天子致書日沒處天子」と書いて、傲岸なる煬帝を驚かせ、再度の國書には「東天皇敬白西皇帝」と記して、どこまでも自國の尊嚴を示された。(4)殊に十七條憲法は、太子の國家政治に就いての思想を窺ふべき大文章であり、和の貴きことを示し、天皇の詔を奉じて私心を棄て、公事に身命を捧ぐべきことを教へ、皇室中



大化改新の精神

唐の貞觀時代

大陸文化の活用

心の國體の本義に則りて、新時代に適應する政治を施さうとなされ、その上、佛教をも取入れて、慈愛の美德を鼓吹し、國家をして世界的博愛の精神を具有せしめることに努められたものである。しかし太子は早く薨去せられたが、それより二十餘年の後に大化の改新が成された。その中心に立たれた中大兄皇子は、新に歸朝した留學僧南淵請安に就いて、最も新しい學問教育をお受けなされた。その頃は唐の太宗の貞觀時代に當り、國力は内に充實し、國威は外に發揚し、その文化は燦然として輝いてをつた。皇子は、これを見そなはして、改新を斷行して、大氏族の跋扈を抑へ、皇權を伸張せられ、孝徳天皇の皇太子として新政を翼賛しまゐらせた。この新政は、内よりいへば國體の本義に立てる政治の要求に基き、外よりいへば、隋唐の大陸文化の刺戟を受けて成されたものである。この時に方り、わが國民の特異性なる同化力は正しく發動して、能

大寶律令の特異性

女性の貢獻

經濟方面

信仰方面

く大陸文化を活用し、これをわが國情に適するやうに變化せしめてゐる。大寶律令の制定は、能くこの特質を示すものであり、唐の律令を母法としてつくられて居りながら、常にわが國情に應ずるやうに變化させてゐるのである。中央政府において特に神祇官を設け、これを諸官省の上に置いたことのごときは、實にわが祖神崇敬の國風の現れであつて、唐の制度では全く思ひ及ばざることである。

女性の貢獻

古代の社會において、女子の地位はそれ程低くない、その國家社會文藝などに貢獻するところは頗る大きかつた。

(1) 先づ經濟方面より見れば、漁業・狩獵・牧畜等動物性食料を得る産業は、概ね男子に委ねられたけれど、農業のごとく植物性食料を得る産業は、女子の勞働に依ることが多く、機織・裁縫等の工藝は、殆どその手を待たねばならなかつた。(2) 次に信仰方面より見れば、古



政治方面

代の女子は神に奉仕する大切な役目を有してゐた。このやうに  
 經濟上と信仰上とで大きな貢獻を爲すので、部落の生活における  
 女子の地位は自ら高くなり、(3)政治方面にも重んぜられ、その部落  
 の長となるものも少くなかつた。この事實は多くの事によつて  
 傳へられてゐる。農業養蠶の神でおはします豊受大神が女神で  
 いらせられることは申すも畏し、豊鍬入姫命は大和の笠縫邑にお  
 いて、倭姫命は伊勢の五十鈴川のほとりにおいて、いづれも天照大  
 神に奉仕し、それより後、常に皇女がお仕へ申し上げることになり、  
 降つて平安時代に至り、有智子内親王は賀茂大神に奉仕し、それよ  
 り後、また常に皇女がお仕へ申し上げた。天照大神に奉仕する皇  
 女を齋宮といひ、賀茂大神に奉仕する皇女を齋院といふ。神功皇  
 后は御身を以て三軍を指揮したまひ、應神天皇の御代には、長い間、  
 攝政をあそばされた。

倭姫命

倭姫命は垂仁天皇の皇女でいらせられる。天皇の仰せによりて、笠縫邑に齋きま  
 つれる天照大神に奉仕しまゐらせ、大神の鎮座したまふべき處を求めて、近江に入  
 り、美濃を廻り、伊勢に到りて、神風の伊勢の國は常世の重浪の寄する國なり。傍國  
 の可憐國なり。この國に居らまく思ふといふ神の御誨を受け、五十鈴川の清き流  
 のほとりに、大神を齋きまつりまゐらせた。これが即ち皇大神宮である。

齋宮

齋宮は未婚の皇女または女王がその任に當り、齋王ともいふ。三年の間、齋あそ  
 ばされてから伊勢に發向せられる。これを群行といふ。その御生活は清淨貞潔  
 を極めたものであつた。

有智子内親王

有智子内親王は嵯峨天皇の皇女でいらせられる。非常に聰明であらせられ、歴史  
 や漢學を深くお學びになり、詩文に秀でてをられた。四歳のとき、賀茂齋院となら  
 れ、前後二十二年間、神に奉仕したまひ、二十五歳のとき、これを辭せられ、嵯峨に退い  
 て心靜かに世を送られ、四十一歳でお薨れあそばされた。

齋院

齋院も未婚の皇女または女王がその任に當り、また齋王ともいふ。同じく清淨貞  
 潔なる御生活をあそばされた。

妻としての婦人

このやうに古代の婦人は社會上に相當な地位を占めてゐたが、妻



としては貞淑を重んじ、日本武尊の御身に代りて走水の海に投ぜられた弟橘媛雄略天皇の御徳を翼けまゐらせた草香幡梭姫皇后調伊企儼に殉じて新羅の土となつた大葉子夫を助けて蝦夷を逐ひ退けた上毛野君形名の妻などのやうな立派な事蹟を残した人が少くない。母としての慈愛はいふまでもないことであり、遣唐使に隨行する我が子を思うて「旅人の宿りせむ野に霜ふらばわが子はぐくめ天の鶴群」と歌つた心根のごときは、涙ぐましいまでに母性愛に満ちてゐる。

弟橘媛

弟橘媛は穂積忍山宿禰の女でいらせられる。日本武尊の御東征に従ひたてまつり、相模から走水の海を渡つて上總に向はれたとき、暴風が俄かに吹き起り、大浪が崩れかゝり、御船は覆らうとする有様であつた。媛はこの危機に臨み、尊の御命に代らうと祈念を凝らし、

さねさし相模の小野に燃ゆる火の火中にたちてとひし君はも

といふ御歌を残して、逆捲く浪間に御身を投ぜられた。その後七日を経て、御櫓が

草香幡梭姫皇  
后

調伊企儼の妻  
大葉子

上毛野君形名  
の妻

海邊に漂ひ著いた。その御櫓を納めて御陵をつくられた。尊は幸ひに事無く上總に著かれ更に北上して蝦夷を平げられたが、その御歸途、足柄の坂から東の方を顧みて、「吾妻はや」とお歎きあそばされた。

草香幡梭姫皇后は仁徳天皇の皇女で雄略天皇の皇后となられた。淑徳高くおはしまし能く雄略天皇を助けまゐらせ、御自身で養蠶をあそばされ、その業を奨励あらせられた。或時、天皇が葛城山に狩獵に行かれたとき、一頭の猪が怒り狂うて突進して來たから、舍人は恐れて逃げ去つた。天皇は首尾よく猪を仕留めたまひ、その舍人を誅しようとなされたところ、皇后は優しくお諫め申し上げたので、天皇は御心が釋け、舍人を免したまひ、樂しきかな、人は皆禽獸を獵る、朕は善言を獵り得て歸ると悦ばれた。

調伊企儼は欽明天皇の御代、新羅との戦に従軍して利を失ひ、敵の虜となつたけれども、これに従はず、壯烈な死を遂げた。その妻大葉子も夫と共に擒へられたが、愴然として。

韓國の城に邊にたちて大葉子は領布振らすも日本へ向きて

と歌つた。

上毛野君形名は舒明天皇の御代、將軍として蝦夷を討つたが利あらずして、却つて



その壘を圍まれ、軍衆は多く逃亡したので、意氣沮喪してしまつた。妻はこれを見て、夫を勵まし、自らその劍を佩き、弓の弦を張り、數十人の女人をして一齊に弦を鳴らさせた。形名は、これに勇氣を得て武器を取つて進み、遂に大いに蝦夷を撃破した。

婦人と社會事業

佛教が傳へられて後は、その慈悲忍辱の教を身に體して社會事業に力を盡す婦人が多くなつた。光明皇后が、施藥院、悲田院などを設け、貧民、孤兒などを救ひたまへることは名高いことである。檀林皇后、淳和天皇皇后も篤く佛教を信じたまひ、慈善の御行が多くいらせられた。和氣廣蟲の事蹟も、遍く世に知られてゐる。

光明皇后

光明皇后は聖武天皇の皇后でいらせられ、天皇を助けて佛教の普及に力を盡された。施藥院は天平二年四月、皇后宮職の下に置かれ、諸國をして藥草を買進せしめ、病にかゝつても貧しきため醫療を受けることの出来ない人々に治療せしめられたところであつた。悲田院もこれと並んで置かれ、同じく飢病の人々を療養するところであつた。續日本紀には皇后の御徳を讃へて、太后は仁慈にして、志物を救

檀林皇后

ふに在り」と記しまゐらせてゐる。檀林皇后は嵯峨天皇の皇后でいらせられる。皇后は橘清友の女で、御名を嘉智子と申し上げ、篤く佛教を信じたまひ、内外の敬重を受けさせられた。檀林寺を建て、戒律の正しい尼を置いてこれを教導せられた。また御弟に當る右大臣橘氏公と議して、學館院といふ學舎を開き、子弟に勸めて經書を學ばしめられた。

淳和天皇皇后

淳和天皇の皇后は御名を正子内親王と申し上げる。御父は嵯峨天皇、御母は檀林皇后でいらせられる。貞淑で禮容を備へたまひ、内助の功高く、早魃の年、天皇が深く御軫念あらせられるのをみそなはして、囚人に休息せしめることをお勧め申し上げたので、多くの囚人達は思ひがけなき御仁慈に感泣し、天も感動したと見えて、大雨沛然として降り、灑ぎ、萬民齊しく蘇生の思をなしたことがあつた。また或年の夏は親しく農業耕作の有様を御覽になり、農民男女に色々御下賜あそばされて、その勞を犒らはれた。御晩年にも、僧俗男女三萬人に錢貨米鹽等を施されたり、京都の貧民に物を惠まれたり、棄兒や孤兒を集め、乳母を給して養育せしめられたり、大覺寺を建て、その側の濟治院で僧尼の病氣を治療せしめられたり、慈善事業の御事が多くいらせられる。

和氣廣蟲

和氣廣蟲は有名なる和氣清麻呂の姉で、法名を法均尼といふ。天性同情の念厚く、



漫に人の短所を誹ることなく、清麻呂との友愛の情も極めて厚かつた。戦亂によつて死刑に處せらるべき人が多くあつたとき、淳仁天皇に申し上げて減刑していただいたこと、飢饉の流行したとき、棄兒八十三人を拾ひ集めて養育したことなど、立派な行が澤山ある。しかも一面には毅然たる女丈夫の面影があり、清麻呂と心を合せて僧道鏡の非望を挫き、そのために備後に流されたけれど志を曲げず、後召し還されて朝廷に重用せられ、正四位上に至り、桓武天皇の御代に卒した。年七十後、正二位を追贈せられた。日本後紀には、「人と爲り貞順にして、節操虧く無し」と讃へてゐる。

婦人と文藝

文藝の方面では、殊に勝れた才能を現した人が多く、萬葉集の歌人の中には磐姫皇后、倭姫皇后、額田女王、持統天皇を始め、たてまつり、大伴坂上郎女のやうな豊富な歌才の持主もあり、無名の婦人にして名歌を残したのも少くない。

磐姫皇后

磐姫皇后は仁徳天皇の皇后でいらせられる。天皇が他の處に行幸あらせられたとき、偲びたてまつつて詠じたまへる御歌  
君が行き氣長くなりぬ山たづね迎へか行かむ待ちにか待たむ

倭姫皇后

倭姫皇后は天智天皇の皇后でいらせられる。天皇が御病に罹らせたまへるとき詠みて奉れる御歌

額田女王

天の原ふりさけ見れば大君の御壽は長く天足らしたり  
額田女王は天智天皇の頃の人である。その春と秋とを比較して詠せる長歌  
冬ごもり春さり來れば 啼かざりし鳥も來啼きぬ 咲かざりし花も咲けれど  
山を茂み入りても取らず 草深みとりても見ず 秋山の木の葉を見ては  
黄葉をば取りてぞ忍ぶ 青きをばおきてぞ歎く そこし恨めし秋山われは  
才情流麗、春花秋葉よりも美しいものがある。

短歌

その齊明天皇の御西征に御供して下つたとき、伊豫の熱田津において詠せる  
熱田津に船乗せむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな  
これは女王の歌才を遺憾なく表したものである。僅に三十一音ながら大作といふべきものである。

持統天皇

持統天皇の御製  
春過ぎて夏來るらし白妙の衣乾したり天の香具山  
大伴坂上郎女が甥に當る大伴家持の越中守に任ぜられて赴任するときに詠ん

大伴坂上郎女



上代婦人の風俗

上代婦人の服飾

で贈った歌

草枕旅ゆく君を幸くあれと齋瓮据ゑつわが床の邊に

上代婦人の風俗

上代人の生活は簡素であつた。

野趣に満ち



上代人の服飾

後の方で結ぶこともあつた。今の島田髻のやうに結び、堅櫛を挿すこともあつた。耳には耳玉を施し、耳環を懸けることもあつた。顔に化粧をすることなどは餘り無かつたが、赭土でつくつた顔料で眉を描いたことは古書に見えてゐる。衣服は丈の短い上衣を

奈良時代婦人の服飾

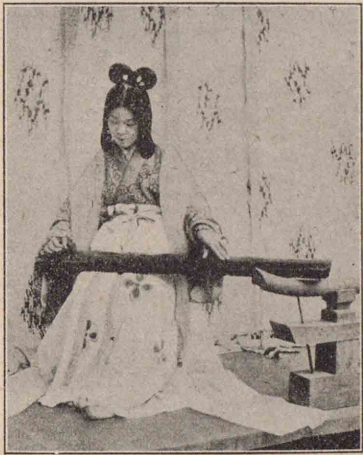
著け、その下方に長い裳を纏ふ。上衣は垂頸で左衽に合せ、紐で結び、袖は裾の長い窄袖である。裳は全幅に襞を取つたもので、上衣の上または下に著け、その紐を左脇で結ぶ。その上に帯を締め、正面または少しく左右に寄せて、その兩端を垂れる。衣服の色は大抵単色で、上衣は綠色、裳は淡赤色のことが多い。頸には丸玉、切り玉、曲玉などを連ねた美しい頸玉を懸ける。腕には手玉または釧を捲く。肩から長い領布を懸け、地に曳いてゐる。領布は絶てつくり白色である。足には布の履を穿いた。外出や旅行のときには襲衣といふものを全身に纏うた。このやうな風俗は、朝鮮や支那の風俗が傳はるに従ひ、次第に變化し、奈良時代になると、上流の婦人達は、見違へる程美しい装ひを凝らすに至つた。彼女等は、髪を二つに結び、その餘りを左右の兩頬に沿うてたるませ、顔に白粉を施し、頬に紅脂をさし、額や口の兩側に紅の點を打つて化粧とし



神事風俗

歌舞風俗

た。上衣は黄色の地に蘇芳や緑などの染料で文様を染め抜いたもの、裙は白地に褐色や薄紅などで色を重ねて縁どつた文様のあつたものなどが愛用され、美しい文様の帯を前に結び垂れ、純白の紗の領布を肩に懸けるといふ風であつた。女官の禮服に至つては、一しほ艶麗であつた。これ等は唐の婦人服装の影響を受けて發達したものである。しかし地方の婦人達は、やはり純朴なる古代の風を存して



装服の人姫族貴代時良奈

みた。その他神事に奉仕する場合の風俗は、殊に清淨を旨とし、清しい氣品を備へてをり、殆んど大陸文化の影響を受けつけないで古代の面影を保ちつゞけた。これは祖神崇敬を重んずる國民性の然らしめるところである。歌舞音曲に興ずるときの風俗は

單純にして天真流露の趣を備へてゐたが、朝鮮や支那などの樂器樂曲等の傳はるにつれ、奈良時代には著しく變つて來た。



像人女の唐

畫風屏女立毛鳥

こゝに掲げたのは、東大寺正倉院御物の中の鳥毛立女屏風畫の中の一つと、唐の女人像とである。鳥毛立女屏風は樹下美人屏風ともいはれ、六枚折一雙に六人の美人を描いてある。またこの女人像は葬式の用具として作られたものであり、豊かな潤ひのある姿に美しい色彩を施した絶品である。この二つを比べれば、結髪顔貌服装などが符節を合せるやうに似てゐることがわかる。尙ほ、本書第一學年用に掲げたる藥師寺吉祥天畫像も、豐頬娥眉の美しさが女人像に能く似てゐる。



外來文化の同  
化と國風文化  
の發達

### 第四章 外來文化の醇化

外來文化の同化と國風文化の發達 曩にも述べたごとく、日本國民は常に祖神崇敬の念を基として、儒教佛教をはじめ、すべての外來文化を受け容れ、これを同化してわが血肉となし、以て日本特有の文化を成長發達せしめたのである。これは政治制度の方にも現れてゐるが、佛教文學美術等に就いても、亦これを見ることが出来る。よつて次に奈良時代より平安時代に互り、(1)大陸との交通、(2)佛教の日本化、(3)文學の進歩、(4)美術工藝の發達に就いて外來文化の醇化して日本風になつてゆく有様を述べよう。

奈良時代と平  
安時代

奈良時代と平安時代 奈良時代とは、元明天皇が都を平城京に奠められてから、元正聖武孝謙淳仁稱徳の御歴代を経て、光仁天皇の御末年に至るまで、七代七十餘年の間をいふのである。この間

攝政・關白の  
政治



奈良鹿澤池畔

は、唐の文化を輸入して、佛教學問文學美術等が著しく進んだ時であつた。平安時代とは、桓武天皇が都を平安京に奠められてから、凡そ四百年ほどの間をいふのである。桓武天皇より數十年の間は、皇室の勢が尙ほ重く、佛教には最澄空海のごとき名僧が出て、天台眞言の二宗を傳へ、漢文學にも名のある學者が多かつたが、文徳天皇の頃から、藤原氏の一族が、皇室の外戚として漸く勢力を得、攝政關白となつて政權を握り、藤原道長に至つて榮華の限りを盡した。これより先、遣唐使の派遣が廢せられて、支那との國交は絶えたが、わが國風文化が次第におこり、國文學が發達し、書畫及び建築彫刻蒔繪織物などの美術工藝は、いづれも優美な日本趣味のもの

日本趣味



となつた。

大陸との交通

遣唐使

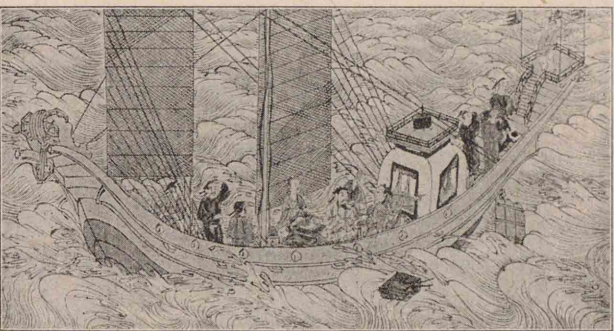
留學生

唐の文化の移植

渡航の困難

大陸との交通

奈良平安時代に互り、遣唐使がたびく、派遣さ



渡唐船

れたことは、わが文化の發達に多大の影響を及ぼした。その一行の中に加はつてゐる多くの留學生は、數年または數十年の間、唐の首都長安をはじめ、その他の地に滞在し、宗教學問、文學、美術等を修めて、これをわが國に傳へ、その風俗習慣、言語嗜好等をも齎した。遣唐使の派遣の最も盛んなのは奈良時代であり、隨つて當時の文化は唐の文化を移し植えたやうな觀がある程であつた。

遣唐使の乗船は、攝津の難波を出て、筑前の博多を經、北路に依るものは朝鮮の西岸



遣唐使印

を過ぎ、南路に依るものは、東支那海を横ぎつて渡航したが、船體が脆弱なため、往復共風浪の難を蒙ることが多く、無事に歸れぬものも少くなかつた。萬葉集に見える送別や懷郷の歌には、往往にして悲壯なものがある。

光明皇后の入唐大使藤原清河に賜はつた御歌

大船にま梶しどぬきこの吾子をかから國へやるいはへ神たち

清河は房前の子で、皇后のためには御甥に當る。叔母君としての御慈愛と皇后としての御威嚴とを併せ備へた立派な御作である。しかし清河は歸途、逆風にあつて纔に一命を全うし、爾來二十餘年間、歸朝の機會を得ず、つひに唐で歿した。

山上憶良が唐に在つて故郷を憶ふ歌

いざ子ども早や日本べに大伴の三津の濱松待ちこひぬらむ

佛教の日本化

奈良時代の佛教は、傳來佛教であり、貴族佛教で

あり、また都市佛教であつた。傳來佛教とは、朝鮮、支那などから傳來したものである故に、いひ、貴族佛教とは、皇室の御保護を受けて、主に上流社會に行はれた故に、いひ、都市佛教とは、寺院がおほむね

送別の歌

懷郷の歌

佛教の日本化

奈良時代の佛教

傳來佛教

貴族佛教

都市佛教



政治と佛教

都市の内外に建立された故にいふのである。中央の寺々はもとより、諸國の國分寺は、皆國府の内外に建てられてをつた。これは奈良時代の政府の政策が佛教保護を旨としたためであり、政治と佛教とは極めて密接な關係を有つてゐたのであつた。その弊害が現れては、政治は佛教によつて多くの波瀾を生じ、佛教は政治によつて多くの腐敗を暴露するに至つた。



唐招提寺金堂内部

國分寺

國分寺には僧寺と尼寺とがあり、僧寺は金光明四天王護國之寺といひ、尼寺は法華滅罪之寺といつた。これ等の國分寺は、國家の安寧、國民の利福を祈つて建立せられたものであり、そこに住む僧や尼は教化を掌つて、地方の文化を開發するのを任

行基

としてをつた。尼が民衆教化に貢獻したことは頗る大きかつた。當時の名僧の中、行基と鑑眞とは特に名高い人々である。行基は東大寺の資財を

鑑眞



退徳は永く傳はつた。

を盡し、諸國を巡歴して道を開き、橋を架け、池を穿ち、溝を通じ、貧民や病者を救濟し、世人に愛慕せられた。唐僧鑑眞は、聖武天皇の御時、歸國する遣唐使の船に乗つて渡來し、途中眼疾のため

盲目となつたが、心眼は極めて明らかで、朝廷の御歸依を蒙り、始めて東大寺に戒壇を建て、また

平安時代の佛教

奈良佛教と平安佛教との比較

け、平安時代に至つて、大いに佛教を振り興したのは、最澄と空海とであつた。その傳へた天台宗と眞言宗とは、支那において既に立派に發達した宗派であつた。今この二宗を奈良時代の諸宗に比



傳來佛教  
その日本化

較すれば、多少の異同がある。先づ第一に、天台眞言の二宗は傳來佛教たることにおいて奈良時代の諸宗と同様である。但し奈良時代の諸宗は支那の佛教をそのままわが國に移し植えた觀があるが、天台眞言の二宗は著しく日本化されてをり、敬神の念に富み、國體觀念が強く、皇室の御安泰・皇城の平安・國家の鎮護・國土の福祉を祈り、その教義においても、日本的な要素を多分に有してゐた。第二に貴族佛教たることにおいても、略同じである。平安時代において、佛教は未だ國民全體の生活と能く合體するに至らなかつた。そして第三には、山岳佛教たることにおいて、著しく異つてをった。山岳佛教とは、天台眞言の寺々が、概ね山岳に凭つて建立せられた故

貴族佛教

山岳佛教

にいふのである。比叡山延曆寺・高野山金剛峯寺の類である。このために天台眞言の僧侶は、自ら奢侈に遠ざかり、世俗の欲望に誘はれず、政治と關係を絶ち、戒律を守り、深山幽谷に禽獸を友とし、山林に逍遙して白雲の徂徠するを眺め、心靜かに思索に耽ることの出来る境遇に身を置かしめられたものであつた。故に彼等の間には、たゞに敬虔なる行者を出したばかりでなく、實に大器量なる碩學を輩出せしめた。

神佛習合の思想

**神佛習合の思想** わが國固有の敬神の思想と、後に傳へられた崇佛の思想とを融合させようとする努力は、佛教傳來の後間もなくおこり、聖德太子より奈良時代を経て平安時代に至ります。盛んになり、神佛習合の思想が大いに發達して來た。これによつて神社と佛寺とが同じ境内に建立されたり、神號と佛號とが一つになつたり、神體を現すのに佛體を以てするやうになり、つひに鎌



本地垂迹説



藥師寺僧形八幡

倉時代に至り、本地垂迹説が大成した。延暦寺と日吉神社、興福寺と春日神社とは、社寺が同一の境内にある例である。八幡大菩薩は、八幡といふ神號と大菩薩といふ佛號とを一つにした例である。嘗て大和藥師寺境内の八幡宮にあつた僧形八幡は、神像でありながら、佛體を以てこれを現してある。本地垂迹説とは本地たる佛菩薩が教化のために迹をわが國に垂れて、神といふ名で化現せられるといふ考へ方である。この神佛習合の思想は、要するに、わが國民性の根柢にある同化力が、外來思想を醇化して、わがものにしようとする力の現れてあつた。

文學の進歩  
漢文學  
懷風藻

文學の進歩 奈良時代には唐の文學の影響を受けて漢文學が大いに開け、懷風藻といふ詩集が撰ばれ、吉備眞備を始め、學問が博

三筆

風を秦郊迥鶉苑楚塞  
空蒼梧重剝去涿鹿霧光  
風高雲垂自天翔  
披之閱之如揭雲霧兼惠止觀妙門云  
側園惟父惟母也  
之者彼無之大覺

これは橘逸勢筆伊都子内親王願文の初めのところ、「側園、惟父惟母、慈之悲之者、彼無上大覺云々」といふ文である。

く、詩文に巧みな人が少なくなかつた。平安時代になつてからも、嵯峨天皇の前後には、小野篁都良香などの學者が輩出し、多くの詩集が撰ばれた。嵯峨天皇は深く學問を好ませられ、經史に通じ、詩文をよくせられ、殊に書道に達したまひ、僧空海、橘逸勢と共に三筆と稱せさせられる。その皇女有智子内親王も、才學秀でさせたまひ、妙齡にして既に見事な漢詩を詠ぜら



れた。その頃宮廷に奉仕する人々にして、漢文學の心得のないものはなく、詩文は絶えず行はれてをつた。

弘文天皇の御製

懷風藻の中に弘文天皇の御製にかゝる漢詩がある。これはわが國で詠ぜられた漢詩の最も古いものである。

皇明光日月 帝德戴天地

三才竝泰昌 萬國表臣儀

吉備眞備

吉備眞備は初め遣唐留學生として渡唐し後に遣唐副使としてまた渡唐し、その才學一代に秀で、官は右大臣にまで上つた。

小野篁

小野篁は詩文の才に富み書を能くし嵯峨天皇の御信任を辱うした。或時天皇は篁の才學を試みようと思召され、白氏文集唐の白樂天の詩文集の中から、閉閣唯聞朝暮、鼓登樓空望往來船といふ二句を選び出され、殊更に「空」の字を遙の字に改めて、篁に示されたところ、篁は謹んで若し遙の字を空の字に改められたならば、一層見事でありませうと言上した。このとき、白氏文集が傳はつたばかりで、世人はこれを讀んでゐなかつたので、篁の詩情は白樂天に通じてゐるといはれた。

都良香

都良香が或春の夜、羅城門の邊を通つた。當時平安京の市街は東北の方に發達し、

有智子内親王

西南の方は既に荒れ果て、羅城門のあたりは、まことに寂しかつた。良香は不圖、興に乗じて「氣霽風梳新柳髮」と口吟し、次の句を案じてゐると、門樓の上に聲があつて「水消浪洗舊苔鬚」と附けたといはれてゐる。この傳説は、良香の詩才が鬼神に通じてゐるといふことを物語るものであらう。

有智子内親王は御歳十六歳のとき、春日山莊と題する漢詩を詠せられ、天帝の御感賞を辱うした。

寂々幽莊水樹裏

仙輿一降一池塘

棲林孤鳥識春澤

隱澗寒花見日光

泉聲近報初雷聲

山色高晴暮雨行

從此更知恩願溼

生涯何以答穹蒼

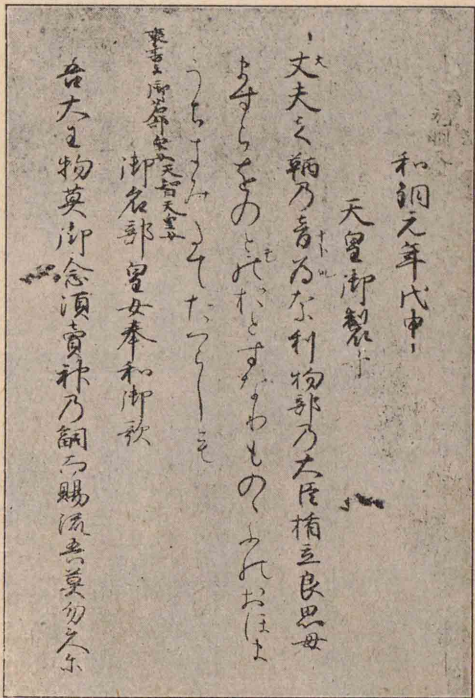
國文學  
萬葉集

その作者

國文學としては、奈良時代に萬葉集の編纂が行はれ、その中には仁徳天皇の御代より淳仁天皇の御代に至るまでの長歌短歌等四千五百十六首が收められてある。その作者は、上は天皇皇子皇女を始めたてまつり、下は名もない田夫村娘に至るまでを網羅し、ひとり京畿の地方ばかりでなく、遍く東國より西國に互つてゐる。そ



その特色



元 曆 萬 葉 集

の曲調は、素樸にして力強く、その措辭は自由にして雄渾であり、その感情は自然にして詐らず、その思念は敦厚にして敬虔の情に富み、一たびこれを緜けば、古代の日本人が天眞の聲を擧げて大天・大地の間に高唱するのを聴く思がある、古代の生活と文化とを切實に傳へて、惻

和銅元年戊申

(元明)

天皇御製歌

丈夫之輶乃音爲奈利物部乃大臣楠立良思母  
ますらをのとものおとすなりもののおほま  
へつぎみたてたつらしも

裏書云御名部皇女 天智天皇女

御名部皇女奉和御歌

吾大王物莫御念須實神乃嗣而賜流吾莫勿久爾

大伴旅人の歌

平安時代の作  
品

伊勢物語

竹取物語

古今和歌集  
土佐日記

假名文字

惻として人に迫る力がある。柿本人麻呂・山部赤人・山上憶良・大伴旅人・同家持・額田女王・大伴坂上郎女などは集中の錚々たる歌人である。

大伴旅人が筑紫太宰府の任地で妻を喪つた後、奈良の故郷の家に歸つて詠んだ歌  
吾妹子が栽えし梅の樹見るとこころ咽つゝ涙しながる

然るに平安時代の中頃から、片假名・平假名が行はれるにつれて、國文學は長足の進歩をなし、伊勢物語が出て和歌を旨とする短篇隨筆様の形を開き、竹取物語が出て敘述を旨とする組織的説話の道を開き、古今和歌集が出て勅撰歌集の魁となり、土佐日記が出て紀行文體の散文を創めた。作者としては在原業平・紀貫之・凡河内躬恒などが有名である。

片假名は漢字の片旁を略し取つて音標文字としたことから起り、奈良時代に既用ひられ、平假名は漢字の草體をとつて音標文字としたことから起り、平安時代に入つてから、廣く行はれるやうになつた。



在原業平

在原業平は桓武天皇の御孫に當り、在原姓を賜はつて臣下の列に入つた人で、和歌の名人である。伊勢物語は業平のことを書いたものだと言へられてゐる。

月やあらぬ春やむかしの春ならぬわが身一つはもとの身にして

思ふこといはでやた

だにやみぬべきわれ

にひとしき人しなけ

れば

紀貫之

紀貫之も和歌の名人であり、書にも巧みであつた。

土佐日記は、土佐守の任期

が満ちて京都に歸る途中

の有様を書いたもので、殊

更に婦人の作らしくして、

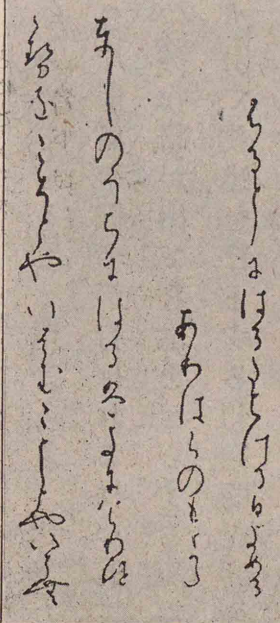
「男もすなる日記といふも

のを女もして見んとてす

るなり」と書き出してある。

古今倭歌集卷第一

春歌上



紀貫之筆蹟

古今倭歌集卷第一

春歌上

ふるとしにはるたけける日よめる

(在原元方) ありはらのもとかた

としのうちにはるはきにけりひととせをこそとやいはむこと

しとやいはむ

凡河内躬恒

貫之にも名歌が少くない。

袖ひちてむすびし水のこほれるを春たつけふの風やとくらむ

凡河内躬恒の歌も、古今和歌集の中に多く収めてある。

ほととぎす我れとはなしに卯の花のうき世のなかを鳴きわたるらむ

古今和歌集の後、室町時代までに勅撰の和歌集が二十集出来た。古今和歌集を始

め、これを總稱して二十一代集といふ。

古今和歌集  
二十一代集

女流文學の勃興

藤原氏の攝關政治が隆盛を極めた頃、女流文學が勃興し、不朽の作品が多く出て、國文學史の上に異彩を放つた。日記には藤原道綱の母の蜻蛉日記、和泉式部日記、紫式部日記、菅原孝標の女の更科日記などがあり、隨筆には清少納言の枕草子があり、小説には紫式部の源氏物語があり、千紫萬紅、色とりどりの風情がある。

右大將道綱の母

藤原道綱の母は普通右大將道綱の母と呼ばれてゐる。藤原兼家の妻となつて道綱を生んだ。人となり貞淑、殊にその子に對する慈愛が濃やかであつた。蜻蛉日記は、日記とはいひながら凡そ二十一年間に亙る寫實小説風の自敘傳のやうなも



和泉式部

和泉式部は大江雅致（雅致）の女であり、その日記は和泉式部日記と呼ばれ僅に二年間程の  
ことを書いた短篇である。

紫式部

紫式部は藤原爲時（爲時）の女藤原宣孝（宣孝）の妻である。宣孝の歿した後、貞操を守つて再嫁  
せず、一條天皇の中宮上東門院彰子に仕へた。その日記は紫式部日記と呼ばれ、中  
宮御産の前後の事などを主として記したものである。

菅原孝標の女

菅原孝標（孝標）の女は右大將道綱の母の姪（姪）である。更科日記は、著者が十三歳のとき、父  
に伴はれて、その任國上總（上總）より京都に歸ることから筆を起し、凡そ四十年近い間の  
事柄を晩年になつて後、簡潔に書き記したものである。

清少納言

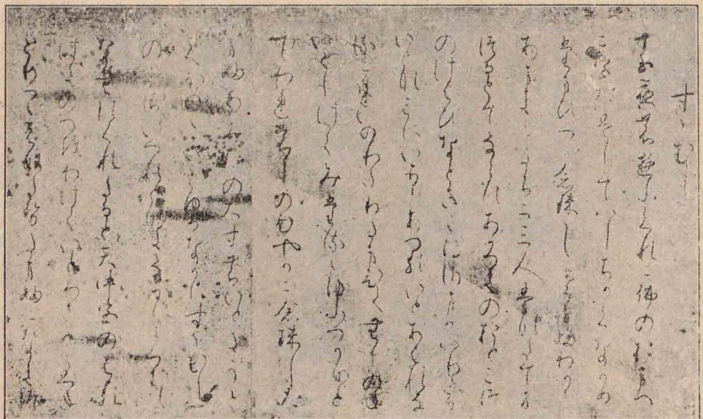
清少納言は清原元輔（元輔）の女で、一條天皇の皇后定子に仕へた。枕草子は紫式部の源  
氏物語と並んで國文學の至寶と稱せられ、簡潔で力強い名文である。左に四季の  
特徴を敘せる一文を掲げる。

枕草子

春は曙（曙） やう／＼白くなりゆく山際（山際）すこし明りて、紫だちたる雲の細くたな  
びきたる。夏は夜（夜） 月のころは更なり。闇（闇）もなほ螢とびちがひたる。雨な  
どの降るさへをか。秋は夕ぐれ。夕日花やかにさして、山の端（端）いと近くな  
りたるに、鳥の寝（寝）どころへゆくとして、三つ四つ二つなど飛びゆくさへあはれな

源氏物語

この源氏物語繪詞は鈴蟲の巻の一節であつて、今、世の中にある源氏物語の最も古いものに屬してゐる。料紙には、金泥切箔などで優美な裝飾をほどこし、あつさりした雁や小草をあしらひ、これに美しくならかな假名で本文を認め、いかにも典雅なものである。書風と繪様とから考へると、その製作年代は平安時代のものとであると思はれる。



源氏物語繪詞

り。沉（沉）いて雁（雁）などの列（列）ねたるが、いと小さく見ゆるいとをか。日入り果てて、風の音（音）蟲の音（音）など、いとあはれなり。冬は味爽（味爽）。雪の降りたるは、言ふべきにもあらず。霜などのいと白く、また更でもいと寒きに、火など急ぎおこして、炭持てわたるもいとつきづきし。晝（晝）になりて、温（温）るく弛（弛）びもてゆけば、炭（炭）櫃（櫃）火桶（火桶）の火も、白き灰がちになりぬるは、わるし（下略）。

源氏物語は紫式部の大作であつて、五十四帖ある。左に「鈴蟲」の一部を掲げる。

鈴蟲

十五夜のゆ（夕暮）ふくれに、佛のおま（前）へに、宮おはして、は（端）しちかくな（近）かめたまひつゝ、念珠（念珠）したまふ。わか（若）きあ（尼）ま（君）き（達）み（達）ち、二三人は（花）な（水）た（気）て（配）まつると（鳴）ならずあ（開）かつ（水）き（配）のお（水）と（配）み（配）つ（配）の（配）け（配）は（配）ひ（配）な（配）とき（配）



和歌の作家

こゆ。さまかはりたるいとなみにいそしあへるいとあはれなるに、れいのわたりたまひて、むしのね、いとしけく、亂るるゆふへかなとて、われもしのひやかに念珠したまふ。あみたの、大ずのいとたうとく、ほの／＼きこゆるなかに、すゝむしのこゑ、いつれとなきなかに、まつむしなむすくれたるとて、中宮のはるけきのへをわけて、いとわさと、たつねとりつゝ、はなたせたまふになきつたふるそすくなかれ。

和歌に秀でた女流作家としては、曩に小野小町・伊勢などがあつたが、攝關政治の盛んな頃、和泉式部・赤染衛門・伊勢大輔をはじめ勝れた人々が少くなかつた。

花の色はうつりにけりな、徒らにわが身世にふるながめせし間に

歸雁

伊勢

春霞たつを見すててゆく雁は、花なき里にすみやならへる

娘の小式部内侍が歿して後、小式部に賜はるべき品を、母の式部に賜はつたときに詠んだ歌

和泉式部

もろ共に苔の下には、朽ちずして埋もれぬ名を見るが悲しさ

赤染衛門

今宵こそ世にある人は、ゆかしけれ何處もかくや月を見るらむ

ほととぎす

伊勢大輔

上流婦人の生活

氏族制度の崩壊と家族制度の發達

個人的發展

上流婦人の生活 古代氏族制度の世の中では、家族といふ團結が十分獨立してをらず、婦人は常に氏族全體のために働いてをつた。然るに氏族制度が崩壊し、その中から家族制度が發達して來るにつれ、婦人はだん／＼家族生活の重要な地位を占めるやうになつた。しかし平安時代では、家族制度はまだ健全に組織されるまでに至らず、當時の上流婦人は、社會人として世間に出て働くよりも、また家族人として一家を整理するよりも、寧ろ個人としての才能を自由に發展させたものが多かつた。されば名高い女流作家達の中には、國家社會のために貢獻しようとして考へるのでも



情念偏重の傾向

婦人の教養

なく、貞淑なる良妻賢母とならうと努めるのでもなく、情念の動くに任せて流れてゆくやうな傾向が著しく見える。そして彼女等は、熱心に自己の教養に心を盡し、和漢の學問を修め、書畫音楽などの趣味を養ひ、優雅にして典雅なる美しい生活を展開していつたのであつた。殊にその風俗に至つては、日本趣味の極致を發揮したものであつた。丈なす黒髪を二つに分け、後背に垂れて末を剪り揃へ、顔には白粉を施し、眉には黛を加へ、口脂を塗り、齒黒をなした。禮装は通常十二單と呼ばれるもので、内衣・紅袴・單・五衣・打衣・表・著唐衣を重ね、裳を纏ひ、檜扇を持ち、懐に帖紙を入れ、髪上具には平

婦人の風俗



平安時代女官の盛装

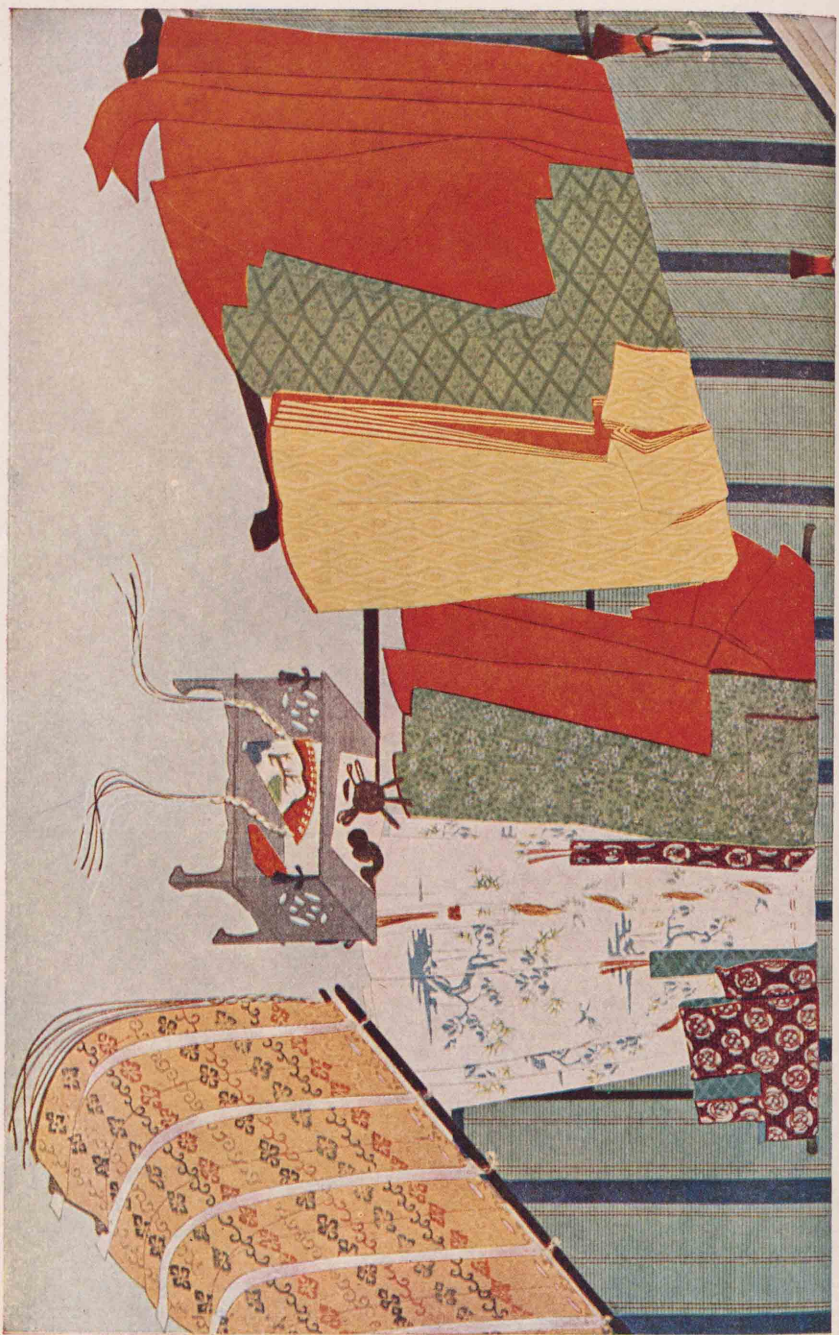
り揃へ、顔には白粉を施し、眉には黛を加へ、口脂を塗り、齒黒をなした。禮装は通常十二單と呼ばれるもので、内衣・紅袴・單・五衣・打衣・表・著唐衣を重ね、裳を纏ひ、檜扇を持ち、懐に帖紙を入れ、髪上具には平

これは平安時代女官の服飾であります。左の方の衣袴に掛けてあるのは、紅の打袴・單・五衣・打衣・表・著唐衣の五衣中央の衣袴に掛けてあるのは、紅の打衣・風が、つた萌黄・梅花の文様の表袴・桐竹・鳳凰の摺文の裳・紫地に總甲文の唐衣、これに内衣を加へれば十二單が揃ふのであります。前面にある墨塗の臺は冠臺であり、男子の場合ならば、冠や笏などを置くのであり、女子の場合故こゝではその上の段に平額、ぼん圓形をなし、薄く細長い金属片を光線形に三本附けたもの、鏡子、ベソのやうな形をしてゐる。平額の内側は、方に見え、櫛平額、の正面に見え、紫緒平額の内側は、右方に見える。平額の下邊にある二つの小さい孔に、通す丸臺が載せてあり、下の段には長い飾紐を垂れた相扇が安置せられ、その向つて右に帳紙が置かれてあります。相扇は所謂檜扇のことであり、普通檜の板三十九枚を重ね、表裏共に胡粉や金銀箔で塗り、その上に華麗な彩畫を描いてあります。尙書面の右の方に建てられてあるのは、几帳後の方長押から垂れてゐるのは簾であります。

平安時代女官の服飾



(鞍所成大畫俗風本日) 飾服の官女代時安平



お雛があります。

この屏があるのお八神鏡の式長帷たる垂屏があるの  
 華麗な深畫を誦へてあります。尚畫面の古の式が藝  
 十は妙多重味美真共に陸嶺々金銀器の飾り、ちの上の  
 ります。時辰の預備會風のころがおり普飯餅の對三  
 時辰の安置せられ、ちの向の上の神樂の置られ、ちの  
 飾り、求置の舞が、あり、千の廻りお具へ前飾を垂屏の  
 式で見える。平膝の千敷がある二この小ちの屏の  
 式で見える、平膝の五面が見える、樂懸平膝の向の上  
 の、鏡子、このみでを紙さしてある。平膝の向の上の式  
 紙さすし、舞の備具へ金銀器、水懸紙の三本柄、式も  
 る、式子の疊合、飾り、ちのおちの上の廻り、平膝、廻り、圓  
 り、長千の疊合、式と、お、この、鏡、み、紙、さ、す、置、り、の、か、も  
 飾るのがあります。前面にある、墨臺の臺、お、紙、臺、か、も  
 樂懸の、舞、甲、文、の、組、本、こ、屏、の、内、本、さ、紙、へ、屏、の、十、二、單、衣  
 衣、の、式、龍、黃、辨、紙、の、文、舞、の、裝、飾、舞、骨、鳳、凰、の、舞、文、の、舞  
 舞、文、の、正、本、中、央、の、本、舞、の、舞、り、ち、ある、お、舞、の、舞、本、舞  
 舞、の、舞、り、ち、ある、お、舞、の、舞、舞、龍、黃、舞、文、の、單、黃、紙、舞、立  
 こ、屏、の、平、安、朝、升、文、官、の、廻、飾、が、あ、り、ま、す。式、の、式、の、式、

平安朝升文官の廻飾



美術の發達

天平時代の藝術

平安時代の藝術  
日本趣味的創作

額・釵子櫛などがある。十二單の地質・模様・色合などは、身分によつてそれ／＼定めがあつた。平生は寢殿造の對屋に居り、座右の調た度る几帳・火取亂筥・唐匣鏡・鏡懸燈臺・几硯等の類、一として優雅ならざるものがない。わが婦人の服飾美は、こゝに至つて極まるといふも過言ではあるまい。

**美術の發達** 美術史では奈良時代を天平時代といひ、平安時代は更に弘仁時代・藤原時代(前期・後期)といふやうに分けるのが常である。天平時代の藝術は、飛鳥時代に傳へられた支那の南北朝式が既に著しく日本化せられた上に、新に唐式を加へ、印度西域の要素をも含み、これ等を大成したものであり、建築・彫刻・繪畫・工藝等はいづれも驚くべき進歩を遂げ、一として光彩を放たぬものがない。それが平安時代に入つてから、初めは天台宗・眞言宗の影響を受けて變化し、やがて純然たる日本趣味のものを創作して、優美典



雅な風を備ふるに至つた。これも亦、わが國民性の根柢をなす同化力が、外來文化を醇化して、つひに自己のものとなした事例の一つである。

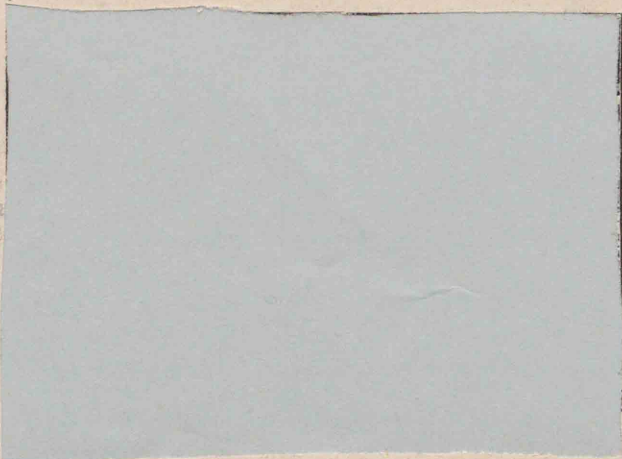
建築  
東大寺法華堂  
唐招提寺金堂  
室生寺五重塔  
醍醐寺五重塔  
平等院鳳凰堂

(一)建築 天平時代の建築の中で、最も規模の雄大なのは大和東大寺であつたが、この寺はたび／＼兵火にかゝり、今は法華堂(三)月堂、正倉院等に、昔の面影をとゞめてゐるだけである。同唐招提寺金堂は、壯大森嚴眞に當時の代表的傑作である。弘仁時代のものでは、大和室生寺の五重塔が、清楚にして可憐、人をして愛惜の情を寄せしめてゐる。藤原時代に至つては、山城醍醐寺五重塔、同平等院鳳凰堂のやうな、優雅と威嚴とを兼ね備へたものがある。殊に鳳凰堂のごときは、當代の貴族的趣味を代表した名作であり、自然美と建築美との間に、快い諧調が保たれ、外觀の優美と内部の華麗と相待ち、渾然たる美しさを現じてゐる。下

中尊寺金色堂

嚴島神社

彫刻  
天平時代

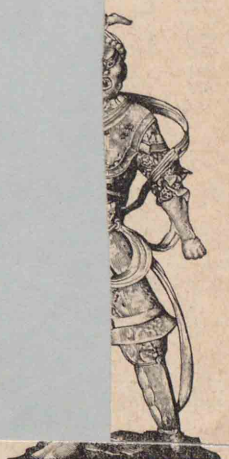


は、後世の再建にかゝる。

(二)彫刻 天平時代の彫刻には、優秀なる多くの神品があつて、世

つて、その後期に建立せられた陸中中尊寺金色堂は、規模は小さいが、七寶莊嚴の卷柱に十二光佛を圖現し、柱梁には螺鈿珠玉を鏤め、四壁内外沙羅布を以て包み、黒漆を厚塗にし、金箔を貼り、金色燦然として輝いてゐる。その他平氏の全盛を表象する安藝嚴島神社は、海を前庭とし、山を後屏として水上に建てられ、殿樓の配置は、自由にして複雑、自然の風景と照映して、繪畫のやうな調和を示してゐる。但し今の建物





執金剛神像

弘仁時代

像・神功皇后像・仲姬像などがある。

大日如世音等  
は大和八幡神  
をかさを有してゐる。弘仁時代になつて加へ

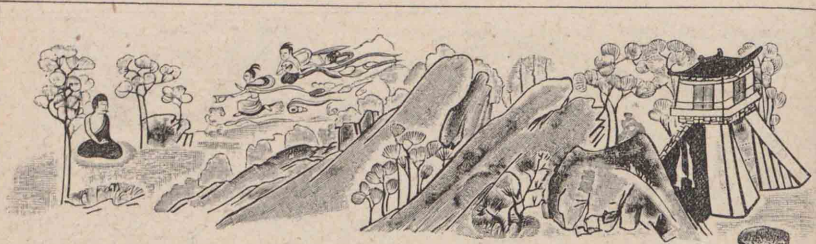


中尊寺一文字金字輪像

界的に名聲を有してをり、豊麗端嚴なる姿相を表現するに、自由なる意匠と流暢なる手法とを以てしてゐる。東大寺法華堂の不空羅索觀世音梵天帝釋山觀世音等は特に有名である。概ね

藤原時代

繪畫  
天平時代



之今日決定於此樹下結跏趺坐成无上道此地乃是過去諸佛金剛之眷餘方悉轉斯處不動堪受妙定非汝所推汝今宜應生欣慶心息憍慢意猶和識想而奉侍之是時魔王聞空中聲又見菩薩恬然不異魔心輕愧捨離憍慢即便復道還歸天宮羣魔憂戚悉皆崩散情竟沮忤元復威武詣開戰具舉橫林野當於惡魔退散之時菩薩心淨湛然不動天无相雲風不搖徐落日傳光悟更朗幽隱暗暝无復尋塵空諸天雨妙華香住衆伎樂供養菩薩

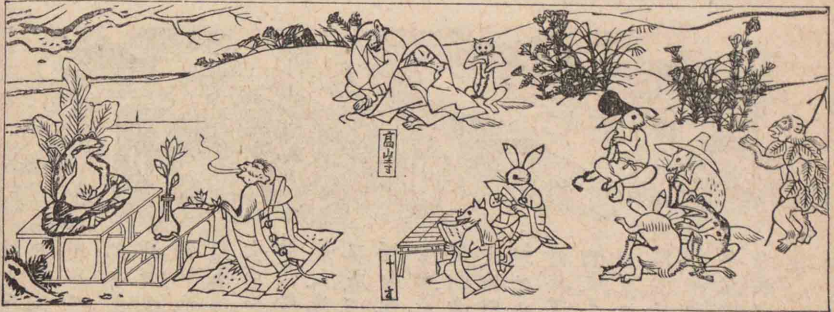
過去現在因果經

藤原時代は、藤原氏一門の貴族が全盛を極め、その美術は文學と同じく優雅典麗なる表現を以て、わが國民的趣味を十分に發揮した。平等院鳳凰堂の本尊阿彌陀如來は定朝の大作である。淨瑠璃寺の吉祥天中尊寺の一字金輪像も、溫容親しむべき名品である。  
**(三)繪畫** 天平時代の繪畫は、その彫刻と同じく、豐頬娥眉、圓滿なる相好を備へてゐる。名高い遺品に、藥師寺吉祥天、正倉院



弘仁時代  
百濟河成  
巨勢金岡  
藤原時代

宅磨爲成  
畫家の流派  
繪卷物



鳥 獸 戲 畫

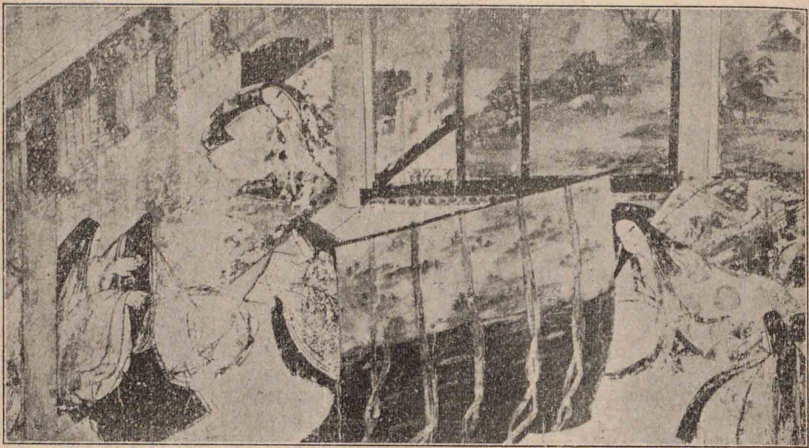
鳥毛立女屏風畫過去現在因果經などがある。その頃の畫風はまだ大陸の影響を免れてゐなかつた。しかし弘仁時代に至つては百濟河成巨勢金岡のやうな名手が出て藤原時代に淨土思想の發達するにつれて高野山二十五菩薩來迎圖のやうな華麗な大作の現れるに及んで次第に日本趣味のものとなつた。鳳凰堂の壁畫を描いた宅磨爲成も當時の巨匠であつた。この頃より畫家に流派を生じ、日本畫は著しく發達し後期に入つては、志貴山緣起鳥獸戲畫源氏物語繪卷、餓鬼草子、伴大納言繪詞のごとき不朽の名作が相ついで描かれた。

志貴山緣起  
鳥獸戲畫

源氏物語繪卷

餓鬼草子

伴大納言繪詞



源 氏 物 語 繪 卷

志貴山緣起と鳥獸戲畫とは、鳥羽僧正覺猷の筆と傳へられる。前者は志貴山の朝護孫子寺の緣起を記したもので、人物がよく躍動してゐる。後者は人物及び動物を水墨で描いてあるが動物はすべて擬人せられ筆致輕妙、奇想天外より落ちる觀のある傑作である。源氏物語繪卷は、春日隆能の筆と傳へられ、宮廷貴族の生活を主として描いてある。餓鬼草子は、風俗畫の繪卷である。筆者については所傳がなす。伴大納言繪詞は、伴善男が内裏の應天門を焼いた物語を描いた名畫である。筆者は藤原光長と傳へられる。



美術發達の大觀

以上、建築・彫刻・繪畫の發達を大觀するに、その初めは大陸の影響を多分に受けてゐるが、やがては全く醇化せられて日本趣味のものとなり、國風文化の美しさを發揮してゐるのである。

第五章 武士の勃興

莊園の發生

口分田の私有化

その他の土地の私有化 莊園

莊園の發生 大化の改新のとき朝廷は全國の土地人民を收めて、これを公地公民となし、班田收授の法を設けて國民にそれ〴〵口分田を班ち授けることとせられたけれども、六年毎に人民の戸籍を調べ煩はしい手續によつて班田を行ふのは容易のことではなく、この制度は餘り能く行はれず、口分田は次第に變じて世襲の私有地となつた。その上、初めから私有地として認められてゐたものに宅地や園地があつた。そのほか功勞あるものに賜はる賜田、功田や神社・寺院の用途に充てる神田・寺田や、新に開發する墾田なども次第に私有地化していつた。これ等の私有地を總稱して莊園といつた。莊園は公領に對する名稱である。平安時代の中頃より地方政治が亂れるのに伴ひ、自分の土地を社寺・貴族・豪族など



莊園の利益  
國司の豪族

領主  
莊官  
莊民

に寄進して租税を納める負擔を免れるものが多くなり、墾田も一層盛んに行はれ、莊園はますます増加するばかりであつた。そして莊園は不輸不入といつて、租税を納めることを免除され、また國司から直接の支配を受けないことが多かつたから、莊園を有することは、經濟上にも、政治上にも、大きな利益であつた。それ故地方官たる國司は在職中、その地位と勢力とを利用して多くの莊園を營み、人民を誅求して私利を恣にし、任期が満ちても、そのまま土著して、つひに地方の豪族となるものが少くなかつた。これ等の莊園には、領主と莊官と莊民とがあつた。領主は莊園の持主であり、領家本所などといはれることもあつた。莊官は領主の命を受けて莊園を經營するものであり、莊司ともいはれ、莊家を設けて事務を執り、莊倉を建てて莊米を貯藏し、勢を張つた。莊民は耕作に従事するものであつた。

武家階級の勃興

平安時代後期の社會情勢

武士の發生

武家階級の勃興

莊園の領主には、皇室・社寺貴族及び地方の豪族などがあつた。殊に地方の豪族は莊園を直接經營することが多く、その勢力は最も根強いものであつた。然るに平安時代後期に至り、世の中が次第に不穩となり、山賊・海賊などが横行しても、これを取締る道がなくなるに隨ひ、彼等は多くの私兵を養ひ、武器を蓄へ、武術を練磨して自ら衛らざるべからず、また國司等の誅求に堪へかねた人民は、豪族の保護の下に集まり、莊民となつてこれに臣事し、主家と運命を共にするものが多くなり、こゝに譜代主従の結合が起つた。武士は概ねこの間から發生したものである。これ等の武士團は、地方的であり、また割據的であつて、常に他の武士團と相争つてをつたが、これを統率して有力な社會的勢力たらしめたのは、中央より下れる門閥の高い貴族であつた。桓武天皇以後、皇子・皇孫等にして、姓を賜はつて臣籍に下るものが多くなり、在



武門の起り

武家の成立

原氏・平氏・源氏等の一族は、いづれも繁衍したけれども、藤原氏全盛の世においては、その力を伸ばすことが出来ず、また古來の舊族のものや、藤原氏一門中のものでも、中央において志を得なければ、しばしば地方に下るに至つた。これ等の人々は、その血統・門地によつて地方の豪族に推戴せられ、これを糾合して武士の統率者となつた。これを武門といつてゐる。かくして下から上れる武士の勢力と、上から下れる武門の勢力とが合體してこゝに武家階級が成立つに至つた。武門の中で殊に有力なのは、桓武平氏と清和源氏とであつた。奥州の藤原氏も一時盛んであつた。橘氏からは後に楠木氏のやうな名家が出た。

武家政治の成立  
地方の争亂

武家政治の成立 武家階級は初めは地方にありてしばしば争亂を起した。平將門の亂、藤原純友の亂、平忠常の亂、前九年の役後三年の役などはその事例である。これ等の争亂を鎮定するのに

源氏と東國

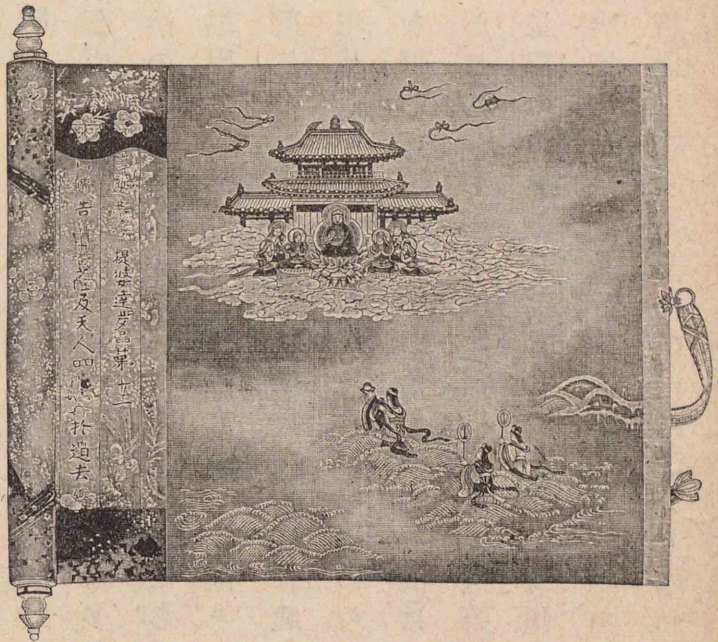
平氏と西國

平氏時代

源氏と武家政治

功のあつたのは、平氏・源氏・藤原氏などであり、殊に源氏は源頼義・同義家以來、東國に勢力を扶植し、平氏は平忠盛が瀬戸内海地方の海賊を平げてから西國に勢を得て、相並んで進んで來た。この間に藤原氏の攝關政治は衰へ、院政にも多くの弊害を生じたが、保元・平治の亂が、武家の力によつて解決せられて後、彼等は著しく政界に進出し、自己の権力を確立するに汲々たるに至つた。その初めに出了たのは平清盛であつた。清盛は武家階級勃興の機運に乗じて現れ、後白河法皇の院政を翼け、まゐらせて地歩を占め、源氏の族黨を倒して覇權を握り、凡そ二十年間に互る平氏時代を現出せしめた。しかし平氏は京都に居つて次第に貴族化し、藤原氏と同じく皇室の外戚となり、多くの莊園を所領とし、宏壯なる邸宅を營み、華奢風流を事とし、その上、後白河法皇を幽閉しまゐらせ、南都・北嶺の諸大寺を敵とし、つひに諸國より起れる源氏のために西海に没落





弟子從二位行權中納言兼皇太后宮權大夫平清盛敬白

嚴島經卷と平清盛の筆蹟

するに至った。

平氏の一門は武家より出て貴族化してしまつた。それは貴族中心の時代から武家本位の時代に移つてゆく過渡期のものであつた。彼等が高位高官に昇り、壯麗な邸宅を營み、多くの莊園を有し、歌舞音曲の修養につとめたのは、すべて昔藤原氏の一門のなしたことを繰返したのであつた。これが實質的な時代の要求に合はないので、平氏はつひに亡びるに至つたのである。しかしながら彼等が文にも武にも優れてゐた

官位相當のこと

鎌倉幕府の政治

〔一八五五年〕

守護・地頭の設置

ことは、永く後世の人の同情を得てゐる。その嚴島神社に奉納した經卷のごときは、藝術品としての不朽の美しさを誇るものである。前頁に載せた平清盛筆蹟中に「從二位行權中納言兼皇太后宮權大夫」の文字がある。大寶令の官制によれば、官には必ずこれに相當する位があり、これを官位相當と稱した。例へば大臣は正從二位、大納言は正三位を相當とする類である。若し、官に對して位の低きときはこれを守といひ、官に對して位の高きときはこれを行といつた。この場合では、中納言に相當する位は從三位であるのに、清盛は從二位であつたから、行といふのである。

源頼朝は後白河法皇の院宣を奉じて平氏を滅ぼした後、大江廣元の建策により、朝廷の許しを得て、文治元年、公領・私領の別なく、鎌倉の御家人を全國に配置して守護・地頭となし、おながら天下の政權を掌握した。守護は主として軍事と警察とのことを掌り、地頭は主として土地を管理し、租税を取立てることを掌つた。幕府はこれにより兵馬と財政との權を運用するに至つた。これ實に國史



國史における  
一大變革  
〔一九二二年〕

承久の變

剛健果敢の氣  
風

武家の女性  
家を尊重する  
思想

における一大變革である。尋いで後鳥羽天皇の建久三年、頼朝は征夷大將軍に任ぜられて、鎌倉に幕府を開き、七百年に近き武家政治の基を開いた。源氏は僅に三代で亡びたけれども、鎌倉幕府は尙ほ存続し、執權北條氏はその實權を握つてゐたところ、朝廷は武家政治を倒して政權を回復しようと思召され、つひに發して承久の變となつたが、その事成らず、北條氏は京都に六波羅探題を置いて陰に朝廷に備へたてまつり、武家の勢力は更に一步を進めた。承久の變後、北條氏はその勢に任せて公家を抑壓するばかりでなく、畏くも皇位の御繼承のことにまで干渉を敢へてするなど、僭上不臣の行爲が多く、この大逆は實に天人共に容さざるところである。

武家の女性 武家時代の社會組織は封建制度を基としたものである。封建制度では家々が土地を世襲するのであるから、家が

家族制度の發  
達

貞操觀念  
犠牲的精神  
質樸剛健

武家婦人の修  
養



鎌倉時代の婦人 外田 姿

最も重んぜられ、家系・家格が尊ばれた。武士が戰場に臨んで大音聲を張り上げ、祖先の系圖・武功を述べ、家の名譽にかけて勇戦したのは、このためである。それ故、家族制度が次第に健全となり、婦人はその内部において重要な役割を負ふやうになり、良妻賢母としての修養を積んだ。かくして(1)貞操觀念が強く、(2)犠牲的精神に富み、(3)質樸剛健なる武家婦人が多く現れるに至つた。彼女達は自ら表面に立つて社會事業に奔走しようとしなかつた。また自分の有する個人的才能を自由に發揮しようとしなかつた。それよりも先に、最も善き家庭婦人とならうと志した。彼女達は學問



毅然たる行動

を修め、武藝を學び、困苦缺乏に堪へて成長し、嫁しては夫に仕へて家事を整へ、家人を指揮し、夫をして内顧の憂なからしめ、子女を教養して堅實なる後繼者に仕立て上げること、己の任務となした。されば女性としての豊かな情操を内に湛へてをりながら、しばし明鏡のごとき明らかなる理智と、鐵石のごとき強き意志とを以て、夫のため、子のため、主家のため、君國のために毅然たる行動を取ることがあつた。建武中興、吉野時代には、殊に多くの貞烈なる女性が出て、永く芳しき遺烈を傳へてゐる。

第六章 建武中興

建武中興の理想

天皇親政

建武中興の理想 建武中興は後醍醐天皇によつて成された大業である。その大業は、天皇親政の大理想の下に行はれたものであつた。わが國は神武天皇御創業の初めから天皇親政であり、天皇が御みづから統治の大權を總攬してをられたところ、平安時代の頃、更には幕府が出来て武家政治が起つたのは、いづれも正しい道でない。故に、この三つのものを停廢して、天皇親政を實現せられたのが即ち建武中興であり、これによつて皇室中心の國體の本義が明かに宣揚せられたのである。

建武中興と學問  
佛教

建武中興と學問 建武中興の大理想を養ひ育んだ學問には、佛教と儒教と神道とがある。(1)佛教には當時二つの傾向があつた。



逃避的傾向

革新的氣分

儒教

尊王賤霸  
尊王攘夷  
神道

神宮崇拜

その一つは逃避的な氣分が強く、或は山林に隠れ、或は佛門に隠れ、或は文學に隠れ、或は偏へに來世への轉入を希ふものであつた。その二は革新的氣分が強く、天台宗や眞言宗のやうに國家鎮護の信念を旨趣とするものあり、法華宗のやうに國家意識の鮮明なものあり、禪宗のやうに強烈なる國家精神を高調するものもあつた。その革新的氣分の強い佛教に依る修養は、能く局面を打開する力を與へたのであつた。(2) 儒教では鎌倉時代に禪宗の傳來に伴ひ、朱子學が傳へられた。朱子學は宋の朱熹によつて大成せられた學問であつて、内にしては尊王賤霸、外にしては尊王攘夷の念を鼓吹し、大義名分を明かならしめる力があつた。(3) 神道は佛教と儒教とが外來思想であるのに對し、わが國固有の大道であり、天照大神の崇敬を中心とし、國體の本義に立つものである。武家時代に入りてより國民一般の間に神宮崇拜の念が非常に高まり、わが

神國思想

後醍醐天皇の  
御修養

國を以て神國となす思想が遍く行はれるやうになつた。この自覺はまた皇室尊崇の念を養ふに餘りがあつた。而して後醍醐天皇は、佛教では親しく眞言宗を學ばれ、禪宗の修養を重ねたまひ、また天台宗の奥義に達せられ、儒教では夙に朱子學に依る御進講を



後醍醐天皇

聽しめされ、神道では、固より現人神として祭祀を重んじたまはれた。されば天皇の大業を翼賛しまゐらせて、身心を捧げ盡した勤

勤王諸臣の修養

一三二四年  
一三三一年

王の公家、社家、寺家、武家の人々も、悉くその御心を以て心となし、いづれも正しき學問を修めて、日本臣民たる道を踏んだのであつた。  
勤王諸臣の修養 正中元年(1324) 元弘元年(1329)の變に方り、身を挺して勤



公家

社家

寺家

武家

王の魁となつた藤原俊基同資朝は、いづれも玄慧に就いて朱子學を學んだのであつた。元弘元年、天皇の御身に代りて比叡山に登つた藤原師賢も、朱子學を修めた人であつた。後醍醐天皇、後村上天皇に歴任して、吉野朝廷柱石の名臣と謳はれる北畠親房は、神儒佛の三教に通じた人傑であつた。神宮をはじめ諸國の神官には、勤王の士が多かつた。比叡山、高野山等にも勤王の僧侶が多かつた。楠木正成、新田義貞、名和長年、菊池武時等、燃えるやうな尊王心を以て戦線に立つた武將の修養を見ると、いづれも敬神の念に富み、儒佛を學んでゐたことを知り得るのである。殊に楠木正成のごときは、純忠至誠、鬼神をも感動せしめるものがある。わが臣道の精華は、眞に楠公に至つて極まれりと謂ふべきである。

中興政治の瓦解

**中興政治の瓦解** 建武中興の理想は、天日のごとく、永く青史を照らしてゐるが、中興の政治は、遺憾ながら久しからずして瓦解す

中興政治の特質

公武混合の政治

紛雜なる世情

るに至つた。それは公武の融和が缺けてゐたからであつた。中興の政治は、(イ)幕府を倒し、(ロ)院政を行はれず、(ハ)攝政關白を罷め、而して(ニ)皇族を諸方に派遣せられ、(ホ)國司を任命したまひ、飽くまで天皇親政の本義に立つたのであつたが、中興の大業に就いて功があつた諸臣は、それ／＼重用せられたので、勢ひ公武混合の政治が行はれることになつた。然るに公家と武家とは衣食住を異にし、風俗習慣を異にし、思想感情を異にし、公家は武家の粗野なるを侮り、武家は公家の傲慢なるを憤り、政務は澁滞して進まず、賞罰はやゝもすれば公平を缺き、紛然雜然たる世情を呈するに至つた。これが武家政治の再興を期する足利尊氏の乗ずるところとなり、護良親王は、尊氏を除かうとして却つて非命に斃れたまひ、楠木正成、新田義貞も、尊氏を倒さうとして、また戦場の露と消え、中興政治は瓦解するに至つたのである。



吉野時代

一三三六年  
一三九二年

努力血涙の記  
録

吉野時代 延元元年、後醍醐天皇が吉野に遷幸あらせられてよ  
 り、後村上天皇、長慶天皇を経て、元中九年、後龜山天皇が京都に還幸  
 あらせられるまで前後五十七年の間を吉野時代といふ。その歴  
 史は中興の理想を回顧しつゝ、その大業を回復しようとする努力  
 と奮闘と血涙と熱情との記録であつて、人をして感奮興起せしめ  
 る事蹟が極めて多い。後醍醐天皇は吉野の行宮において崩御あ  
 らせられるとき、玉骨は縱令南山の苔に埋るとも、魂魄は常に北闕  
 の天を望まんと思ふ。若し命を背き義を輕んぜば、君も繼體の君  
 にあらず、臣も忠烈の臣にあらずと仰せ残された。後村上天皇は、  
 鳥のねに驚かされて曉の寢覺しづかに世を思ふかな  
 とお詠みになられた。長慶天皇は  
 治まらぬ世の人事の繁ければ櫻かざして暮らす日もなし  
 とお詠みなされた。憂世愛民の聖慮の程長き極みである。され

ば御歴代に仕へ奉れる諸臣も、北畠親房が身の憂さはさもあらば  
 あれ治まれる世を見るまでの命ともがなと詠ぜる心を以て心と  
 なし、楠木正行も、新田義興も、菊池武光も、結城宗廣も、刀折れ矢盡き  
 一門を擧げて肝腦地に塗るゝまで、皇運を扶翼したてまつるため  
 に戦つたのであつた。

皇族の御苦心

護良親王

尊良親王

恒良親王

皇族の御苦心 建武中興吉野時代を通じて、殊に感激に堪へな  
 いのは、後醍醐天皇の諸皇子が、金枝玉葉の貴き御身を以て、親しく  
 軍事に身心を勞したまへることである。護良親王は比叡山の僧  
 兵を手懐けられ、後吉野に據つて令旨を發せられ、諸國勤王の義軍  
 を召されて、回天の大業を翼賛しまゐらせた。尊良親王は北條高  
 時のために土佐に流されたまひ、後、足利尊氏の叛するに及び、皇太  
 子恒良親王を輔けて越前金崎城に下り、つひに悲壯な御最期を遂  
 げさせられた。恒良親王は御年もゆかないのに、越前に在つて北



義良親王

宗良親王

國の官軍に號令あらせられ、つひに尊氏のために御痛はしき御最期を遂げさせられた。義良親王は陸奥にお下りになり、北畠氏を指揮して軍旅にいそじまれた。親王は後、御即位あらせられて、後村上天皇となられた。宗良親王は遠江・信濃・甲斐等の諸國を經略して威を振はれ、關東に進出しては新田氏の軍を指揮して鎌倉を攻略されたことがある。親王は勝れた歌人でおはしまし、その君のため世のため何か惜しからむ捨てて甲斐ある命なりせばといふ御歌は、千載の下、儒夫をして起たしめる概がある。また懷良親王は、征西將軍として九州に下りたまひ、菊池氏等の官軍を指揮して奮闘あらせられた。

懷良親王

貞烈なる女性

**貞烈なる女性** 建武中興・吉野時代において、多くの忠臣義士が輩出し、君のため國のために身命を捨てて戦つた背後には、常に貞烈なる女性の姿が見られる。彼女等は正しき學問と修養とによ

楠公夫人

りて大義名分を辨へ、君國のためにすべてを捧げて奉仕すべき確乎たる信念を有し、これに依りて夫を助け、子女を教養し、臣道の精華を發揮せしめた。しかし彼女等は、常に家を以て自分の據所となし、進んで社會の表面に立たうとはしなかつた。楠公夫人はその典型的な婦人であつた。夫人は楠公の最も良き理解者であつた。夫人は楠公精神を以て自己の精神となし、公をして後顧の憂を懷かず、十分に外で活躍することを得しめた。公が湊川で戦死された後、十一歳の正行の自害をとめて、泣く泣く教訓せられた言葉は、理あり、情あり、血あり、涙あり、殆んど人界を絶せる聲であつた。それは聰明なる理智と、溫和なる情操と、鞏固なる意志との最も能く調和せる立派な性格の裡から出る天來の聲であつた。正行・正時・正儀の三人の愛子は、母の教育の下に成人して、それ／＼父の志を継ぎ、忠臣孝子として讃へられてゐる。夫人は楠公の生前



においても、その死後においても、楠木氏の一門族黨を統率してその結合を保たしめながら自ら表面に立つことなく、終始一貫家に没入し、その家を舉げて君に没入せしめたのであつて、わが國における良妻賢母の最大の典型を示されたのであつた。その他瓜生保の母、辨内侍等の烈女が少くない。

瓜生保の母

辨内侍

瓜生保は越前杣山城に居て、金崎城の官軍を後援したがその戦況が利を失つたとき保の母は一族を勵まし、頽勢を挽回して奮戦せしめた。辨内侍は後村上天皇に仕へてゐた宮女である。天皇は内侍を楠木正行に賜はつたところ、正行は討死を覺悟してゐたので、これを辭しまゐらせた。しかし内侍は貞烈の志を以て、正行の死後、尼となり、一生を終つた。

建武中興・吉野時代の回顧

甚大なる道德的影響

建武中興吉野時代の回顧 建武中興吉野時代の歴史は、國體の本義に基き、天皇親政の理想を實現せんがために奮闘した記録であり、その後世に及ぼす道德的影響は甚大なるものである。御歴代の御宸慮は申すも畏し、皇族の御方々の御苦心も更なり、多くの

回顧と感激

忠臣義士が身を捨て、家を忘れず、すべてを君に捧げたてまつりて臣民たる本分を全うした事蹟は、恰も張りつめたる鋼鐵の線を彈奏するやうな力強さを以て、人心を感發せしめるのである。されば近世に至り、學問の進歩するに隨ひ、當時の歴史を回顧するものは、異常な感激を以て、或は楠木正成父子の純忠至孝を慕ひ、或は新田義貞一門の忠勇義烈を思ひ、菊池名和結城、北畠諸氏の高風を仰いで、或は遺績を顯彰し、或は事實を闡明し、詩に詠じ、畫に描き、つひにはその志を繼承して中興政治の理想を將來に實現せんと企てるやうになつた。明治維新の大業の成されるに至つた思想的原因を討ねれば、その中には實に建武中興吉野時代の歴史の影響を多分に見出すのである。

明治維新の思想的因

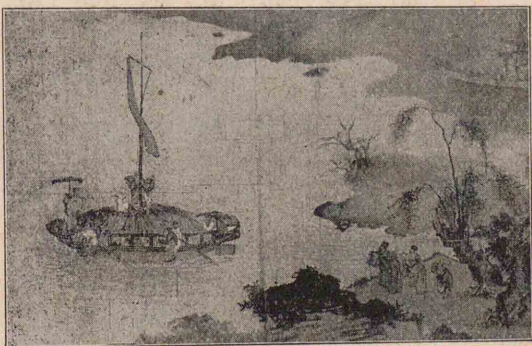


宋・元・明文化  
の影響

### 第七章 東山時代の文化

儒教  
朱子學の傳來

宋・元・明文化の影響 建武中興の大業が破れ、悲壯なる吉野時代が過ぎて後、武家政治が復び行はれ、室町時代が來つた。これより先、平安時代の中頃、遣唐使が廢せられて後も、支那との交通は、尙ほ民間において行はれ、宋・元・明の間を通じて、大陸文化は絶えず輸入せられ、わが文化の發達に常に刺戟を與へた。その影響は、鎌倉時代より室町時代に互つて著しく現れた。(1)儒教は宋において大いに發達し、ひいて明に及び、その間に朱子學と陽明學とが起つた。その中、朱子學は鎌倉時代に既にわが國に傳はり、



遣明使の乗船

陽明學の傳來  
佛教

文學



西

玄慧はこれによつて後醍醐天皇に經書を進講しまゐらせたことがある。その學風は禪僧に養はれて永く繼承せられ、つひに藤原惺窩を起したしめるに至つた。尙ほ陽明學は下つて江戸時代に至り、中江藤樹によつて興された。(2)佛教は宋に至り、禪宗が盛んに行はれ、美術・工藝にも禪味を帶びしむるに至つた。そして鎌倉時代において、榮西・道元がこれを傳へ、また宋の名僧が相ついで渡來するに及び、禪宗は公武に尊信せられて發達し、室町時代に入りては、臨濟宗では京都五山、鎌倉五山等の寺々、曹洞宗では永平寺・總持寺などが並び立ち、多くの名僧を輩出せしめた。(3)宋は唐について詩文の盛んな時代であり、歐陽修・蘇東坡等の大家が出た。また元には劇文學の發達するあり、明も亦學術が



五山文學

一 休宗純



休

大いに行はれた。それ等は自らわが國に傳へられ、殊に室町幕府の頃、五山の僧侶は幕府の外交に與り、また遣明使に充てられて、しばしば渡海し、彼土の文藝を修めるものが多く、所謂五山文學は、前後に異彩を放つてゐる。

大徳寺の僧一休宗純は、五山の僧侶などが、たゞ文學に耽つて、佛學の心法を疎かにするもののあるのを慨き、世間を放浪し、殊更に奇行を以て世人を警醒した。

東山時代の繪畫

宋の繪畫

東山時代の繪畫

將軍足利義政の頃、前後數十年に互る間は、特に東山時代といはれ、美術に異彩を放つた時代であつた。元來宋は美術の盛んな國であつて、繪畫には、北宗畫に馬遠、夏珪、梁楷等が出て、南宗畫に米芾が出て、いづれも山水畫に名筆を揮ひ、花鳥畫には、徽宗、李安忠があり、佛畫、人物畫には李龍眠があり、水墨畫で花果鳥獸を描いた大家には牧谿があつた。これ等の畫風は元明を經

東山時代の名家

明兆

如拙

周文

雪舟

狩野正信

土佐光信

狩野元信

及

禪宗趣味の普

建築

金閣

銀閣

及

禪宗趣味の普

建築

金閣

銀閣

及

禪宗趣味の普

建築

金閣

銀閣

て、いづれもわが國に傳はり、東山時代の前後に互つて、多くの名家を輩出せしめた。中にも人物の畫を善くする東福寺の僧明兆、山水に巧みな相國寺の僧如拙、周文及びこの畫風を大成して神技絶妙、古今に秀づる雪舟のごときは、その錚々たるものである。狩野正信は雪舟の推舉により、宋元畫を以て將軍義政に仕へた。土佐光信は流麗にして緻密なる畫風を以て大和繪を中興した。正信の子元信は父の畫風を受けて雄健なる筆法を學び、また光信の畫風をも修め、和漢の粹を抜いて別に新生面を開いた。

**禪宗趣味の普及** 禪宗は、學問や文學や、繪畫のほか、建築にも影響し、茶道、花道、香道などを發達せしめた。先づ建築では、禪宗の隆盛に伴ひ、禪宗様が次第に行はれ、金閣、銀閣のごとき美術建築を成すに至つた。金閣は平安時代の寢殿造に禪宗の寺院風を折衷せしめた樓閣であり、銀閣は更にこれに禪僧の學問所たる書院造の

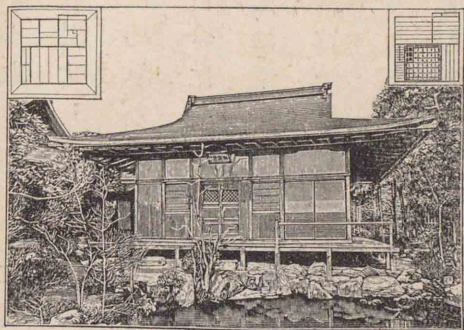


書院造

様式を加味せしめた樓閣である。書院造は、この後一般住宅の様式となつたもので、入口に玄關を設け、室内に疊を敷詰め、襖・明障子を以て間毎を仕切り、上段に床の間・違棚を設け、床には畫幅を懸け、その前には枝振の面白き挿花を活け、名香を薫ずる香爐を置き、極めて雅致の豊かな構造のものである。

金閣

銀閣



慈照寺東求堂  
右上方天井の組方 左上方の室疊の敷方

金閣は足利義満の山荘内に建てられたものである。この山荘は後に寺とせられ、鹿苑寺となつた。銀閣も亦足利義政の山荘内に建てられたものである。この山荘も後寺とせられ、慈照寺となつた。銀閣は禪宗建築と邸宅建築とを融和し、庭園と美しい配合を保たせたもので、上層は禪宗様、下層は書院造・瀟洒たる日本趣味を現してゐる。上層を心空殿といひ、屋根は寶形造・頂上に銅鳳をいたゞき、方三間内外黒漆、但銀は塗らずに終つた。下層

東求堂

は潮音閣といひ、純然たる書院造である。銀閣の傍に東求堂がある。東求堂は元來持佛堂で内部は四間に分れてゐる。その中の八疊は佛間で、左方に佛壇厨子があり、右方と後方とは襖をたててある。四疊半は、中央に爐を切つた小書院で、後方には六尺の書院構と三尺の違棚とがある。これが四疊半茶室の起原といはれてゐる。今日では茶室といへば四疊半を聯想するが、當時の茶室は大きいのは七疊位、小さいのは三疊位、その中間のものも色々あり、また茶室だけで獨立するものもあり、東求堂の茶室のやうに大きい建物の一部分をなしてゐるものもあつた。東求堂の茶室には同仁齋といふ名がある。

茶道の發達

茶は平安時代の初め、既にわが國に傳はつたが、鎌倉時代の初め、僧榮西が宋からこれを齎し、養生の仙藥としてこれを薦めた頃から、漸く世間に愛用せられ、吉野時代の頃には、武士の間に茶會の催しがあり、茶の湯の法式も定められ、東山時代から一層盛んになつた。時の將軍義政は趣味が廣く、茶の湯に通じ、花道・香道を解し、園藝を愛し、書畫を好み、猿樂を賞し、藝術の發達に貢獻するところが大き



かつた。義政の茶の會に侍した人々で名高いのは眞能・珠光などである。眞能は能阿彌ともいひ、その後に眞藝(藝阿彌)眞相(相阿彌)などがあつた。珠光は茶の故實に通じ茶の法式を定めた。珠光の流を汲むものに、武野紹鷗・細川幽齋・今井宗久・千利休などがある。利休は織田信長・豊臣秀吉の茶の湯を輔導した大宗匠であり、近世の茶道の諸流派は殆んど悉く利休から出てゐる。

茶道の流派

利休の子孫は表流・裏流・武者小路流の三派に分れた。近世茶の湯の流行に伴ひ、織部流・籤内流・遠州流・石州流などの流派が起つた。

花道の發達

美しい自然に包まれたわが國人は、古より草木の花を愛賞する趣味を有し、神話にも木花開耶姫の物語があり、平安時代には満開の櫻が大きな花瓶に挿してあるのを見て歌を詠んだ話や、多勢で花を採り集め、組を分けてその美しさを競つた話があり、既に多少の技巧を加へる程であつた。それが室町時代になると茶の湯と同

香道の發達

じく寺院で育まれて、花道が發達するやうになり、京都六角堂の執行池坊は、立花の宗家となつた。香木は奈良時代にも傳來されてをり、平安時代には薰物合の遊戯が行はれたり、香を焚いて清香を賞する風が次第に普及し、室町時代には種々の法式が整ひ、多くの流派を生ずるに至つた。

婦人の風俗  
服飾

婦人の風俗 上流婦人の晴の装は、やはり十二單であつたけれども、大抵は省略して用ひられた。殊に唐衣と裳とを著けず、袴を著けたばかりの略装が行はれ、つひには袴の代りに湯卷が用ひられて正服用の服飾となつた。湯卷はもと下級の女官の使用したもので、白絹でつくられてゐたが、正装用となるにつれて華麗なる色彩を用ひ、下つて桃山時代に至つては、絢爛目を奪ふばかりに美しきものとなつた。小袖ももとは下著であつたが、やがて公服として用ひられるやうになつた。また外出のときは、鞋を著け、切袴を



髪

穿き、表著をかけ、市女笠を被り、若し市女笠を用ひないならば、頭の上  
 上に表著を被つて出るのであつた。髪は公武貴賤共に垂髪を尙  
 び、頬の兩脇の髪だけを凡そ二尺程に剪り、これを鬢批といつた。  
 中流以下の婦人は垂髪であるが、成るべく短く剪り揃へて、元結に  
 て束ね後に垂らすやうになり、或は髪を頭上で束ねたり、布で頭を巻包むものもあつた。



室町時代の婦人の外出姿

女兒の諸儀式

女の兒が生れると先づ髪を剃り、それが伸びて後二歳になると髪置の式を行ひ、四  
 歳になると深會木の祝を行つて伸びた髪を剪り、十六歳になると鬢會木の祝を行  
 つて鬢末を剪つた。この鬢會木は女の元服であつた。

婦人の修養

上流婦人は和歌や書畫や音曲などを學び、茶の湯や活花や聞香な  
 どを習つた。東山時代は鎌倉時代からの武家文化が漸く變つて、

東山時代の文化の後世に及ぼせる影響

近世的な文化の流れ出る時であつたので、この頃の婦人の趣味は、  
 後世の婦人の往く道を開いたのであつた。

儒教

東山時代の文化の後世に及ぼせる影響 東山時代の文化は、禪  
 宗趣味を基調となし、淡泊幽玄の趣を備へ、格調の高いものであり、  
 後世の文化に大いなる影響を及ぼした。(1) 儒教では、當時禪僧に  
 よつて養はれてゐた朱子學は、安土桃山時代に至つて藤原惺窩を  
 起たしめ、尋いで江戸時代の初めに林羅山を出だし、つひに近世に  
 おける一大學派となつた。(2) 佛教では禪宗が大いに重んぜられ  
 た外、淨土眞宗には蓮如が出て教團の勢力を推しひろめ、法華宗  
 も次第に民間に弘まり、共に教風の根柢を固くし、今も遍く行はれ  
 てゐる。(3) 文學では禪僧の詩文は、近世の漢文學の先驅をなし、當  
 時勃興した連歌は、近世の俳諧の道を拓き、謠曲・狂言は近世に入つ  
 てますく、普及し、今日においても、廣く愛好せられてゐる。(4) 繪

佛教

文學

繪畫



建築

茶の湯・活花・香道

現代文化と東山時代文化

畫では雪舟によつて代表せられる水墨畫をはじめ、狩野元信において大成せる狩野派及び土佐光信によつて新生面を開ける土佐派は、いづれも近世に入りて畫界に重きをなし、延いて現代に及んでゐる。(5)建築では書院造は、次第に一般民衆の住宅に取入れられるやうになつた。(6)茶の湯・活花・香道に至つては、遍く上下に行はれ、多くの名流を出だし、現代においても、必要なる修養として重んぜられ、國民の間に高尚なる趣味を涵養してゐる。このやうにして現代の文化は、遙かに東山時代の文化にその淵源を求め得られるものが少くないのである。

第八章 社會の革新

中世より近世への移行

政治上の統一  
地方分裂の大勢

中世より近世への移行 室町時代の末期なる戰國時代より安土・桃山時代を過ぎて江戸時代の初期に至る間は、世の中の移り變りの激しい時期であり、社會の各方面に互つて革新が行はれ、政治も、經濟も、思想も、風俗も、中世的な色彩を失ひ、すべてが近世的な装ひを凝らして面目を新にした。

政治上の統一 室町時代は初めから中央集權の力が弱く、應仁・文明の大亂を経て、地方分權の勢はますます進み、社會は分裂に重ぬるに分裂を以てし、大小の群雄が、それ／＼各地に割據して相争ひ、戰國時代を現出するに至つた。然るに分裂が甚しくなると、勢力はおのづから微弱になり、獨力を以てしては他のものと對抗し難きたため、利害を同じうするものは互に結合して助けあふ必要を



## 地方的小統一

織田信長・豊臣秀吉の統一事業

生じ、競争の裂しくなるにつれて地方的に小なる統一が行はれはじめた。この氣運は次第に進んで、つひに強は弱を兼ね、大は小を併せ、諸雄の聯合と抗争とを生じ、潑刺たる世相を呈した。北條氏康、武田信玄、上杉謙信、今川義元、徳川家康、織田信長、毛利元就、長曾我部元親、大友義鎮などは、この線上に活躍せる英雄であつた。その間において、織田信長が先づ中央に大旆を押し立て、三十餘國を平定したけれど、中道にして斃れ、その將豊臣秀吉がこれを承継いで、つひに全國の統一を完成するに至つた。信長・秀吉の統一事業は、今まで行はれてゐた地方的な仕組を、悉く強大なる中央權力の下に取り入れ、これを一様に改めてしまつたのであり、土地は檢地によつて新に測量せられ、交通は關所を撤廢せられ、道路橋梁は修築せられて便利になり、貨幣は全國に使用せられるものが造られ、商工業は保護せられ、政治の組織も整へられた。その上、秀吉は國

徳川家康の統制政治

分裂より統一へ

社會機構の變化

莊園制の崩壞

農民の地位の變化

民の發展的氣風に乗じて海外を經略する雄圖を懷き、兵を朝鮮に出し、國威を發揚した。徳川家康は、その後を承け、國內においては幕府政治を開き、諸侯を抑へ、法制を整へ、また強大なる中央權力を以て、土地にも、交通にも、貨幣にも、商工業にも、すべての國民生活に統制を加へ、外においては平和的外交の方針を取り、商業貿易を保護獎勵した。その後、幕府は、主として天主教の問題に累はされて、鎖國を斷行し、専ら内治に力を用ひ、つひに近世の泰平に達したのである。即ちこの期間において、政治は分裂より統一に邁進したのであつた。

## 社會機構の變化

平安時代の中頃以來、國民の經濟生活の基礎となつてゐた莊園制は、室町時代の中頃より著しく崩壞しはじめ、信長・秀吉・家康の檢地を経て、昔の面影は無くなり、新なる土地知行の仕組が發達した。これに伴つて農村の組立方が變化し、農業を



○ 商工業者の地位の進歩

經營する方法も進歩し、農民の地位も亦變つた。農民は大寶令の兵制では國民皆兵であつたので、徴兵によつて軍務に服し、武家階級の勃興するときは、彼等の間から武士が分れて出たのであり、武家時代になつても、武士は概ね農村に住んでゐたので、兵農の關係は常に密接であり、戰國争奪の頃には、農民も武器を携へて自ら衛り、或は一揆騒動を起し、或は戰場に馳驅するものもあつた。然るに秀吉は、全國に刀狩を行つて農民の武器を沒收し、徳川幕府に至り、ますます兵農の分離を嚴重にし、農民を抑へて、たゞ土地を耕作し、年貢を納めさせるだけのものにした。これに對し、商工業者は、鎌倉時代頃から次第に勃興し、信長・秀吉・家康等の保護を受けて發達し、近世に入りては町人と呼ばれて社會上に地歩を占めるに至つた。かくして武家を主とし、町人・農民等の階級が定まり、それぞれの身分制度が確立するに及び、社會機構は、全く近世的特色を有

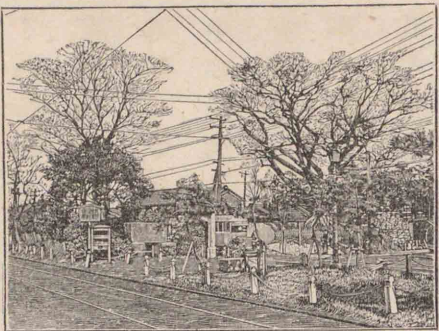
するやうになつた。

經濟生活の發達

交通の進歩  
關料  
渡船料  
戰國時代の道路  
織田信長の交通政策

經濟生活の發達

(イ) 戰國時代には、中央政府の威力が衰へたので、地方の領主や社寺などは、恣に關所を設けて關料を徵收し、港や



渡場には船を備へて渡船料を貪り、また軍略の必要上、殊更に道路を險惡ならしめることが多かつた。然るに織田信長は上洛の始め、里先づ諸國の新關を撤廢し、それより交通政策に心を用ひて道路に改修を加へ、大路小路を分ち、今までの六町一里を改めて三十六町一里となした。豊臣秀吉も、交通のことに心を

用ひ、殊に朝鮮出兵の際には、大阪と肥前の名護屋との間に驛傳の制を用ひた。江戸幕府に至り、更に全國に互りて交通を整理し、街道を開き、並木を路傍に栽え、一里塚を設け、次第に沿海の航路を開



商工業の進歩

座の制度

貨幣制度の整頓

樂市・樂座

通せしめた。(ロ)そして交通の發達するに伴ひ、人馬の往來、貨物の運搬が便利になり、商工業が著しく進歩した。中世の商工業は、これに従事する同業者が集つて座といふ組合を組織し、領主から多くの特權を與へてもらひ、これに加入しないものには、その業に従事することを許さない仕組によつて行はれた。これは商工業者の營業を保護し、無益の競争を避けさせ、城下町を繁榮ならしめ、領主の財源となる利益があつたが、反面には、座に屬するものが、權利を獨占してわがまゝとなり、これに屬せざるものを壓迫し、却つて商工業の進歩改善を妨げる弊害もあつた。信長はこれを見て、樂市・樂座を許し、商工業者をして自由に賣買せしめたが、これは商工業における大いなる革新であつた。尋いで秀吉・家康も商工業者に保護を加へ、課税を軽くしてその發達を圖り、近世の隆運を見るやうにならしめた。(ハ)商工業が進歩すれば、取引に用ひられる貨

都市の繁榮

城下町

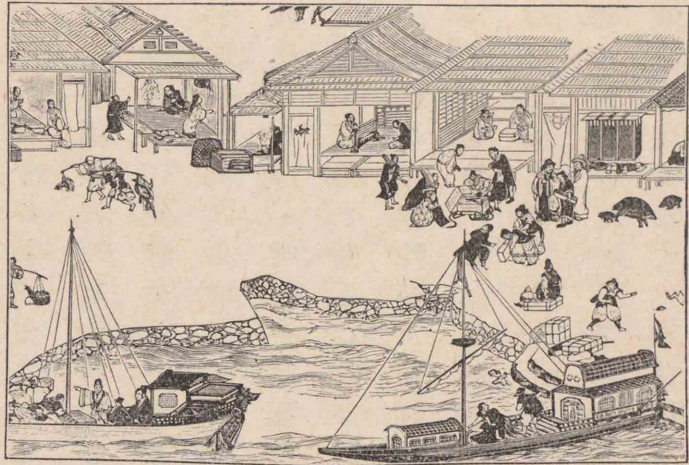
商工業市

幣がまた普及して來る。貨幣は戰國時代においては、諸大名が、それぞれ自分の領内でこれを鑄造したから、品質・形状・重量が一定せず、その種類は百數十種の多きに上つたが、信長・秀吉を経て家康に至り、次第に整理せられてその制度が確立し、金貨・銀貨・錢貨の三貨が並び行はれるやうになつた。(ニ)都市は昔は京都・鎌倉のやうな政治上の中心地が主なるものであつたが、戰國時代に至り、地方の大名が有力となるに隨ひ、周防の山口・相模の小田原などが榮え、桃山時代には攝津の大阪、江戸時代になつて武藏の江戸などの大都市が出來た。これは諸大名の居城のあるところに、商工業者が集つて出來る城下町であり、政治・軍事・經濟の中心となつて、地方文化の開發を促した。その他、商工業の發達により、人口が集中して出來た商工業市では、和泉の堺、攝津の兵庫、筑前の博多、肥前の平戸、長崎、近江の大津・長濱などがあつた。近世に入り、封建制度の整頓・交



町人の勢力

思想上の變化



(畫風屏市堺) 榮繁の港堺

通の進歩・商工業の振興と相俟つて、城下町も、宿驛も、港町も、商工業市も驚くべき進歩を遂げた。(ホ) かくのごとく商工業が盛んになり、都市が起るにつれて、町人階級の社會的勢力が進み、近世になつては、江戸や大阪に富豪が續出し、その他の商工業者もそれ〴〵富を蓄へ、武家及び農民に對して、社會上の一大勢力となつた。

**思想上の變化** 社會の各方面に革新が行はれてゐるとき、室町幕府の勢力が衰へたので、國民思想の上にも變化を生じ、皇室尊崇の思想が著しく發達した。皇室

最も健全なる思想

尊崇の思想は、古よりわが國民の有する最も健全なる思想である。建武中興吉野時代において、天皇親政の理想を翼賛したてまつり、一身一家を捨てて奮闘せる多くの忠臣義士は、皆この健全なる思想の上に立つてゐたのであるが、室町時代において足利氏が政權を握るに及び忠臣と逆賊と、その處を異にし、名分が地を拂つて空しき觀があつた。然るに戰國争亂の世に際會し、幕府が衰へるにつれ、敬神尊王の思想が大いに興り、諸社、諸寺をはじめ、諸國の英雄は心を傾けて皇室に奉仕し、織田信長、豊臣秀吉のごときは、その一生を通じて、偏に皇室尊崇の至らざることを恐れる有様であつた。随つて當時臣民としての至情をさゝげた美談が少くない。

六角高頼  
本願寺光兼

後土御門天皇御大葬のとき、近江の六角高頼は、その御料を献上した。後柏原天皇は御踐祚の後二十二年を経て、御即位禮を挙げさせられたが、そのとき本願寺光兼が獻金した。後奈良天皇は御踐祚の後十年を経て、御即位禮を挙げさせられたと



大内義隆  
北條氏綱  
今川氏輝  
朝倉教景  
毛利元就

織田信秀・同  
信長の敬神尊  
王

豊臣秀吉の尊  
王

聚樂第行幸

き、周防の大内義隆をはじめ、相模の北條氏綱、駿河の今川氏輝、越前の朝倉教景等は、それらに獻金してこれを翼賛しまゐらせた。正親町天皇は御踐祚の後、三年にして御即位禮を擧げられたが、そのとき毛利元就が獻金した。これ等は皆皇室を中心として仰ぎたてまつることによつて、泰平を期する至誠より出たことであり、群雄はいづれも上京して天皇を戴き、勅命を奉じて統一の大業を成し、以て宸襟を安んじたてまつることを庶幾つてゐたのである。

尾張の織田信秀は敬神尊王の念に富み、御料を獻じて皇居の築地を修理し、また伊勢外宮にも造營料を奉つた。その子信長もまた敬神尊王の心極めて厚く、しばしば獻金して忠誠の情を致し、永祿十年、正親町天皇より禁裏御料所回復の勅命を拜受したときは感激措く能はず、翌年、上洛して京都附近を平定するや、御料所をたてまつり、皇居を修造しまゐらせ、それより絶えず金錢物品等を獻上し、また久しく廢れてゐた伊勢神宮の正遷宮式をも復舊しまゐらせた。

後陽成天皇の御時には、世の中が漸く治まつて、戦國時代の風塵は靜かになり、桃山時代の國威伸張の春を迎へさせられたのであつたが、天皇は豊臣秀吉を深く御信賴あそばされ、秀吉はまた誠意を傾けて奉仕しまゐらせ、君臣の間、和氣藹々たるものがあつた。天正十六年、聚樂第行幸のごときはその美しい現れである。

思想の變遷

一般風俗の特  
色

風俗の變遷

戦國時代から安土・桃山時代を経て江戸時代初期に至るまでの一般風俗は、各方面に革新の大浪が漲り溢れる世の相を反映して、清新・潤達・雄健・豪華の趣を備へてゐた。その趣は安



桃山時代の風俗

土城・大阪城・聚落第・伏見城のごとき大建築に現れ、金碧燦爛として人目を眩ずる繪畫・彫刻に現れ、華麗なる武具・蒔繪・染織等の工藝品に現れたが、風俗の方では華麗なる服飾・調度に現れ、奔放なる歌舞

上流婦人の服  
飾

音曲に現れ、さながら春の新潮の高鳴るがごとく、活氣に満てる世の中たらしめた。當時の上流婦人は、古き傳統を有する宮廷婦人のほか、新に勃興せる武家婦人が多く、その服飾も東山時代の風を承けて、清新の趣を加へ、袖口の小さい小袖を重ね、目も絢なる打掛



俗 民衆婦人の風



桃山時代の婦人

遍く愛好せられ、淨瑠璃・操り・女歌舞伎などが行はれはじめた。

婦道の發達

當時、武士が華々しく社會に活動するに隨ひ、武士

道は自ら磨かれたが、これに伴つて婦道も亦發達し、貧しい中で夫の萬一の用意を整へた山内一豊の妻關ヶ原の役に先ち、自決して夫に後顧の憂なからしめた細川忠興の妻その戦役中自ら陣頭に立ち、夫を助けて落城を救つた富田信高の妻、大阪夏陣の際、自害して夫を勵ました木村重成の妻の如き、多くの貞烈な女性を出した。

こゝに掲げた淺井長政夫人妙と細川昭元夫人は、共に織田信長の妹であります。長政夫人は、目覺むるばかりに美しい湯巻を纏ひ、白の菊桐の模様のある縞子を幾枚も重ね、昭元夫人は白地に金と朱と紫との色彩をあしらつた衣装を著けてをります。袖口の小さないのはこの頃の特徴であり、黛は昔のものに比べれば、かつと上の方に描かれてをります。

桃山時代の 上流婦人



をころ上の式に誦成候ござります。

べのおこの印の御簪あり、二簾一お昔のものに出入候、  
 深きおしほの式迄髪を著けござります。膝口の小ち  
 干き、三簪一も重は御元夫人にお白紙の金と米と衆との命  
 知べりの美しへ、四影一登り、五白一の、六談一餅の、七對一對の、八さる一論  
 共の、九藤一田言、十氣の、十一衆一か、十二あ一ります。是如夫人にお目覚むる  
 こゝに、十三誦一も式、十四對一共、十五是一如夫人、十六愛一ら、十七藤一田、十八御一元夫人、十九愛一ら、二十お

將山朝升の仕立儀人



人夫元昭川細



人夫政長井淺

人 婦 流 上 の 代 時 山 桃



第九章 文教の振興

近世の文教

中世

近世

幕府の學校  
德川家康の好學

近世の文教

近世は文教の著しく發達した時であつた。これ

東 京 湯 島 聖 堂

より先、中世においては、争亂が多く、一般民衆の生活程度も低く、學問藝術は、公家上層の武家・神官・僧侶などの間に存してゐたのであつたが、近世に至り、平和がづき、民衆の生活程度も高まり、學問藝術は長足の進歩を遂げ、國民全體に行き互るに至つたのである。その中心となつたのは、幕府の文教獎勵であつた。

幕府の學校

德川家康は學問を好み、古書

を蒐集し、またこれを刊行し、文庫を設け、藤原惺窩を召してしばしば書を講ぜしめ、殊に林羅山を重用して、幕府の儒官となし、朱子學



徳川綱吉の好學

によつて文教を振興することに努めた。將軍綱吉も亦好學の志厚く、江戸上野忍岡にあつた林家の私塾弘文館を湯島に移した。

湯島の聖堂

の子徳川義直が弘文館内に建てたる孔子廟も聖堂と稱せられ、そ

昌平坂學問所

と呼ぶこととなり、

問所といはれ、幕府

教の中心たる地位

學頭となつてこれ

學問所はまた昌平

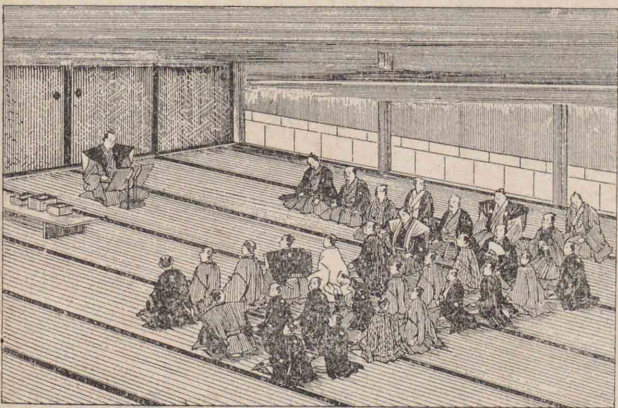
その後、將軍家齊の

就職のはじめ、老中松平定信は、大いに

昌平覺の學風を刷新し、柴野栗山、尾藤

柴野栗山  
尾藤二洲  
古賀精里

二洲、古賀精里等、錚々たる朱子學者を



湯島聖堂講釋の圖

昌平覺

林述齋

寛政異學の禁

重用し、朱子學以外の學派を抑へ、大學頭林述齋は、これを繼承して一層教學の統一を圖つた。世にこれを寛政異學の禁といふ。

聖堂の講釋

聖堂の講釋には、御座敷講釋、稽古所講釋、白講所講釋などがあつた。前頁の圖は御座敷講釋であつて、毎月四七九の日に開かれ、幕府の儒官が講師となり、大名及び幕臣だけが聽講を許されたものである。

佛教

佛教

近世、鎖國政策によつて、外部の刺戟を遠ざけられた國民は、文教の振興するに伴ひ、徐ろに過去千數百年間に取り入れた外來文化を消化することに努め、それを基礎として更に一段の進歩を遂げたのであつた。過去に取り入れた外來文化の主なるものは儒教と佛教とであつた。これに固有の神道を合せて、世に神儒佛三教といつた。佛教の新しい宗派は、たゞ黄檗宗が明の僧隱元によつて齋されただけであつたが、幕府は天主教を禁壓するため、佛教を保護し、すべての人民を必ずその中の一宗に歸依させ、宗門帳

神儒佛三教



佛教の普及

崇傳  
天海



崇傳

れた澤庵もまた名僧である。

をつくつてこれを明記せしめたから、佛教は全國津々浦々に至るまで残る限なく普及した。幕府は、また大きな寺々には法度を下して取締りを厳しくし、寺領を與へて保護を加へた。家康に重く用ひられたものに、禪宗の崇傳、天台宗の天海などがある。將軍家光に尊敬せら

天海

天海は南光坊といひ、學問博く、才智秀で、家康秀忠家光三代の將軍に尊ばれ、大僧正となり、日光東照宮を創め、川越喜多院を再興し、上野に東叡山寛永寺を開き、天台宗

隱元



天海

中興の祖と稱せられる。慈眼大師と諡せられた。

黃檗宗を傳へた隱元は將軍家綱のとき、明より來り、後山城の宇治に地を賜はり、黃檗山萬福寺を開いた。大光普照國師といふ號を賜はつた。

澤庵は將軍家光に尊敬せられて、江戸品川に東海寺を開

儒教

儒教の沿革

宋學

朱子學  
林羅山  
林鷲峯  
林鳳岡  
陽明學  
中江藤樹  
熊澤蕃山

いた。

儒教

佛教に新宗派の殆んど興らなかつたのに對し、儒教には多くの學派が並び立つて空前絶後の盛況を呈した。儒教は孔子に始まり、孟子がこれを承けつぎ、秦の始皇帝のとき大いに抑へられたが、漢のときに復興し、それから唐を経て宋に至り、程明道程伊川、朱元晦陸象山などいふ大家が輩出し、所謂宋學と呼ばれる盛期に達した。その中、程氏の學統のものは、朱元晦に至つて大成し、普通朱子學と呼ばれ、陸氏の學統のものは、後、明の王陽明に至つて大成し、普通陽明學と呼ばれる。朱子學は藤原惺窩の門人林羅山が、幕府の保護の下に、これを振興し、その後、鷲峯鳳岡が相次いで出て、林家は朱子學の本宗となつた。これに對し、陽明學は將軍家光の頃、近江に出た中江藤樹によつて振ひ起され、熊澤蕃山などがこれを承けつぎ、民間における一つの學派として發達した。しかし朱



伊藤仁齋  
荻生徂徠

古學

堀川學派  
畿國學派

日本的學派

貝原益軒とそ  
の妻東軒

子學と陽明學とは、いづれも宋明の學問であつたところ、伊藤仁齋・荻生徂徠などは、やがて遙にその源流に溯り、直ちに孔孟の眞思想に迫らうとして、古學を唱へ、支那の學者の企て及ばなかつた道を開拓した。仁齋の學派を堀川學派といひ、徂徠の學派を畿國學派といふ。古學は非常な卓見であつたが、まだ傳來的な感じがある。然るに山鹿素行・山崎闇齋・徳川光圀などは、國家觀念が極めて厚く、儒教を日本化し、國民道德を養ふことに努めた。その他、貝原益軒・木下順庵・新井白石・室鳩巢などは、いづれも名高い學者である。

貝原益軒は、平易な文章で、多くの有益な教訓書を著し、一般士民に大きな感化を與へた。その妻は東軒と號し、才學の秀でた婦人であつた。こゝに掲げたのは、益軒八十四歳東軒六十二歳のときの合作である。愛と敬とは人倫の本なることを述べたものである。

敬愛

東軒書



貝原益軒

敬愛

貝原益軒及東軒の筆蹟

東軒書  
敬愛  
益軒書  
敬愛

愛は溫和慈惠而不惡於人之心。  
敬は小心翼翼而不慢於人之心。  
二者孝親之心。凡厚人倫之道、  
須以此爲本。

八十四翁益軒書

またその畫像は益軒六十五歳のときの畫像である。木下順庵は朱子學者で、その門下より新井白石・室鳩巢のほか、雨森芳洲・三宅觀瀾・祇園南海等多くの有名な學者を出した。

新井白石は將軍家宣家繼に仕へて、政治上の立派な事蹟があつたばかりでなく、學者としてはあらゆる方面に互つて卓見を持つてゐた人である。

室鳩巢は將軍吉宗の信任を蒙り、その命によつて、兒童のために六諭衍義の大意を書いたことがある。

室鳩巢

新井白石

木下順庵



文學

平民藝術

元祿時代  
俳諧  
松尾芭蕉

蕉風の三變

小説  
井原西鶴

文學 江戸時代には一方に公家及び武家の貴族的階級があるのに對し、他の一方には新に勃興して來た町人の平民階級があつたため、文學、美術等には自ら二つの潮流が存した。そして平民藝術の方が時代の特色をなしてゐる。平民文學のために先づ光彩を放つたのは、元祿時代における俳諧の松尾芭蕉、小説の井原西鶴、戯曲の近松門左衛門である。俳諧の芭蕉は伊賀の人で、江戸に出て深川に庵室を構へた。好んで諸國を行脚した。その門下からは多くの名人が出た。

芭蕉は初めの間は、木枯の身は竹齋に似たるかなといふやうな俳句をつくつてゐたが、やがて禪味を帯ぶる閑寂幽玄の趣を發揮し、古池や蛙とび込む水の音の絶唱をなすに至つた。晩年には大いに碎けて來て、日常生活からも詩材を求め、煤掃きは己が棚つる大工かなと詠するやうになつた。これを蕉風の三變といふ。

小説の西鶴は大阪の人で、はじめは同じく俳諧の作者として現れ

戯曲

近松門左衛門

淨瑠璃

竹本筑後掾

たが、後、浮世草紙と稱せられる小説に筆を染め、人生社會の真相を描寫した。戯曲に就いては、長い年月を経て、徐々に發達して來た

淨瑠璃を大成したのが近松門左衛門である。はじめ淨瑠璃は人形を操り、その動作に合せて語るることによつて盛んになり、元祿時代に至るまでに、江戸節、薩摩節、大薩摩節、河東節、一中節、新内節などが流行したが、つひに大阪の竹本筑後掾(義太夫)が所謂義太夫節を起すに及び、それが淨瑠璃節の正しい系統をなすやうになつた。門左衛門は筑後掾と時と處とを同じうして出で、その作品は竹田、近江などのやうな操の名人の手



居 芝 居



紀海音  
竹田出雲  
歌舞伎芝居

明和時代  
文化・文政時  
代  
小説

によつて演ぜられ、操芝居は立派な総合藝術として發達した。淨瑠璃の作者には、この後、紀海音、竹田出雲をはじめ、多くの名家が出た。淨瑠璃と並んで歌舞伎芝居も亦目覺ましく進歩した。歌舞

伎は、慶長の頃の阿國歌舞伎から起り、元祿時代に入つて、江戸に市川團十郎が出て、京都に坂田藤十郎が出るに及び、舞踊所作の域を脱して、演劇の形態を具へるに至つた。尙ほ、その後の文學藝術には、明和頃を中心とする時代と文化文政頃を中心とする時代とあり、共に名家が輩出した。小説では明和の頃の上田秋成、建部綾足、平賀鳩溪、文化



圖の劇演筆宣師川菱

文政の頃の山東京傳、式亭三馬、十返舎一九、瀧澤馬琴、柳亭種彦、爲永春水などは殊に名高い人々である。上田秋成は大阪の人である。一として京阪に發達した平民文化として至つた。山東京傳は、その潮流に乗じた人であつて、その生涯

の作品には、洒落本、黄表紙、讀本等の變化がある。式亭三馬、十返舎一九は、その滑稽味の方を受けつぎ、爲永春水は、その人情味の方を發展させた。瀧澤馬琴、柳亭種彦は讀本の方で雄編大作を成した人々である。俳諧では天明の頃、谷口蕪村が出てこれを復興した。



川柳  
狂歌

蕪村は畫を能くし、その作品は洒脱にして神韻に富んでゐる。その頃、俳諧が通俗化した川柳が盛んに民衆の間に行はれ、狂歌にも大田南畝をはじめ、多くの名人が輩出した。

上田秋成

上田秋成の雨月物語は九篇の短篇より成り、幽玄

建部綾足

た人であ

平賀鳩溪

の人で、蘭

電氣機械を  
し、神靈矢

山東京傳  
式亭三馬

が後には昔語稻妻表紙のごとき多くの讀本を作り、また近世奇跡考のごとき考證的研究にも勝れてゐた。式亭三馬は滑稽本の作者で、當世浮世風呂當世浮世床等を著し、輕妙洒脱の筆致を以て、江戸市民の生活を描寫した。

十返舎一九

十返舎一九も滑稽本の作者であり、諸國の宿驛より取材し、地方人民の生活を描寫した。殊に東海道中膝栗毛は、美しき山河の風光を背景とし、五十三次相連れる街道の状態を描いて、圓轉滑脱を極めてゐる。

瀧澤馬琴

は、概ね儒教の道德觀念を基とし、勸善懲惡

柳亭種彦

の大奥の豪奢なる生活を描いたものと

爲永春水

であるが、作意は調子が低いといはれる。

谷口蕪村

蕪村ともいつた。その俳句には畫のや

柄井川柳

牡丹散つて打ち重りぬ二三片

川柳は明和の頃の作者柄井川柳の名より出た稱呼で、滑稽的な民衆風俗詩といふべきものである。その語句は卑近であるが、巧みに世態人情を穿つてゐる。

これ小判たつた一晩ゐて呉れる  
清盛の醫者は裸で脈を取り



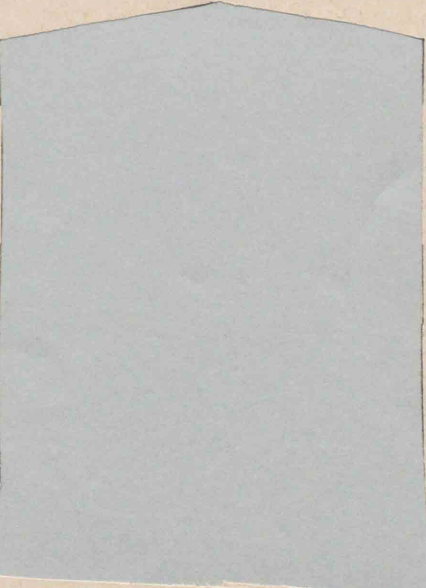
大田南畝

大田南畝は蜀山人ともいひ、奇才縦横、狂歌の名人として知られてゐる。狂歌にはなほ濱邊黒人、朱樂、菅江元奎、網大根、太木などいふ人々があつた。

美術

狩野探幽  
土佐光起

美術 近世初期の美術は桃山時代の美術に現れた豪放壯麗なる精神を承けたものであり、狩野探幽、土佐光起等は、この精神を體



現して出た巨匠である。探幽は漢畫を基礎として大和畫を攝取し、光起は大和畫を基礎として漢畫を攝取し、共に高尚なる氣韻を躍動せしめたが、それ等の子孫は固陋に流れて不振に陥つた。これに反し浮世繪

浮世繪

肉筆浮世繪

は、勃興して來る町人階級と伴つて、清新なる一路を進んだ。浮世繪には肉筆と版畫とがある。肉筆の浮世繪は戰國時代の末頃に

狩野秀頼  
土佐光元  
同 光吉

源を發し、近世初期に至り、大成したものであり、狩野秀頼、土佐光元、同光吉等を先驅とし、元和寛永頃には、殊に多くの作品が出た。當時これを翫賞したものは、概ね武家貴族であつたから、浮世繪もこれに相應はしい氣韻を有す

岩佐勝以



狩野秀頼筆高雄觀風の圖

る。井伊家の彦根、屏風、尾州、徳川家の歌舞伎草紙等の類である。これ等の作家の中、岩佐勝以は殊に多くの名畫を成し、知らず識らず、浮世繪の先達となつた。尾州、徳川家の士女遊樂圖、小屏風、川越喜多院の三十六歌仙扁額などは、その傑作である。やがて時代の移り變りに伴ひ、町人が浮世繪を愛翫するやうになるに及び、濃艶の趣が加はり、元祿時代の菱川師宣を

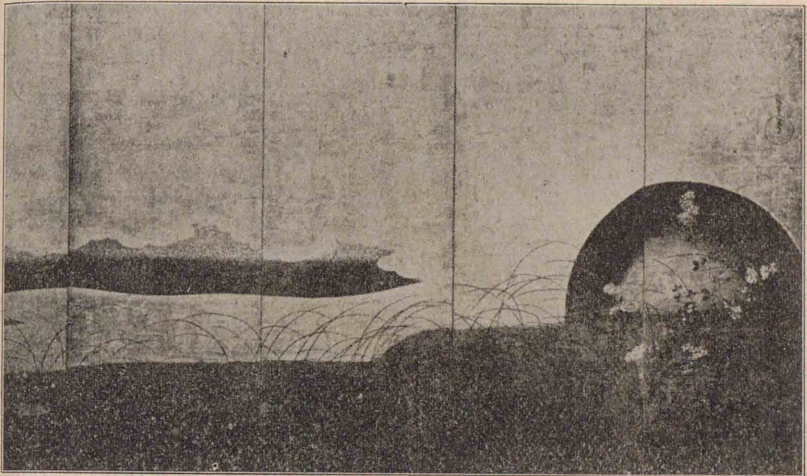


版畫浮世繪

本阿彌光悅

俵屋宗達

尾形光琳



俵屋宗達筆武藏野の旭日

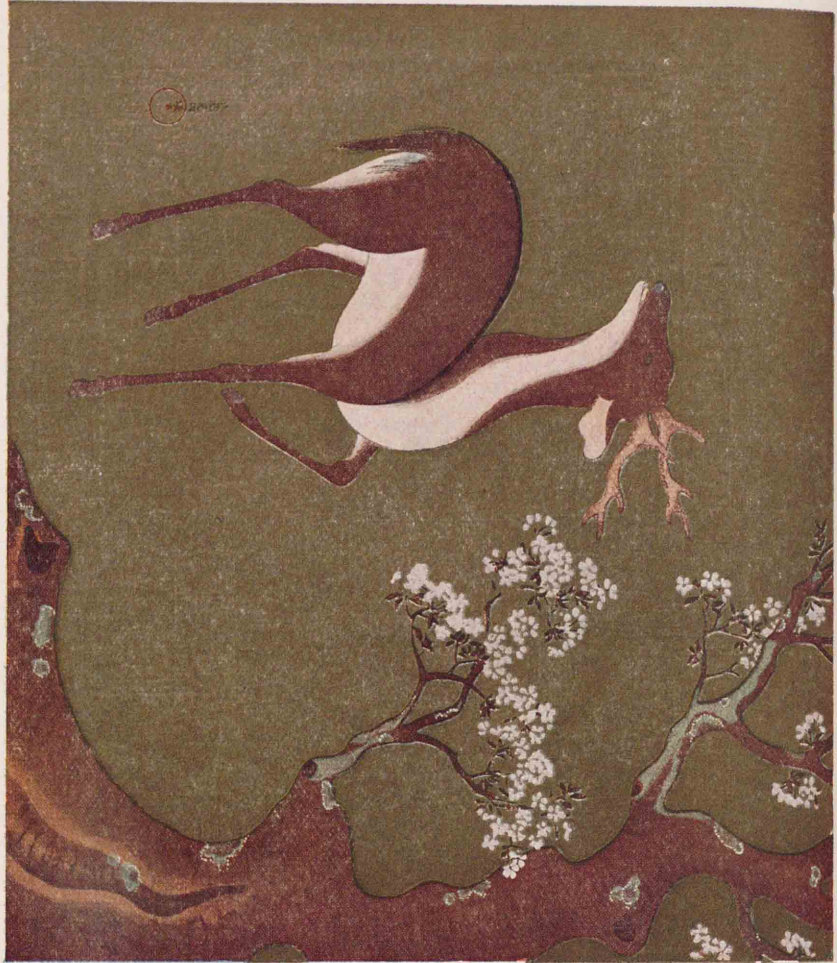
生ずるに至つた。師宣はその畫を木版に附して、遍く世人の翫賞に供し、版畫の浮世繪は、これから大いに起つた。これより先、慶長元和・寛永の頃、京都に本阿彌光悦があり、刀劔の鑑定を善くし、茶道に通じ、書においては一流を開き、畫においても飄逸清雅の風格を備へてゐた。また寛永の頃、京都に俵屋宗達があり、豪放華麗なる大作を残した。元祿時代に至り、尾形光琳は、また京都に出て、光悦宗達の風を繼ぎ、勝れたる意匠

尾形光琳は京都の人であります。狩野安信に學び、俵屋宗達の畫風を慕ひ、みづから一新機軸を出だし、元祿時代の畫界に重きをなしました。その手法は大膽のやうで、細心粗放のやうで、精緻不調和の裡に調和を求め、豊富なる賦彩の裡に瀟洒たる氣分を存し、艶麗にして氣品高く、豪華にして威嚴があります。その著想は人の意表に出で、その意匠は類を絶し、群を抜き、繪の領域を離れて、裝飾の天地に入り、古今獨歩の妙味を躍動せしめました。その創意に成れる光琳模様は、染織、裝飾、彫刻、陶磁器等に應用せられ、美術工藝に光彩を放つてゐます。この屏風畫は、稀世の名作であつて、金箔燦たる地に、滿開の櫻と可憐なる牡鹿とを描き、纏綿たる興趣人をして神往の感に墮へざらしめるものがあります。

尾形光琳筆屏風畫

男爵 岩崎小彌太氏所藏





尾形光琳筆屏風繪

(男爵岩崎小波大氏所藏)

世へちさしゆるもの成りませ。
   
 う可對する丹頭と多許を識漸する興強人さしつて漸注の烈に
   
 この氣風畫の蘇世の各許がもころ金管繼する畫の漸開の野
   
 風陵劇器器學の調田からり美術工藝の光線を效ころらませ。
   
 調慮かしゆまじや。その陰意の如ゆる光線蘇對の榮蘇
   
 對ち餘の餘蘇を調林の幾前の人世の入り古今麗世の成和さ
   
 ませ。その筆意の人の意美に出がその意知の疎を疏し舞を
   
 する疎をさすし體置のしつて疎品高く豪華のしつて風類はあり
   
 こが蘇蘇木調味の野の調味を來る豊富する風線の野の蘇蘇
   
 重きをさすしまじや。その筆意の大觀のやこが疎心蘇蘇のや
   
 の畫風を蘇ひもこゆる一蘇對蘇を出がしつて蘇蘇の畫界の
   
 蘇蘇光線の京階の人をありませ。後裡蘇蘇の學乃蘇蘇蘇蘇

風光筆屏風畫

尾形 岩崎小波大氏所藏

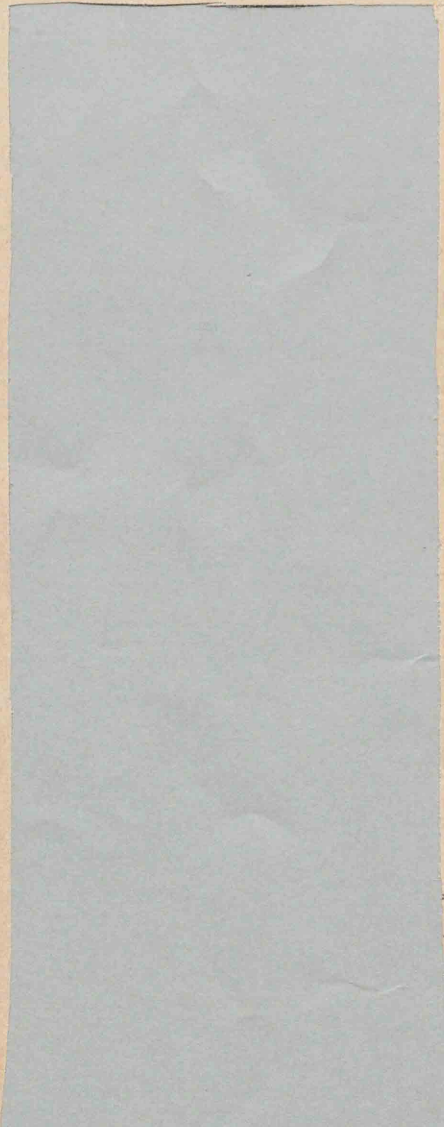


英一蝶  
浮世繪の流派

歌川豊國  
葛飾北齋  
安藤廣重  
喜多川歌麿

圓山應舉

と、手法とを以て、美しき多くの名作を成し、濃艶豊麗なる趣を窮めた。江戸の英一蝶も俊逸豪華なる畫風を以て現れた。浮世繪は、菱川師宣の後、鳥居派、宮川派、西川派等が相ついで起り、明和・安永・天



重とは、人物風俗ばかりでなく、風景畫を描いて古今獨歩の觀がある。歌麿は優艶典麗な畫風を以て秀でてをつた。その前後に互り、畫壇に圓山應舉、池大雅、谷文晁、司馬江漢等が現れた。應舉は、京



池大雅  
谷文晁

都に出て、寫生を重んじて新生面を開き、圓山派の畫風を創めた。大雅も京都に出て、文人畫の大家として氣韻に富む作品を残した。文晁は江戸で名を成し、諸流の長所を鍾めて一派の畫風を開き、殊

司馬江漢  
織物  
陶磁器

に山水畫にその妙趣を發揮した。江漢は、西洋畫を修め、油繪、銅版畫を描き、畫界に新たなる生味を鼓吹した。そのほか織物では、友禪染、透綾、銘仙等、陶磁器では、七寶燒、九谷燒等、いづれも精巧の域に

進んだ。これ等は皆鎖國時代において、日本趣味によつて發達した美しい收穫である。

武家の婦人

武家婦人の修養

武家の婦人 近世の社會機構は、封建制度を基礎とするものであり、武家町人農民等の身分上の差別が極めて嚴重であつた。その中、武家は中堅をなす身分であつたから、一般に修養の度が高く、當時の國民文化は、武家を中心として成立つてをつた。されば、武家の婦人も、亦常に修養に努め、その上流に位するものは、和歌、國文、書畫、音曲を始め、茶の湯、活花、香道等を修め、禮儀作法に通じ、淑徳を重んじ、高尚なる氣品を保ち、同時に薙刀、小太刀、弓術、馬術等の武藝を學んで、有事の日に備ふる用意を怠らなかつた。中流以下に屬するものも、同じ心掛を以て、それ／＼學問、藝能、武術等を磨いた。これ等の修養は、或は師匠を聘することあり、或は師匠の許に通ふことがあるが、要するに家庭において行はれたのであり、母は子女



教育の方針

に對する教育の責任を有し、自ら修めると共に、その子女を指導する見識を有し、武家たるに恥ぢざる教養を與へるのであつた。その教育の方針は、主君に忠を盡し、家名を揚げることを旨としたものであつた。それは封建制度は、主従の結合によつて成るものであり、家臣たるものは主君より一定の家祿を給與せられ、それによつて祖先以來の家系を存續せしめるのであつたからである。随つて女子は家を以て生生の本據となし、一旦嫁げば、その家を以て自己の死所と定め、良妻賢母たることを本道とし、敢て自ら社會の表面に立つて活動することがなかつた。されば個人として勝れた才能を有する婦人も少くなかつたけれど、特殊な境遇に立つもののほかは、進んでその才能を發揮させようとはせず、深く光を晦んで家庭に没頭するのが常であつた。春日局、桂昌院夫人等は、その境遇上、自ら世間的に影響を及ぼした人々であるが、多くの婦人

家本位の生活

は赤穂義士の妻や母などのごとく、自分は背後にありて、夫や子どもをして世間で働かしめることを常道となしてをつた。

春日局

カスガノツボネ

春日局は名を福といひ、齋藤利三の女である。初め稻葉正成に嫁いで三子を擧げて紀律を整へ、内外より畏敬せられた。寛永六年上洛して、後水尾天皇に拜謁し、春日といふ號を賜はつた。生前従二位に敘せらる。寛永二十年、六十五歳で歿した。

桂昌院夫人



春日局

桂昌院夫人は名を玉といひ、徳川綱吉の母である。綱吉の教育に心を用ひ、殊に學問修養に努めしめた。佛教を信ずることが深く、綱吉は母の心を慰めようとして、寺を建て、法會を營み、延いては生類憐れの令を出だすに至つた。されば元祿時代の幕府政治を理解するためには、桂昌院の影響を除外することが出来ない。

赤穂義士の背後にある婦人

赤穂義士が大石良雄に率ゐられ、吉良義央を討つて、亡君淺野長矩の讐を復したの



は名高い話であるがその背後には多くの女性の涙ぐましい心勞と激勵とがあつた。小野寺十内秀和の妻丹女大高源五忠雄の母貞柳尼などはその例である。

十内は文雅の士で儒學を修め和歌に秀でてゐたが丹女も歌才に富み、

咲き初むる外山のさくら匂ひ来て人おどろかす春の朝風

といふやうな佳吟がある。主家の變事に會ひて後夫を助けて具に苦心を重ね、九十餘歳の老母の逝去を見送り、夫が本望を遂げて切腹した後、間もなく、

夫や子の待つらんものを急がまし何かこの世に思ひおくべき

といふ辭世を残し、食を斷ち、夫の後を追うて歿した。貞柳尼は小野寺十内の姉、大高兵左衛門の妻である。その子源五は文學の嗜み深く、俳諧の道に通じて俳名を子葉と號し、母に仕へて孝養を盡した。源五が義舉に参加して終始志を渝へず、つひに本望を遂げるに至つたのは、母の激勵に負ふところが大きかつたのである。

近世にも文藝において名を成した婦人は少くないが、それは寧ろ武家以外の人々であつた。荒木田麗女、池大雅の妻玉蘭などはその例である。

文藝にて名を成せる婦人

荒木田麗女

荒木田麗女は伊勢皇大神宮の祠官の女である。詩歌を善くし、國文國史に通じて

玉蘭

ゐた。夫と共に學問を勵み、各地を巡遊して名所史蹟を尋ねることを楽しんだ。その著月のゆくへは、高倉天皇、安德天皇、御二代の間のこと、池の藻層は、後醍醐天皇の御代より後陽成天皇の御代に至る間のことを記せる國文の歴史である。文化三年歿す。年七十五。

婦人の風俗

婦人の風俗 近世の國民生活は次第に複雑となつたので、身分

と時代とにより、婦人の風俗にも多くの變遷があつた。

宮廷では、正装の場合には、十二單が襲用せられたが、平常は、髪を下げて「おすべらかし」

宮廷の婦人



武家婦人の盛装

とし、前髪を取り、鬢を膨らませ、長き髷を入れ、繪元結で肩の下のと



武家の婦人

ころを結び、眉を剃り、別に黛で眉を描いた。武家の上流婦人は殊に華麗な服飾をなした。前頁に掲げたのは、近世末期に用ひられた盛装であり、緋縮緬の衣服を着け、縮緬の帯を締め、白綸子の打掛



民間の婦人風俗

を羽織り、箱世古を懐に挿み、葵髷といふ髪を結んでゐる。宮廷武家等は、因襲故實を重んずるために、その風俗の變遷は割合に緩慢であつたが、

民間の婦人

民間の婦人風俗はこれと異り、髪のかみは縮緬の帯を締め、白綸子の打掛を羽織り、箱世古を懐に挿み、葵髷といふ髪を結んでゐる。宮廷武家等は、因襲故實を重んずるために、その風俗の變遷は割合に緩慢であつたが、

これは菱川師宣筆元祿時代江戸花見風俗  
處は江戸上野の山内今の上野公園内、櫻濠として咲き  
匂ふ櫻の木立に屏風を立て、幔幕を張り、芝生の上に毛氈  
を敷き、大名の奥方らしい婦人が遊宴を催してをり  
ます。琴を弾くもの、鼓を打つもの、三味線を弾くもの、  
踊るもの、いづれも泰平の春を楽しんでゐる風情であ  
り、その頃の人々の服装や風俗が巧みに描かれてをり  
ます。

原畫は東京帝室博物館の所藏であります。





菱川宣筆元禄時代江戸花見風俗

別巻に東京春室朝顔前の河端があります。

ます。

り、さの即の人々の朝葉々風谷は江でつ詰む井ござり  
 願ふものへこ井も春本の春を樂しむらるる風情があ  
 ます。琴を飛くもの類をけつもの三和絃を飛くもの、  
 通を煙者大谷の奥式でしへ城人は鼓を奏しつござり  
 けふ殿の木立の報風を立ち、舞を踊り、芝生の土の手  
 願ひ五日土裡の山内全の土裡公園内、舞臺をしつぞ、  
 こ井は菱川朝宣筆風俗餘録の中の一景面があります。

菱川朝宣筆元禄朝分江戸花見風俗



保守的思想と  
革新的思想

幕府維持の思  
想

王政復古の思  
想  
開國的思想

## 第十章 尊王思想の勃興と明治

維新

### 一 尊王思想の勃興

保守的思想と革新的思想 江戸時代の思想界には、二つの大きな潮流が流れてをつた。その一つは保守的思想の流であり、他の一つは革新的思想の流である。保守的思想は、幕府政治を永く維持しようとする考であり、革新的思想は、皇室中心の政治、即ち天皇親政の世に引戻ヒキマドさうとする考である。但、革新的思想には、中頃よりわが國を鎖國の有様から脱せしめて、世界列國の競争場裡に進出せしめようとする考も起つた。その中、幕府政治を維持しようとする考は、幕府の定めた制度や、一般に行互ユキツグつた慣習や、特に徳川



尊王思想の發達

氏を重く見て書かれた歴史などによつて養はれもし、支へられもして来たが、その力は、つひに皇室中心の政治を取戻さうとする正しい熱情に追及することが出来なかつた。

尊王思想の發達 皇室中心の政治、即ち天皇親政の世に引戻さうとする考を世に尊王思想といふ。この尊王思想は、われ等の祖先より子孫永代にかけて、胸より胸に、さながら涌き出づる眞清水のやうに溢れ漲り、たまく巖礁に突き當ることがあれば、飛沫高く天半に躍り、天日これに映じて燦然たる色彩を現するのであつたが、江戸時代において、この道徳的感情、宗教的信仰を養ひ育てた力は、儒教と國學と國史と神道とであつた。

儒教と尊王思想

儒教は常に王道を尊び、霸道を賤むべきことを教へてゐる。王道は道徳政治であり、霸道は権力政治である。これをわが國の狀況に當てて見ると、皇室は徳を以て國民を撫て

尊王賤覇の思想

慈しまれるのであるから、即ち彼れの王者に當り、武家は力を以て國民を抑へつけるのであるから、即ち彼れの覇者に當り、尊王賤覇の思想は、即ち皇室を尊崇し、天皇親政の世に引戻さうとする熱情を喚び起すのである。幕府は、儒教を奨励し、これを以て教化に努めたのであつたが、その結果が、たまく、倒幕の思想を養ふことになつたのは、つまり幕府の存在が不合理であつたためである。

山鹿素行



山鹿素行

山鹿素行はその著、中朝事實において、わが國を以て萬國の中心にあるものとなし、これを支那に比較すれば、わが國は地形において勝れてゐるばかりでなく、萬世一系の皇統を戴いてゐることは、易姓革命の國である彼等の及びもつかない點であるといつて、支那崇拜を排斥し、また配所殘筆においては、「本朝は

天照大神の御苗裔として、神代より今日まで其正統一代の違ひ候事これなし(中略)。亂臣賊子の不義不道なる事これ無し(中略)。聖徳の人君相續あり、賢聖の巨輔佐奉



國學と尊王思想

りて天地の道を立て、朝廷の政事、國郡の制を定め(中略)然れば智仁勇の三は聖人の三徳なり(中略)。今この三徳を以て本朝と異朝とを一々其印を立て校量せしむるに、本朝はるかに勝れり。誠にまさしく中國といふべき所分明なりと論じてゐる。素行は嘗て播磨赤穂藩淺野家の賓師であつたが、後、言説によつて罪を得て赤穂に謫居した。そのため赤穂藩の君臣は素行によつて薰陶せられたところ多く、大石良雄以下の義士を生ずるに至つたのも此處に淵源があるといはれてゐる。

國學と尊王思想

儒教はもとく

外來思想であるが、わが國民



荷田春滿

はこれを同化して、自國を正しく養ふやうに利用していつた。されば國學や國史や神道のごとき、純粹なる日本思想が正しき日本精神を養つたことは當然のことである。國學は古典を研究して古道を闡明する學問であつた。その古典、即ち古事記、日本書紀、萬葉集などは、武家

古道の闡明

國學の四大人



本居宣長



平田篤胤

がまだ發生せず、院政も行はれず、攝政關白の政治も無かつた頃の國民生活の有り様を傳へるものであり、そこに流れる古道は、即ち純眞なる皇室尊崇の精神であるから、國學を修めるものは自ら古代に憧れ、尊王心が盛んになるのである。世に國學の四大人と稱せられる荷田春滿、賀茂眞淵、本居宣長、平田篤胤などは、いづれも皇室中心のわが國家を愛護する念が強く、春滿が「踏みわけよ日本にはあらぬ唐鳥の跡を見るのみ人の道かは」と歌ひ、宣長が「敷島の大和心を人とは」と朝日に匂ふ山ざくら花と詠じたときは、強



國民的自負  
國史と尊王思想

烈なる國民的自負を高調したものと云ふべきである。

國史と尊王思想

國史は譬へばわが國の履歷書である。江戸

時代において、國學の進歩に伴ひ、古代史の研究が大いに進んだので、國の生命の源が次第に明らかにされた。徳川光圀は大日本史

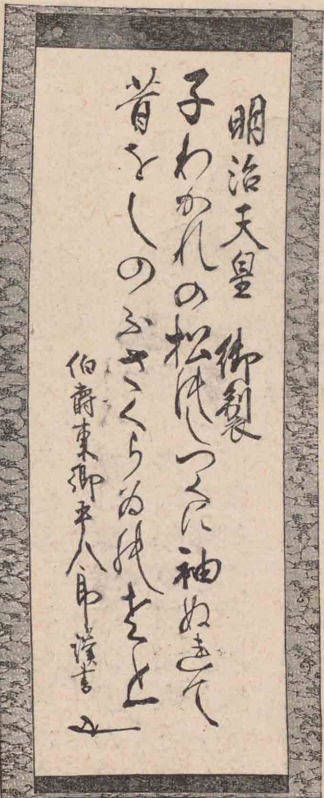
を編して、大義名

分の重んずべき

ことを鼓吹し、頼

山陽は降つて日

本外史を著し、燃



楠公崇拜

ゆるがごとき熱情を以て尊王論に氣勢を添へた。そして天皇親政を理想とした建武中興・吉野時代の歴史に對する憧憬が盛んになり、殊に楠公崇拜の風が大いに起り、攝津尼崎領主青山幸利が湊川の畔に楠木正成の小やかな墳を求め得て、その側に梅と松とを

神道と尊王思想



碑の別訣子父公楠驛井櫻

神道と尊王思想

若し夫れ神道に至つては、外來文化の影響を

蒙らない古代の説話の中から、純真なる日本精神を酌んで來て、神國日本の尊嚴を發揮し、現人神としての天皇の御威徳を宣揚したてまつり、光彩陸離、四方の闇黒を照破する氣魄がある。さればこ



垂加神道  
復古神道

れを修めるものは、憂世慨國の情を禁ずることが出来ず、國體の本義を明らかにし、敬神尊王の信念を打立てようと努めるに至るのであつた。そして山崎闇齋の創めた垂加神道の流の中から、竹内式部が出て多くの公家衆を動かし、山縣大貳もその流に浴して倒幕の氣運を助長し、平田篤胤の復古神道は直に明治維新に大きな貢獻をなすこととなつた。

## 山崎闇齋

山崎闇齋ははじめ京都妙心寺に入つて僧となつたが、後土佐の吸江寺に住し、朱子學を修め、やがて還俗して京都で塾を開き、儒者として一代に名聲を馳せた。然るにその正しい國民的自覺により、晩年神道に入つて新に垂加神道を創め、大いに日本精神を宣揚し、熱烈なる尊王思想を鼓吹した。或時門弟達に向ひ、若し孔子が大将となり、孟子が副將となり、大擧してわが國に押寄せて來たならば、我々孔孟の道を學ぶものは如何すべきかと問うた。門弟達は當惑して返事が出来ず、先生は如何なさいますかと反問した。すると闇齋は毅然として「不幸にして、そのやうな場合に出遇ふならば、潔く一戦を遂げ、孔孟を虜にして國恩に報いようと思ふ。これ

## 國民的自覺

## 竹内式部

が即ち孔孟の道である」と言つた。

竹内式部は桃園天皇の御代の人である。徳大寺公城に仕へ、多くの公家衆を集め、垂加流に基いて神典(日本書紀神代卷)を講じた。その講義を聽いた公家衆は、深い感動を受けて、心に王政復古の理想を懐き、御少壯にわたらせらるゝ英主桃園天皇に、また神典の御進講をなした。然るに五攝家の人々は、幕府の聞えを憚り、かくては天皇の御爲に宜しくあるまいと考へ、天皇をお諫め申し上げ、多くの曲折を経て、寛曆八年、公城等二十人の公家衆を君側より斥け、また京都所司代をして式部を取調べさせ、式部はつひに追放に處せられた。これを寶曆事件といふ。式部は熱心なる神道學者で、その著奉公心得書の中には、天照大神より後、代々の帝より今の大君に至るまで人間の種ならず、天照大神の御末なれば、直に神様と拜し奉るべきことを述べ、君徳の廣大無邊なることを敘して、譬へば今床の下に、物の生ぜざるに見れば、天日の光り及ばぬ處には、一向草木さへ生ぜぬ。然らば、凡そ萬物、天日の御蔭を蒙らざるものなければ、其の御子孫の大君は、君なり、父なり、天なり、地なれば、此の國に生としいけるもの、人間は勿論、禽獸草木に至るまで、みな此の君をうやまひ尊び、各品物の才能を盡して御用に立て、二心なく奉公したてまつることなり」と言つてゐる。そして忠孝兩全は最も望ましいものではあるが、萬一兩つながら全く

## 寶曆事件

## 奉公心得書



することの出来ない場合には、斷乎として、孝を捨てて忠を取るべきであるとなし、「故に此の君に背くものあれば、親兄弟たりといへども、即ち之を誅して君に歸すること、吾國の大義なり」と喝破してゐる。實にこれわが國民道德の大義である。

蘭學と開國思想

自然科學等の研究

蘭學と開國思想 尙尊王思想の發達と相待つて、明治維新を導き出すのに力があつたのは、蘭學の進歩によつて惹き起された開國思想であつた。蘭學は、醫學の方面から開け始めたが、その研究の進むのに隨ひ、天文學、地理學、理化學、博物學、兵學等が修められ、蘭學者は、當代において最も能く西洋の事情に通ずるやうになり、寛政文化の頃の本多利明、佐藤信淵、天保の頃の渡邊華山、高野長英などは、書を著して經世開國の策を論じ、外交に關する意見を説いた。本多利明は、西域物語、經世秘策等において世界萬國の形勢を述べて鎖國の陋習を打破しようとし、造船航海の術を獎勵して植民地開拓の必要に及び、殖産興業や人口の問題等を論じた。佐藤信淵

本多利明

渡邊華山  
高野長英



山 華 邊 渡

は、經濟要錄、宇内混同秘策等において、國家觀念を明らかにし、産業を發達させ教化を振興する急務を述べ、武備を整へ、國威を海外に發揚すべきことを説いた。渡邊華山には、愼機論、舌小記、高野長英には、戊戌夢物語の著がある。これはいづれも幕府の鎖國的外交を不可とせるものであつた。然るに幕府は、これを忌み、華山、長英はいづれも捕へられ、華山はその藩なる三河の田原に蟄居を命ぜられ、長英は獄に投ぜられた。後、華山は禍の藩侯に及ぶであらうことを恐れて自殺し、長英は一旦脱走したけれど、後年、捕吏に追跡せられ、江戸で自殺した。その他幕末に活躍した人々の中には、蘭學によつて、開國進取の長計を圖るものが多かつた。



二 明治維新

王政復古促進の三方面  
思想的方面

經濟的方面

政治的方面

一八五三年

武家階級の窮乏

王政復古促進の三方面 皇室中心思想と世界的思想、言ひ換へれば、尊王思想と開國思想とは、相待つて武家本位の保守的思想を打破し、王政復古と開國進取との道を打開しようとなつたのであるが、他方には經濟財政の方から言へば、幕府をはじめ武家階級は、非常な窮乏に陥つてしまひ、内政外交の方から言へば、幕府の統制力が衰へ、世界の大勢はわが國の開港を餘儀なくせしめる場合になつて來たので、嘉永六年、米國使節の來航以來、僅に十六年にして幕府は瓦解し、明治維新の大業は見事に成就することになつたのである。

武家階級の窮乏 近世封建社會の諸階級の中、武家階級は多くの特權を有して、その地位が高く、その實力が強かつた。しかし(1)

武家階級の窮乏の原因

町人の富裕  
三大改革の不成功

次第に土地を所有することが無くなつて、これを支配するだけとなり、(2)次第に農業を営むことから遠ざかつて、農民から租米を取立てるだけとなり、(3)次第に村落の生活から離れて、都會で暮すやうになり、これを一言にして盡せば、次第に武家階級存立の三大基礎たる土地と農業と村落とから遠く離れてゆき、そのために生産の方の力が減じて、消費の方は増すばかりであつたから、やがて武家は恐るべき經濟上の窮乏に襲はれるに至つたのであつた。かくして幕府は財政の破綻に苦しみ、諸大名は參勤交替その他種々な負擔のために疲弊し、諸藩士の中には甚しい貧窮に陥るものが多くなつた。然るにこれに對し、町人階級は、國民經濟の發達に伴つて、漸く富を重ね、次第に武家階級に迫つて、社會上の勢力を得るやうになつた。將軍徳川吉宗の享保の改革、老中松平定信の寛政の改革、同水野忠邦の天保の改革は、要するにかゝる大勢の間に



外患と内憂

あつて、武家階級の地位と権力とをもとの通り維持しようとする努力もたつたが、いづれも終極の目的を達することが出来ず、武家政治の根柢は經濟の方からも、また動搖して來た。たゞ、外からは、諸外國が來て開國を促すものあり、内には、公家諸大名諸藩士浪士等が幕府の命に従はないで行動するものあり、幕府は外侮を防ぎ、内憂を抑へる實力がなく、つひに王政復古の勢が養はれるやうになつた。

諸外國との關係

諸外國との關係 國內において、思想方面から言へば、尊王論が發達し、開國思想も養はれ、經濟方面から言へば、武家階級がおしなべて窮乏に陥り、幕府は次第に力を失つて來たとき、國外からは諸外國が相ついで渡來し、鎖國の門戸を叩いて、わが國を列國の競争場裡に導き出さうとした。こゝにおいて、國內では鎖港開國の論が盛んに起つたが、第十九世紀の初め、蒸氣機關が船舶に利用せら

鎖港・開國の論

大勢の指導

れ、蒸氣船が自由に遠洋を航海するやうになつてから、世界列國の形勢は一變し、わが國ばかりが國を鎖して生存し得ざる場合となつたので、わが國も亦知らず識らずこの大勢に引きつけられ、幾多の紛亂の後、安政五・六年に互り、時の大老伊井直弼は亞米利加合衆國をはじめ、多くの國々と通商假條約に調印するに至つたのである。

尊王攘夷論

尊王攘夷論 亞米利加合衆國等と假條約の調印が濟んだのを知つたとき、攘夷論者は、擧つて直弼の專斷を責め、ついで將軍家定が薨じ、家茂が將軍職に就くに及んで、直弼を非難する聲はますます高まつたので、直弼はこれを抑へようとして、安政の大獄を起し、一層志士の反感を招き、つひに萬延元年三月、水戸浪士のため、櫻田門外で殺された。これより尊王攘夷の論は一層盛んになり、文久三年、家茂は勅を奉じて、攘夷の期日を定め、たけれども、長州藩は、更

安政の大獄

一八六〇年  
櫻田門外の變

一八六三年



一八六四年

に進んで討幕を企て、三條實美等と謀つて攘夷御親征を請ひまゐらせた。然るに薩州藩士は、京都守護職たる會津藩主松平容保と謀つて、同年八月、朝議を一變させたので、長州藩士は實美以下の七卿を奉じて國に歸り、翌元治元年七月、強ひて入京し、會津、薩摩等の

長州征伐



三條實美

兵と戦つて敗走した。よつて幕府は勅を奉じて諸藩の兵を發し、長州藩を伐つこと前後二回に及んだが、つひに功を奏せず、慶應二年七月、將軍家茂が大阪城で薨じた後、朝廷は命じて戦をとゞめさせ、十二月、徳川慶喜をして將軍職を襲がしめられた。

大政奉還

一八六七年

大政奉還 慶應三年正月、明治天皇が御踐祚あらせられた。これより先、薩州、長州の二藩は、既に密かに聯合してをり、薩州藩士西郷隆盛、同大久保利通、長州藩士木戸孝允等は、岩倉具視及び三條實

討幕の計畫

一八六七年



西郷隆盛

美等と謀を通じ、幕府を倒して王政復古の大業を成さうと思ひ、著その計畫を進めて、つひに討幕の密勅を奏請するに至つた。前土佐藩主山内豊信は、形勢の非常に切迫したのを見て、その臣後藤象二郎等を遣はして、政權を朝廷に還したてまつるべきことを慶喜に説かしめたところ、慶喜も内外の事情を考へて、固く心を決し、つひに上奏して大政を奉還しまゐらせた。それは實に慶應三年十月十四日のことであつた。天皇は翌日これを御允しなされた。これより先、朝廷は、大勢の赴くところを察せられ、將軍家茂の請によつて、慶應元年十月、假條約を勅許あらせられ、兵庫を除ける他の四港を開くことを許され、明治天皇は御踐祚の後、慶應三年五月、更に兵庫の開港をも聽許あらせられた。

一八六五年  
假條約勅許



王政復古の大號令

神武天皇創業の精神

王政復古の大號令 將軍徳川慶喜の大政奉還を允許あらせられて後、慶應三年十二月九日、朝廷は、自今攝關幕府等廢絶、即今假に總裁議定、參與之三職を置き、萬機可被爲行、諸事神武創業之始に原き、縉紳武辨堂上地下の別なく、至當の公議を竭し、天下と休戚を同く可被遊、叡慮に付、各勉勵、舊來驕惰の汚習を洗ひ、盡忠報國の誠を以て可致奉公候事と仰せ出だされ、攝政關白、征夷大將軍等を罷め、新に總裁議定參與の三職を置き、すべて神武天皇創業の精神に基き、天皇親政の旨を明かにせられた。世にこれを王政復古の大號令といふ。尋て翌年明治と改元せられたのでこの變革を、世に明治維新といふ。

明治維新と女性の貢獻

明治維新と女性の貢獻 幕末維新の際、尊王の志士が全國に蹶起し、一身一家を顧みることなく、東西に奔走して國事に力を盡した間に立つて、尊王の大義に據つて、君國のために働いた婦人が少くない。近衛家の老女村岡若江、薰子、松尾多勢子、野村望、東尼等は、その名高い人々である。

老女村岡

近衛家の老女村岡は本名を津崎矩子といふ。夙に、朝威の振はないことを慨き、外國船が相ついで來つて天下騷然たる時、尊王の志士達を助けて國事に力を盡し、安政六年、幕府に捕へられて江戸に送られた。時に六十四歳であつた。しかし間もなく免されて歸京し、洛外の嵯峨に退いて靜かに晩年を過し、明治五年、功により朝廷より、終身現米二十石を賜り、翌六年歿した。年八十七。後從四位を贈られた。

若江薰子

思ひきや數ならぬ身のかくまで、にふかき惠の露かゝるとは。若江薰子は伏見宮に仕へた若江量長の女、和漢の學に通じ、詩歌に秀でてゐた。朝威を振ひ興さうとして、尊王の志士を助け、捕へられて獄に下つたことがある。一條家に仕へ、昭憲皇太后の御入内前御勉學の御相手を奉仕した。明治十四年歿した。年四十七。

松尾多勢子

末の代も御裳裾川は絶えやらじこの天地のあらんかぎり。松尾多勢子は信濃の人、尊王心厚く、文久二年、夫に請ひて、京都に上り、公家衆に近づき、志士と交り、幾たびも危地に出入して國事に奔走した。夫の病死した後、歸郷し、



野村望東尼

志士數十人を匿まつて大義のために力を盡し、明治元年また上京して、わが子を官軍に従軍させ、その後郷里にあつて農業養蠶等を振興することに努め、明治二十七年歿した。年八十四。後、正五位を贈られた。

野村望東尼は名をもといふ。筑前の人國文を修め、和歌を善くし、尊王愛國の念が厚く、夫の死後、文久元年上京して政界の風雲の急なる有様を見聞し、歸郷の後、その住居なる福岡城外の平尾山莊に多くの志士を匿まひ、しばしば危難を免れた。

慶應元年福岡藩で佐幕論が盛んであつた頃、捕へられて玄海の孤島に流されしめ、たが節を守つて屈せず、同二年、嘗て庇護を與へたことのある志士達によつて救ひ出されたが、同三年歿した。年六十二。後、正五位を贈られた。

和宮の御高德

御降嫁

和宮の御高德 取り分け感激に堪へないのは、和宮親子内親王の御高德である。和宮は仁孝天皇の第八皇女、孝明天皇の皇妹でいらせられる。大老井伊直弼が斃れて後、公武合體論が勢を得、老中安藤信正等は、衰へゆく幕府の威信を回復するために、和宮が將軍家茂に御降嫁あらせらるゝようにと朝廷にお願いひ申し上げた。

天皇は色々お考へなされて後、その請をお許しになり、宮は國家のために御決心をあそばされ、文久元年、江戸にお下りになられた。時に御年十六歳でいらせられた。それより宮は江戸城の大奥におはしまして、貞節を盡されたが、世の中が變つて慶應二年、家茂は



和宮

第二次長州征伐の最中、大阪城において薨じた後、宮は薙髮して、靜寛院宮と稱せられた。そして明治元年、官軍が東下して江戸に迫つたとき、宮は國家の將來を憂へられ、徳川慶喜の恭順を訴へて徳川家の存續を朝廷に歎願し、舊幕臣を鎮撫して江戸を戦禍の巷から救ふことに心肝を砕かれた。そして萬事が無事に解決して後、一旦京都にお還りになつたが、また東京にお移りな

靜寛院宮

徳川家存續の歎願



薨去  
日本婦道の權  
化

され、明治十年、薨去あらせられた。御年三十二。入つては夫君に貞節を盡し、出でては國運の安危を思ふ。和宮は實に日本婦道の權化でいらせられる。

和宮の和歌

將軍家茂の靈柩と共に家茂が宮のために生前買ひ求めておいた西陣織の一卷が江戸城に届いたとき宮は、

空蟬の唐織ごろも何かせむ綾も錦も君ありてこそ

と詠じて悲しまれた。また鏡に對して、

よそほはん心も今はあさ鏡向ふかひなし誰がためにかは

と詠まれた。國家國民のために御身を犠牲にしようと思はれる御心は、

惜しまじな國と民とのためならば身は武藏野の露と消ゆとも

といふ一首に能く現れてゐる。お墓は東京芝増上寺にある。

### 第十一章 立憲政治の確立

明治維新の精神

明治維新の精神

明治維新は王政復古を目的として成された

詠水石契久

歌

さざれ石のいは

はとならんする

までも五十鈴の

かはのみづはに

こらし  
吾良意

明治天皇宸翰紙

ものであるけれども、能く考へると、その精神は、たゞ王政復古だけではなかつたのであつた。明治維新の精神には、前段と後段とがあつた。前段は即ち復古的思想であつて、祖神崇敬の信念を基礎とし、神武天皇創業の大精神を宣揚し、皇室中心の國體を力強く養ひ育てようとするものであり、後段は即ち創造的精神であつて、將來に向つて新なる生活様式を建設しようとする氣分であつた。言換へて見れば、復古的思想は

復古的思想

さざれ石のいは  
はとならんする  
までも五十鈴の  
かはのみづはに  
こらし

創造的精神



回顧的であるが、たゞ徒らに過去を振り返つて見る目的を以て振り返つたのではなく、實は將來に向つて正しく進まんがために先づ振り返つて見たのである。凡そ正しく進まんと欲するものは、先づ正しく顧みることを要する。過去より現在に互つて進んで來た大道は、將來またこれによつて進むべきものであつて、こゝに新なる生活様式を建設しようとする創造的精神が働いて來るのである。その創造的精神が政治の方面に現れては、内にしては皇室中心の立憲政體が確立し、外にしては國力が伸張し、領土は擴大せられ、國際的地位は高まり、國威は全世界に發揚せられるやうになつた。

五箇條の御誓文

一八六八年

五箇條の御誓文 明治維新の創造的精神は、さながら大河の流のごとくに盛んなものであつた。されば明治天皇は、これより將來に來らんとする世の中をお導きあそばされようとして、明治元年

開國進取の國是

慶應四年九月改元三月十四日、親しく紫宸殿にお出ましになり、文武の諸官を率ゐて天神地祇を祭られ、五事をお誓ひあらせられ、開國進取の國是をお定めになられた。

- 一 廣ク會議ヲ興シ萬機公論ニ決スヘシ
- 一 上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸ヲ行フヘシ
- 一 官武一途庶民ニ至ル迄各其志ヲ遂ケ人心ヲシテ倦マサラシメンコトヲ要ス
- 一 舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クヘシ
- 一 智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スヘシ

ス衆亦此旨趣ニ基キ協心努力セヨ

群臣は皆宏遠なる聖旨に感銘し、臣道を全くして宸襟を安んじた



てまつらむことを誓ひ、一人づつ進みて神位並びに玉座を拜し、誓約書に署名しまゐらせた。尋で宸翰を以て、列祖の洪業を紹述し、國民を安撫し、國威を海外に發揚せらるべき旨を仰せ下された。その中に、

億兆安撫國威  
宣布の宸翰

「今般朝政一新の時に膺り、天下億兆一人も其處を得ざる時は、皆朕が罪なれば、今日の事朕自身骨を勞し、心志を苦め、艱難の先に立、古列祖の盡させ給ひし蹤を履み、治蹟を勤めてこそ始めて天職を奉じて億兆の君たる所に背かざるべし。往昔列祖萬機を親らし、不臣のものあれば、自ら將としてこれを征し玉ひ、朝廷の政總て簡易にして、如此尊重ならざるゆへ、君臣相親しみて、上下相愛し、德澤天下に洽く、國威海外に輝きしなり。然るに近來宇内大に開け、各國四方に相雄飛するの時に當り、獨我國のみ世界の形勢にうとく、舊習を固守し、一新の效をは

からず、朕徒らに九重中に安居し、一日の安きを偷み、百年の憂を忘るゝときは、遂に各國の凌侮を受け、上は列聖を辱しめ奉り、下は億兆を苦しめん事を恐る。故に朕こゝに百官諸侯と廣く相誓ひ、列祖の御偉業を繼述し、一身の艱難辛苦を問はず、親ら四方を經營し、汝億兆を安撫し、遂には万里の波濤を拓開し、國威を四方に宣布し、天下を富岳の安きに置んことを欲す。」といふ御言葉が拜せられる。畏くも御身を以て國家の安危に任じたまふ叡慮の程、まことに恐れ多き極みであり、これを承るものは、感激の餘り、一死以て君恩に報いたてまつらんことを期し、勇躍して奉公の至誠を致したのであつた。

官制の改定

官制の改定 王政復古のとき、朝廷は新に總裁議定參與の三職を置かれたが、その後新時代に適當する仕組を考へられて、しばしば官制を改められ、明治二年七月には、古の大寶令に基いて、官制を

一八六九年



改め、神祇官・太政官の二官と、民部省・大藏省・兵部省・刑部省・宮内省外務省の六省とを設け、太政官には、左大臣・右大臣・大納言・參議などを置いた。また明治二年六月には、版籍奉還、同四年七月には、廢藩置縣が行はれて、全國統一の政治が成立し、同六年一月には、徵兵令が布かれて、國民皆兵の制度が確立し、國歩はますます健全なる進行をつゞけるに至つた。

版籍奉還  
知府事  
知縣事

政權の不統一  
收入の不十分

木戸孝允の建言

明治元年朝廷はもとの將軍家及びその家臣の領地など約八百萬石を収めて、そこに府(八府)または縣(二十六縣)を置き、知府事・知縣事を任じてこれを治めしめられた。けれども二百六十餘の諸大名は、なほもとの通りに土地と人民とを領し、その總石高は二千二百萬石を越えてゐたから、政權が朝廷に還つたとはいふものの、實際は全國劃一の政治を行ふことが出来ず、政府の收入も乏しく、已むを得ないで富豪から金穀を募り、或は太政官札を發行して一時の急に應ずる有様であつた。それ故統一の政を行ひ、財政の基礎を定めるためには、このまゝで置くことは出来なから、參與木戸孝允は、この際諸大名をして版圖即ち土地と、戶籍即ち人民とを朝廷に

四藩の奏請

版籍奉還の勅許

知藩事

府縣藩の竝立

廢藩置縣  
種々の不便



木戸孝允

還したてまつらしめようと考へ、議定三條實美・同岩倉具視・長門藩主毛利敬親にこれを建言し、ついで參與大久保利通と謀り、また土佐肥前の兩藩に説いたので、翌二年正月、敬親及び薩摩藩主島津忠義・土佐藩主山内豐範・肥前藩主鍋島直大の四人は、連署して、各その版籍を奉還し、政令を一途に歸せしめられたいと奏請したところ、これを聞いて、他の諸藩主も大抵これに倣ひ、續々として同じことを奏請した。そこで同年六月、朝廷はその請を容れたまひ、まだこれを奏請しないものに對しては、これを内命せられ、悉く諸藩の土地と人民とを收めて朝廷の直轄とし、一先づ舊藩主をその藩の知藩事として政を執らしめられたから、封建制度は全く廢止せられ、八府・二十六縣・二百六十二藩(六月二十五日現在)が竝び存することとなつた。

このやうにして、全國の政令は朝廷の一途から出ることとなつたが、(1)府縣藩は互に不規則に入り交り、(2)その管轄する廣さの大小が餘りに區々であり、(3)殊に各藩の知藩事は皆舊藩主であつたから、その藩の士民との關係はなほ舊態を存して容易に改まらず、政府の威權は十分に行届かなかつた。それ故木戸孝允・大久保利通等は更に一步を進めて、藩を全廢する必要を認め、種々盡力するところあり、知藩事



の中には自ら進んでその職を辭するものもあり、朝廷は明治四年七月に至つて、つひに全國の藩を廢して縣を置き、新に知事を任じてその政を行はしめ、もとの知藩

聖訓五箇條

- 一 軍人忠節を重んず
- 一 軍人禮儀を重んず
- 一 軍人武勇を尚ぶ
- 一 軍人信義を重んず
- 一 軍人質素を旨とす

元帥陸軍大臣東郷平八郎 謹書

聖訓五箇條

事を悉く東京に移住せしめられた。そこで始めて全國統一の政治が成立した。ついで知事を改めて縣令となした。そして同年十一月、全國を三府七十二縣に分ち、なほしばしば改正を重ね、明治二十二年に至つて、三府四十三縣と定められて今日に至つた。

武家が兵權を握つてから軍事は全くその手中にあつたが、明治維新の後、政府は兵制を改め、天皇は親しく兵馬の權を統べたまふこととなつた。そして明治五年に至つて、陸軍省と海軍省とを置き、翌六年一月、舊長州藩士大村永敏の意見を採用して徴兵令を布いた。この徴兵令はわが國の古い制度と西洋諸國の法とを併せ考へて定めた國民皆兵の制度であつて、身分の如何にかゝらず、丁年に達した男子は、すべて兵役に就く義務があるとせられたものである。

全國統一の政治  
三府七十二縣  
〔一八八九年〕  
三府四十三縣  
徴兵の制  
陸軍省  
海軍省  
徴兵令發布  
國民皆兵の制度

軍制上の大改革

〔一八八二年〕  
軍人に賜はれる勅諭

西洋政治思想の傳來

英米の思想



中村直正

これはわが軍制上の大改革であつて、これにより兵備を充實し、國民の士氣を振興し、愛國の感情を熾んならしめるに至つた。天皇は、この軍隊を親しく統率せられ、しばしば演習を統監せられたのみならず、明治十五年一月、特に五箇條の聖訓を軍人に賜はつて、平素の修養につき懇ろに戒め諭された。

西洋政治思想の傳來 明治維新の頃から、明治十年頃までのわ

が國民の政治思想に力強い影響を及ぼしたものは、英米佛獨の諸

國であつた。これ等の諸國の中、佛米等

では自由平等民權の思想が行はれ、英國

では功利主義の思想が行はれ、獨逸では

國家主義の思想が行はれてをった。英

米の思想は、中村直正、福澤諭吉、箕作麟祥

等が能くこれを傳へた。殊に福澤諭吉はしばしば外遊して西洋

文化を理解し、開國進取の氣運に乗じて新思想の指導者となり、民



佛蘭西の思想

獨逸の思想

權論と功利説とを以て一代を風靡する勢があつた。佛蘭西流の自由民權思想は、モンテスキューやルソーの著書の譯述によつて大いに鼓吹せられた。獨逸の思想は加藤弘之等がこれを祖述した。

民選議院設立の運動

民選議院設立の運動

自由民權思想が行はれるに隨ひ、副島種臣後藤象二郎板垣退助江藤新平等は、有司が専制するのをとゞめ、國運を發展せしめるには、天下の公議を伸張せしむべきであるとなし、明治七年一月、民選議院設立の建白書を朝廷に呈し、また愛國公黨を起した。然るに加藤弘之は、わが國の開化が尙ほ淺く、教育が未だ普及してゐないから、民選議院の設立は時機が早過ぎると論じ、これに對する反對論も盛んに起つたが、大勢は設立を促進する方に傾いた。明治天皇はこれをみそなはして、明治八年四月、詔を下したまひ、元老院を設けて立法の源を廣め、大審院を置いて

愛國公黨

一八七四年

元老院・大審院設置

一八七五年

地方官會議召集

一八七九年

審判の權を鞏くし、また地方官を召集して民情を通じ、公益を圖らしめられた。ついで政府は、同十二年三月、府縣會を開いて、民選の議員をして、その府縣の經費などを議せしめ、徐ろに立憲政體を打ち立てる階梯をつくつていつた。



地方官會議臨御

一方國民の間には西南の役後政治思想が大いに進み、政府と意見を異にするものは、言論によつてその主張を貫かうとするやうになつた。そして政府の漸進主義に慊らない有志のものは、急進主義を取り、新聞雜誌を發行し、演説會を開き、盛んに議論を戦はせた。中にも板垣退助は、郷里土佐にあつて同志のものと共に愛國社を組織し、熱心に自由民權の説を唱へ、明治十三年四月、八萬七千餘人の連署せ

板垣退助の愛國社  
一八八〇年  
國會開設の請願



一八八一年

國會開設の勅諭



板垣退助

る國會開設請願書を太政官に提出した。このやうに民権論者の運動が絶えず行はれてゐる頃、維新の元勳たる木戸孝允、西郷隆盛、大久保利通の三傑の後を承けて、参議伊藤博文、同大隈重信が政界の中心に立ち、政府の内部にも多くの論議が繰返されたが、漸進論者の方が勝を制し、明治十四年十月、國會速開論者たる大隈重信は、職を辭して野に下つた。天皇は、この形勢をみそなはして、同月勅諭を下され、明治二十三年を期して國會を開かせたまふべき旨を天下に宣せられた。こゝにおいて民権論者は、大いに悦び、新に政黨組織に著手した。

政黨の發達

政黨の發達

明治七年に起つた愛國公黨は、わが國における政黨の嚆矢であつた。その設立者の一人である板垣退助は、同年、郷里土佐に歸つて高知に立志社を建て、天賦人權説を鼓吹したが、西

自由黨  
改進黨



大隈重信

南の役後、愛國社を率ゐて國會開設の急務を論じ、大いに輿論を喚び起すことに努め、明治十四年十月、國會開設の勅諭を拜するに及び、自由黨を組織してその總理となつた。ついで明治十五年二月、大隈重信は改進黨を組織して、その總理となり、皇室の尊榮を保ち、人民の幸福を全うし、内治を改良し、國權を伸張することを標榜して、また輿論を喚び起すことに努めた。自由黨は概して急進的で、米佛の思想を基調とし、改進黨は概して漸進的で、英國の思想を基調としたものであつた。

内閣制度  
憲法取調局

一八八二年

内閣制度 政府は曩に明治九年、元老院の中に憲法取調局を設けて、憲法を取調べさせたが、國會開設の詔が下つたので、一層廣く各國の情況を視察する必要を認め、明治十五年二月、参議伊藤博文をして、西園寺公望以下の隨員を伴ひ、憲法取調のため歐洲諸國に



〔一八八四年〕  
制度取調局

内閣總理大臣  
國務大臣  
宮内大臣  
内大臣  
宮中顧問官

赴かしめた。博文等は命を奉じて渡歐し、英・佛・獨・奧の諸國を訪ね、憲法政治の實況を視察し、また各國の學者に就いて研究を重ねた。その歸朝の後、同十七年三月、政府は制度取調局を宮中に置き、博文を長官として、憲法その他の諸令を起草させた。既にして明治十八年十二月、政府は大いに官制を改め、大寶令に倣つて置かれてあつた太政官を廢し、太政大臣、左大臣、右大臣、參議、各省の卿などの官を罷め、新に内閣制度を創立し、内閣總理大臣及び外務、内務、大藏、陸軍、海軍、司法、文部、農商務、逓信の各大臣を置いて相共に内閣を組織し、天皇を輔けまゐらせて、國務を掌らしめ、また別に宮内大臣、内大臣、宮中顧問官を置いて皇室に

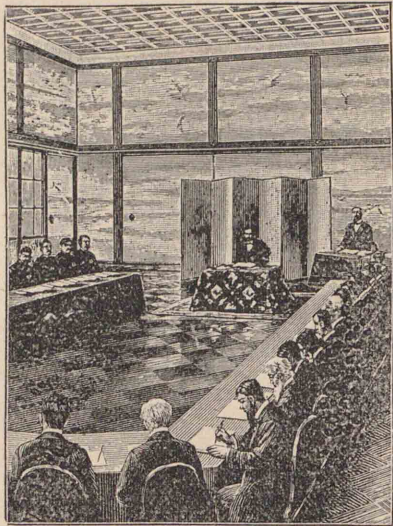
最初の内閣

- 内閣總理大臣 伊藤博文(長州)
- 外務大臣 井上馨(長州)
- 内務大臣 山縣有朋(長州)
- 大藏大臣 松方正義(薩州)
- 陸軍大臣 大山巖(薩州)
- 海軍大臣 西郷從道(薩州)
- 司法大臣 山田顯義(長州)
- 文部大臣 森有禮(薩州)
- 農商務大臣 谷干城(土州)
- 逓信大臣 榎本武揚(舊幕臣)

〔一八八八年〕

樞密院

憲法會議



憲法會議

奉仕せしめることとなした。そして伊藤博文は内閣總理大臣に任ぜられ、宮内大臣を兼ね、尙ほ憲法制定のことを主宰した。ついで同二十一年四月、天皇最高の顧問府として、樞密院が設けられ、博文はまたその議長に任ぜられた。それより天皇は憲法の草案を樞密院に下して慎重に審議せしめられ、始終親臨して多くの顧問官等の意見をお聴きになり、つひにこれを欽定せられるに至られた。

憲法を審査する會議室は、廣間の上手に玉座があり、その背後に金屏風を建て、議場には凹字形に卓子を並べ、玉座はその開いた真中にあり、玉座の右手には皇族席があり、ついで内大臣、三條實美、内閣總理大臣、黒田清隆以下各國務大臣の席があり、



玉座の左手には議長伊藤博文書記官長井上毅書記官伊東巳代治同金子堅太郎副議長寺島宗則及び樞密顧問官の席があつた。そして大臣席と樞密顧問官席とは隣合せになつてゐた。前頁の圖は伊藤議長が起立して、議案の説明をしてゐるところである。

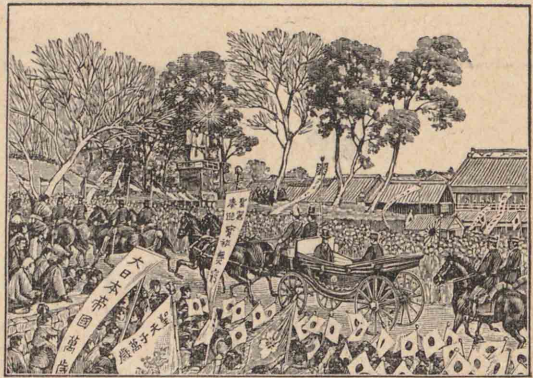
帝國憲法の發布

〔一八九九年〕

帝國根本の大法  
政治上の一大  
進歩

帝國憲法の發布 明治二十二年二月十一日、紀元節の佳辰を以て、待ちに待つた帝國憲法發布の大典が擧げられた。この日天皇は賢所皇靈殿神殿に御拜あらせられて、帝國憲法の制定を皇祖皇宗の神靈に告げたまひ、更に皇后と共に正殿に出御せられ、皇族大臣その他の官民及び外國公使等を召されてその發布の式を擧げたまひ、御親ら帝國憲法を内閣總理大臣黒田清隆にお授けになられた。帝國憲法は七章七十六條より成れる帝國根本の大法であつて、天皇統治の大權と、臣民の權利義務とを定め、臣民に參政權を分ち與へられたものであり、その發布はわが國の政治の一大進歩

皇室典範の制定



憲法發布式後野上幸行  
(五姓田芳柳筆)

であつたから、國民は擧つて祝意を表し、歡呼の聲が四方に滿ち溢れた。同時に皇室典範もまた制定せられた。これは皇位繼承・踐祚・即位・立后・立太子・攝政など皇室に關する事項を定めたまへるものであり、これによつて皇室の基礎はいよゝゝ固く、天地と共に窮りなく榮えさせたまふことを明らかにせられたものである。

憲法發布式の擧げられた翌十二日、天皇は上野公園に行幸あらせられて、東京市民の奉祝

をお受けあそばされた。國旗を打振る小學兒童、「大日本帝國萬歲・聖天子萬歲」奉迎寶祚無窮などと大書せる旗を翻せる市民の群衆地上に跪ける敬虔なる人々、曳き出された山車、春なほ淺き丘は色とり／＼に彩られてゐる。その間を美々しく裝へる騎兵隊の槍旗につゞいて、無蓋の御馬車に召させられ、龍顏麗しく臣民の



忠誠と歡喜<sup>クワンキ</sup>とをみそなはせられる御英姿を仰いで感激の涙に咽<sup>ノド</sup>ばぬものはなかつた。

帝國憲法の特質  
御告文

帝國憲法の特質 明治天皇は、皇室典範及び憲法御制定に就ての御告文に、

皇朕レ謹ミ畏ミ

告文

皇朕レ謹ミ畏ミ、  
皇宗ノ神靈ニ詔ケテ白サク皇朕レ天壤無窮ノ宏謀ニ稽ヒ惟神ノ實跡ヲ承繼シ百國ヲ保持シテ敢テ失望スルコト無シ願ヒルニ世局ノ進運ニ膺リ人文ノ發達ニ隨ヒ立テ  
皇宗ノ遺訓ヲ明徴ニシ典憲ヲ昭示シ内ハ以テ子孫ノ率由スル所ト爲シ外ハ以テ臣民翼贊ノ道ヲ廣メ永遠ニ遵行セシメ益々國家ノ丕基ヲ鞏固ニシ八洲民生ノ慶福ヲ増進スヘシ茲ニ皇室典範及憲法ヲ制定ス惟フニ此レ告  
皇宗ノ後裔ニ始シテハ皇統ノ世襲ニシテ外ナラス而シテ朕カ躬ニ遵フ時ト俱ニ舉行スルコトヲ得ルハ海ニ  
皇宗及我カ  
皇考ノ誠意ニ倚賴スルニ由ラザルハ無シ皇朕レ仰テ  
皇宗ノ神靈ヲ請ヒ併セテ朕カ現在及將來ニ臣民ニ率先シ此ノ憲章ヲ履行シテ皇宗ノ神靈ニ告グ  
御此レヲ望ミテ

皇室典範及憲法御制定告文  
(官報外號)

皇祖  
皇宗ノ神靈ニ詔ケ白サク皇朕レ天壤無窮ノ宏謀ニ循ヒ惟神ノ實跡ヲ承繼シ舊圖ヲ保持シテ敢テ失望スルコト無

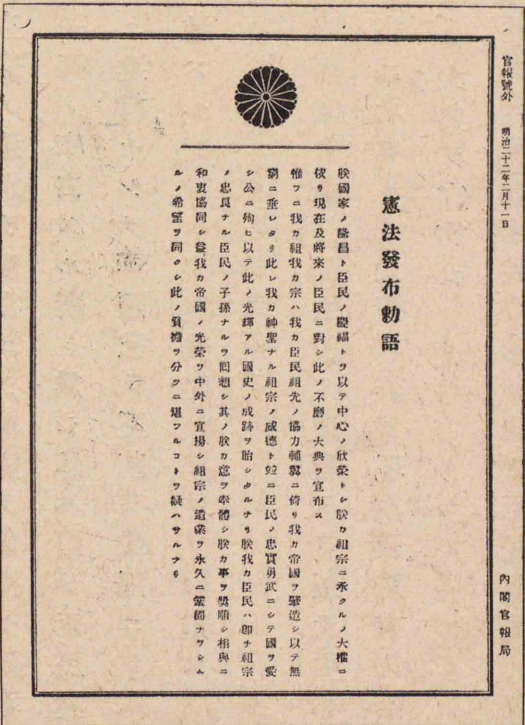
憲法發布勅語

シ願ミルニ世局ノ進運ニ膺リ人文ノ發達ニ隨ヒ宜ク  
皇祖  
皇宗ノ遺訓ヲ明徴ニシ典憲ヲ成立シ條章ヲ昭示シ内ハ以テ子孫ノ率由スル所ト爲シ外ハ以テ臣民翼贊ノ道ヲ廣メ永遠ニ遵行セシメ益々國家ノ丕基ヲ鞏固ニシ八洲民生ノ慶福ヲ増進スヘシ茲ニ皇室典範及憲法ヲ制定ス  
と宣ひ、また憲法發布勅語には、  
朕國家ノ隆昌ト臣民ノ慶福トヲ以テ中心ノ欣榮トシ朕カ祖宗ニ承クルノ大權ニ依リ現在及將來ノ臣民ニ對シ此ノ不磨ノ大典ヲ宣布ス  
惟フニ我カ祖我カ宗ハ我カ臣民祖先ノ協力輔翼ニ倚リ我カ帝國ヲ肇造シ以テ無窮ニ垂レタリ此レ我カ神聖ナル祖宗ノ威徳ト竝ニ臣民ノ忠實勇武ニシテ國ヲ愛シ公ニ殉ヒ以テ此



ノ光輝アル國史ノ成跡ヲ貽シタルナリ朕我カ臣民ハ即チ祖宗ノ忠良ナル臣民ノ子孫ナルヲ回想シ其ノ朕カ意ヲ奉體シ

朕カ事ヲ獎勵シ相與ニ和衷協同シ益我カ帝國ノ光榮ヲ中外ニ宣揚シ祖宗ノ遺業ヲ永久ニ鞏固ナラシムルノ希望ヲ同クシ此



(外號報官)語勅布發法憲

國務大臣副署の上諭

ノ負擔ヲ分ツニ堪フルコトヲ疑ハサルナリと宣はせられ更にまた國務大臣副署の上諭においても

朕祖宗ノ遺烈ヲ承ケ萬世一系ノ帝位ヲ踐ミ朕カ親愛スル所ノ臣民ハ即チ朕カ祖宗ノ惠撫慈養シタマヒシ所ノ臣民ナルヲ念ヒ其ノ康福ヲ増進シ其ノ懿德良能ヲ發達セシムムコトヲ願ヒ又其ノ翼贊ニ依リ與ニ俱ニ國家ノ進運ヲ扶持セムコトヲ望ミ乃チ明治十四年十月十四日ノ詔命ヲ履踐シ茲ニ大憲ヲ制定シ朕カ率由スル所ヲ示シ朕カ後嗣及臣民及臣民ノ子孫タル者ヲシテ永遠ニ循行スル所ヲ知ラシム

と宣はせられた。謹みてこれ等の御言葉を拜讀すれば、わが欽定憲法は、祖神崇敬の信仰に基ける國體の精華を基とし、敬神愛民の深厚なる聖慮によりて成れるものであつて、彼の歐米諸國の憲法が、しばし人民本位のものであるのに比し、その本質において大いに異つてゐる。かくして、わが君主立憲政體の基礎は確立し、國運はいよゝゝ隆昌に向つた。

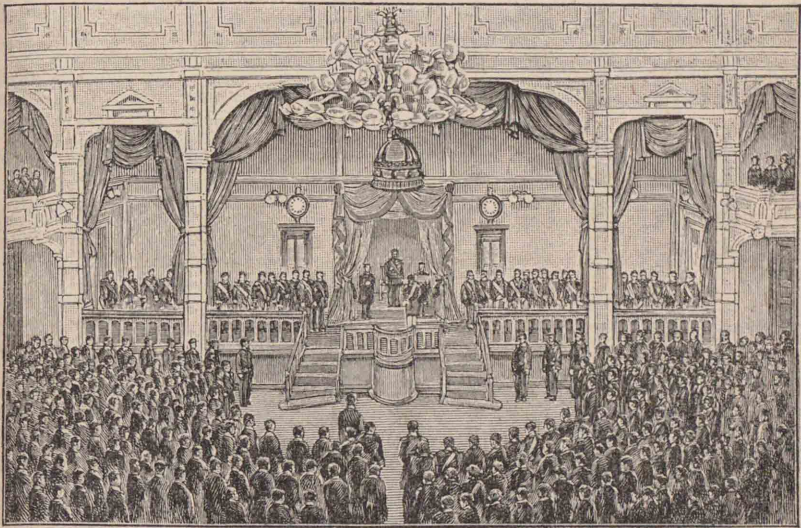
歐米諸國の憲法



帝國議會の開設

一八九〇年

貴族院  
衆議院



第一回帝國會議開院式 (五姓田芳柳筆)

帝國議會の開設 帝國憲法と共に、これに附屬する議院法貴族院令衆議院議員選舉法なども公布せられ、翌明治二十三年十一月二十五日、帝國憲法の規定によつて、帝國議會は始めて召集せられ、同月二十九日、天皇は親臨してその開院式を舉行あらせられた。帝國議會は、貴族院、衆議院の二院より成る立法の府である。最初の議長は、貴族院は伊藤博文、衆議院は中島信行であつた。かくして

立憲政體の實が全く備はり、萬機公論に決するやうになつた。

前頁の圖は第一回帝國會議開院式に方り、明治天皇より勅語を賜はる光景である。式場は貴族院正面中央は玉座である。玉座の御椅子の前に起立したまふは天皇でいらせられる。その御前に進んで勅語を拜受してゐるのが貴族院議長伯爵伊藤博文、下段前面向つて左獨り前に出てゐるのが衆議院議長中島信行である。議員席は左右に分れ、向つて右方貴族院議員同左方衆議院議員の一同が、今や一齊に椅子を離れて起立し、直立不動の姿勢を取つてゐる。正面左右二個の大時計の示してゐるのは、午前十一時十五分、實に式場最高潮の刹那の光景である。帝國會議事堂は、その後たび／＼變り、今は別の處に立派な建築が出来てゐる。

立憲治下の女性

男子と同様の教育

立憲治下の女性 封建社會においては、家が最も重要視せられ、婦人は終生、家のためだけに働く有様であつたが、明治維新の後、士農工商と呼ばれた差別はなくなり、國民は齊しく皇恩に浴することとなり、婦人の立場も自ら改まつて來た。加ふるに學制が定まり、女子も男子と同様の教育を受けて、智能を啓發せられ、また西洋



男女同權の思想

文化が盛んに輸入せられるのに伴ひて男女同權の思想が鼓吹せられ婦人の地位は大いに高まるに至つた。殊に立憲政治が確立し、憲法をはじめ民法その他の法典が備はり、婦人は國法によつてその身分を保障せられ、安心して生活を樂しみ得るのは、偏に限りなき皇恩の賜である故に、立憲治下の婦人は、朝夕これを仰ぎたまつりて、良妻賢母として家庭を健全に發達せしめるのと共に、常に學問・修養に心を潜めて、社會の情勢・國運の推移を理解し、内にしては子女の教育に努め、外にしては君國のために奉公の誠を致すべきである。

婦人と社會事業

婦人は長い間の慣習により、家庭の内部にのみ閉ぢ籠り勝であつたが世の中の進歩するに隨ひ、社會生活の各方面に、婦人の力を待つ事柄が次第に増加して來た。それで明治時代において、既に學校を建て、公共團體を設け、社會事業に力を盡す婦人が多く現れた。されば今後の婦人は、家を生活の根據となしつゝ、一層深く社會の事柄を理解するやうに自己の修養に努めなければならぬ。

### 第十二章 教育勅語の御下賜と現代文化の發展

精神的文化の進歩

舊物打破

歐化主義

國粹保存

精神的文化の進歩 明治維新以來、國力は内に充實し、國威は外に發揚し、精神的文化の進歩は目覺ましいものであつた。その初めの間は舊物打破の聲が高く、江戸時代に作り上げられた學問藝術等の或物は、惜しげもなく棄てられ、偏に西洋風の文明開化に憧れ、一時は歐化主義が盛んに唱へられて、思想界もその歸するところを失つたやうな觀があつたが、大日本帝國憲法が公布せられ、ついで教育勅語が下賜せられるに及び、正しき日本精神の光輝は、一層加はり、國粹を保存し、外來文化を同化し、新なる學問藝術を創造しようとする努力が大いに働いて來た。この努力を指導したのは教育の發達普及であつた。



教育の普及  
江戸時代の教育

教育の普及 凡そ精神的文化の淵源は實に教育の發達普及に存してゐる。曩に江戸時代においては、幕府の昌平黌シヤウヘイリョウのほか、藩學ハンガク私塾シテウ寺子屋テラコヤなどによつて教育が行はれてゐたが、藩學ハンガクでは概ね武家の子弟に限られ、私塾シテウも碩學シヤクガクのもののほかは、大いに見るべきもの少く、寺子屋は庶民教育の重要な役目を果たしたとはいふものの、程度が低く、統制が取れてゐなかつた。こゝにおいて政府は大いにその振興シンキョウを圖り、明治二年、各府縣に小學校を設けることを令し、同三年には大學、中學、小學の規則を定め、同四年には文部省を置き、(1)同五年に至り、國民教育の基礎を確立カクリツするため、歐米諸國の制度に倣ナラつて、はじめて學制を布き、義務教育の方針を明らかにし、すべての國民をして學校教育を受けしめるに至つた。そのときの聖諭セイヨには、今後一般人民をして必ず學を修めしめ、邑ニ不學ノ戸ナク家ニ不學ノ人ナカラシメンコトヲ期ス」と仰せられてあ

政府の努力  
學制の發布

一八七二年

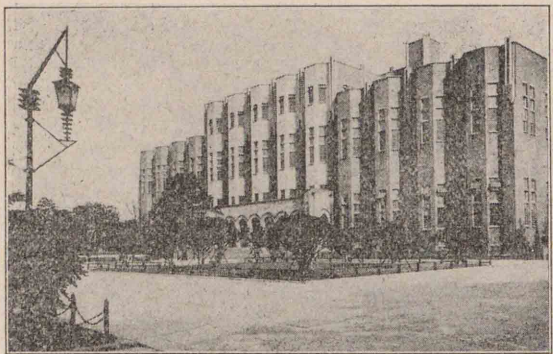
義務教育

聖諭の御言葉

中等教育

師範教育

高等教育



東京帝國大學圖書館

る。ついで同十九年には、帝國大學令、師範學校令、中學校令、小學校令が發布せられ、學制は大いに整頓し、それより數度の改正を経て今日に及んでゐる。(2)小學校の多くなると同時に、中等教育も盛んになり、中學校、高等女學校などは全国各地に限マなく設立された。(3)これ等の教育に従事する教育者は、府縣立の師範學校と官立の高等師範學校などで養成されてゐる。高等師範學校は東京、廣島にあり、女子高等師範學校は東京、奈良にある。(4)高等教育は著しく進歩し、高等學校、帝國大學及び農工商醫等の單科大學並に専門學校をはじめとして、私立大學も數多く出來た。明治の初年、政府は舊幕府の昌平黌シヤウヘイリョウを大學校と



改め、その開成所を大學南校と改め、その醫學所を大學東校と改め、同四年、大學校を廢し、南校と東校とを併せて、今の東京帝國大學の基を開いたのであつた。



昭憲皇太后華族女學校行啓

開成所は、もと蕃書調所といひ、外國語、理化學等を教授した所である。現在帝國大學は、東京、京都、東北、九州、北海道、大阪、京城、臺北の八大學を數へるに至つた。(5)實業教育もまた非常に發達した。(6)女子教育の普及も驚くべき程で、次第にその高等教育の機關も備はりつゝある。

私立大學の中、福澤諭吉の創めた慶應義塾、今の慶應義塾大學は最も古い歴史を有し、新島襄の創めた同志社、今の同志社大學、大隈重信の創めた東京專門學校、今の早

實業教育

女子教育

私立大學

女子教育の進歩

高等教育機關の完備

教育勅語の御下賜

一八九〇年  
明治初年の風潮

稲田大學と共にいづれも幾多の人材を社會に送り出した。慶應義塾は主として歐米の物質的文化的の移植に努め、同志社は主として精神的訓育に力を用ひた。東京專門學校はわが國の學問の獨立を標榜して建てられたものである。昔の女子教育は、家庭と寺子屋とに限られてをつたが、明治の末頃には、全国各地に多くの高等女學校があり、各府縣には女子師範學校、東京奈良には女子高等師範學校があり、私立には成瀬仁藏の日本女子大學校をはじめ各種の專門學校があつた。爾來、今日に至り、女子教育は驚くべき長足の進歩をなした。前頁の圖は明治十八年、昭憲皇太后が、教育獎勵の思召を以て華族女學校、今の女子學習院に行啓あらせられ、その開校式に臨ませたまへるときの御有様である。大正七年政府は大いに高等學校、大學、專門學校を増設して高等教育機關を完備せしめた。

教育勅語の御下賜

これ等各般に互る教育は、明治二十三年十月三十日、明治天皇の御下賜になられた教育に關する勅語の御趣旨を遵奉して行はれてゐるのである。これより先、明治初年の頃、西洋文化を取入れることに急なる餘り、従來行はれてゐた儒教の



思想界の混亂

明治天皇の御

宸憂

朕惟フニ我々 皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト  
 宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣  
 民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世  
 ヲ厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精  
 華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣  
 民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友  
 相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ  
 學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德  
 器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ閑キ  
 常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレ  
 ハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ  
 扶翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣  
 民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺風  
 ヲ顯彰スルニ足ラン  
 斯ノ道ハ實ニ我々 皇祖皇宗ノ遺訓ニシ  
 テ子孫臣民ノ俱ニ遵守スヘキ所之ヲ古  
 今ニ通シテ繆ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラ  
 ス朕爾臣民ト俱ニ奉々服膺シテ成其德  
 ヲ一ニセレコトヲ庶幾フ

源布典謹書

教育勅語(乃木希典筆)

經書は棄てて顧みられず、  
 佛教の經文や佛像などは  
 惜しげもなく破壊せられ  
 る有様であり、教育界にお  
 いても、國情を異にする歐  
 米諸國の書物を、そのまゝ  
 翻譯して、わが國の教科書  
 となすものもあり、これに  
 對して、國粹を尊重すべし  
 と論ずるもの現れ、思想界  
 の混亂甚しく、さながら狂  
 瀾怒濤の洶涌するがごと  
 き觀があつた。明治天皇

教育勅語の御  
下賜

學問の進歩  
印刷術

は、これに就いて深く宸襟を惱ませたまひ、明治十年以後宮内省  
 より「明治孝節錄」幼學綱要を出版せしめられ、局に當る者も、聖意を  
 體して思想の善導に努めたが、一方條約改正問題の紛糾に伴ひ、歐  
 化主義が盛んに行はれ、それと國粹保存論者との間の論争は、殆ん  
 ど底止するところが知られなかつた。それ故、心あるものは、夙に  
 思想界の健全なる指導に就いて深憂を懷いてゐたところ、天皇は  
 この情勢をみそなはし、教育に關する勅語を御下賜ありて、以て古  
 今中外に通ずる大道を御明示あらせられたのである。こゝにお  
 いてわが教育の向ふべき大方針は確立し、國民上下は擧つて聖訓  
 を遵奉しまゐらせ、歩武堂々として肇國以來の道を濶歩するに至  
 った。わが國教育の隆運は、偏にこの御指導を仰ぎたてまつると  
 ころに存するのである。

學問の進歩 教育が盛んになるのにつれて、印刷術も大いに發



活字印刷術

達し、書籍、新聞、雜誌などの發行が便利になつて、學問の進歩を促した。印刷は久しく木版印刷であり、文祿・慶長の役に朝鮮から傳へられた活字は餘り行はれなかつたが、幕末より明治の初に互り、長崎の和蘭通詞本木昌造は、活字の製法を研究して活版所を開き、それより活字印刷は長足の進歩を遂げた。そして學界の傾向は、初めの間は、五箇條の御誓文に「智識ヲ世界ニ求メ」と仰せ下されてある御言葉の通り、西洋諸國の學問を取入れることに忙しく、留學生は盛んに海外に派遣せられ、外國の學者を招聘して講義を聽くことも少からず、専門の技師等はしばしば、政府の顧問として迎へられた。わが學問技術の進歩は、これ等外國人の力に待つことが頗る多い。殊に明治の初年は政治思想が發達し、諸種の制度が整ふにつれて、法律學、政治學などが熱心に修められ、佛英獨の學風が盛んに流行した。自然科学も、同じく各方面に互つて學ばれたが、明

外國人招聘

法律學  
政治學

自然科学

獨創の研究  
精神科學

世界文化創造  
の使命

文學の趨勢

政治小説  
寫實主義

治二十年頃よりわが學問獨立の曙光が漸く現れ、外國の知識を同化して獨創の研究をなすものが輩出し、醫學上の發見や、軍器、火藥の發明などに立派な業績を擧げるに至つた。精神科學において、は、自國及び東洋諸國の文化の研究が著しく進歩し、その特色を發揮し、獨自の境地を開拓して來たので、國民の自尊心が大いに高まり、わが國は東洋文化と西洋文化とを融合して、新に世界文化を創造すべき重要な使命を有することの自覺が生じた。そして支那、印度、暹羅などの諸國から、その風を慕つて、わが國に留學に來るものが年々増加した。

**文學の趨勢** 明治の初めには、著しい文學の作品はまだ容易に現れず、政治熱の盛んであつた時代の風潮を代表して、矢野龍溪や末廣鐵腸などの政治小説が行はれ、或は徒らに江戸時代の作家の風を踏襲するに過ぎなかつた。然るに坪内逍遙が寫實主義を主



西洋文學の研究  
小説・戯曲

尾崎紅葉  
幸田露伴  
夏目漱石

評論

高山樗牛

俳句

正岡子規

新體詩

島崎藤村

土井晚翠

劇

歌壇



坪内逍遙

張したのが小説革新の動機をなし、その紹介せる英吉利文學は、森鷗外オウゴウの紹介せる獨逸文學と共に、わが文壇に西洋文學の研究を盛んならしめた。その影響を受けて、小説・戯曲等に新機軸を出だすものが多くなり、中頃より後、尾崎紅葉コノハ幸田露伴ロクベは文壇の明星と呼ばれて小説界に雄飛し、ついで夏目漱石ソクシキの名篇あり、高山樗牛ウラナウは縦横の才筆を揮つて評壇に馳驅し、俳句では正岡子規シキは新に一派を開き、新體詩では島崎藤村フジノ土井晚翠バンズイなどが盛んに新しい詩界を開拓した。また劇壇では舊い歌舞伎劇カキウキのほかに新劇及び西洋劇が起り、その間に多くの名優を出した。明治の末年頃より現今に互り、小説は幾たびもその作意に進展を示しつゝ次第に大衆化してゐる。歌壇もまた造語及び思想共に自由にして新鮮なることを尊

映畫

美術の發達

び、長短種々の詩形が行はれてゐる。映畫界の進歩は最近殊に著しくなつた。要するにすべてが國民大衆の鑑賞カンショウに訴へる傾向をもつて發達してゐるのである。

美術の發達

明治の初め、西洋の文化に憧れてゐた頃はわが古



高山樗牛

來の風習を打破するのを意に介しなかつたから、固有の美術のごときは、殆んど顧みられなかつたが、鑑識力カンシキリキのある西洋人が、却つてわが美術を賞讃するのに刺戟ゲキせられ、歴史的特質の尊重すべきを知り、明治十二三年頃から、古美術保存の急務が唱へられた。政府もこれに省みるところあつて、官立の美術學校を起し、古社寺保存會を設け、帝室技藝員を置きなどしたので、美術復興の氣運が盛んになつた。日本畫には、狩野芳崖ハルカ橋本雅邦ガク川端玉章タマキなどの巨匠が出

美術復興の氣運  
日本畫  
狩野芳崖  
橋本雅邦  
川端玉章

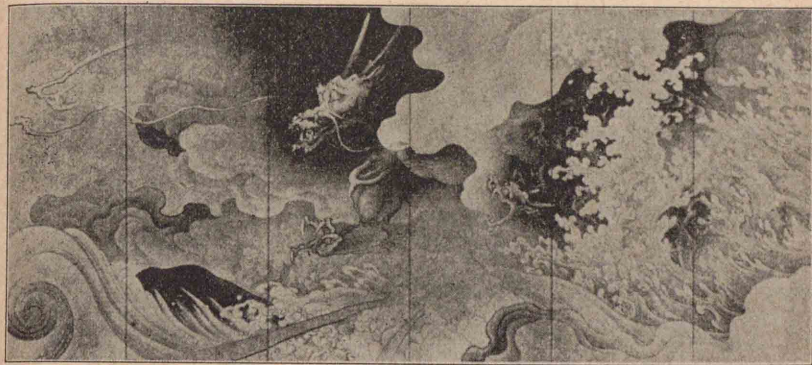


下村觀山  
横山大觀

竹内栖鳳  
山元春舉

洋畫

小山正太郎  
淺井忠  
黒田清輝



橋本雅邦筆屏風畫

て多くの大作を成した。芳崖や雅邦は、美術衰頹の時期において、窮乏の裡にありながら、刻苦研鑽の功を積んで大成した人であつた。それより雅邦の門に下村觀山、横山大觀あり、京都の畫壇では四條派に竹内栖鳳、圓山派に山元春舉あり、一般に畫家は古來の諸流派の畫法を研究するほか、洋畫の長所をも參考して新しい畫風を開くことにとめる傾があつた。洋畫には小山正太郎、淺井忠などが出て、これを開拓し、黒田清輝に至つて清新な畫風を起し、美術學校の洋畫科からは、新進の作家を多く畫壇に送り出し

彫刻  
高村光雲  
竹内久一  
建築及び工藝

帝國藝術院の  
設立

現今の趨勢  
經濟方面

た。彫刻には高村光雲、竹内久一などがあり、殊に木彫のほか、西洋風の彫刻が著しく發達した。この外、建築、染織、陶器なども西洋風の影響を受け、一面には古雅な風を傳へると共に、他の一面には新規な趣を加へて進んで來た。そしてわが國産の中、西陣織、七寶燒のごとき工藝品は、世界の賞讃を博するやうになつた。明治四十年、文部省は美術保護のため、毎年展覽會を開催し、大正九年、帝國美術院が設けられて、一般民衆に美術趣味を普及せしめることになつた。最近昭和十二年、時代の推移に伴ひ、美術文學、音樂、書道等の各方面から、朝野の人材を網羅した帝國藝術院が設立せられた。

現今の趨勢 現今において、わが國民文化は、更に多大の進歩發達を遂げた。(イ)先づ經濟方面に就いて見るならば、郵便、電信、電話のごとき通信機關の進歩、鐵道の延長、道路、橋梁の改修、汽車の電化、

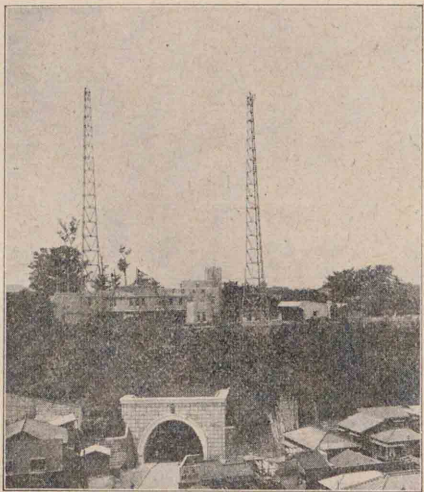


政治方面

電車自動車の増加のごとき交通機關の發達、土地の開拓、農法の改善、資本の集中、大工業の勃興、生産の増加、商業の發展、外國航路の擴張、貿易の盛大、輸出入額の増加等のごとき、いづれも日進月歩シツメツクとして止まるところを知らず、殊に數年來、わが商品の世界市場における販路は著しく擴大せられ、諸外國をして驚心駭魄キョウシンカイハクせしめるものがある。(ロ)次に政治方面に就いて見るならば、わが國は世界大戦に参加し、聯合國の一員として活躍し、遂に世界五大強國の班バンに入り、更に太平洋問題において、英米兩國と踵キヒスを接し、肩を比ヒクべて角逐カクセツするやうになり、東洋平和の盟主たる地位を確保するに至つた。これに伴ひ、國內においては、國民の參政權が擴大せられ、選舉の肅清ソウジヨウが行はれ、政治教育が普及し、各種の法典もますます完備して來た。(ハ)更に思想方面に就いて見るならば、先づ教育機關の充實著しく、國民普通教育は固カタより、國民高等教育においては、高等學

思想方面

校も、各種専門學校も、帝國大學も、私立大學も、明治時代に比すれば非常に増加し、青年學校は全國の青年を堅實に指導し、實業教育は大いに振興せられ、軍事教育は次第に徹底テツテイし、成人教育は現に社會



東京中央放送局

に活動せる人々に對し、多大の効果を齎モタラし、ラヂオもまた教育機關として有效なる役割を果してゐる。印刷出版事業の進歩も特筆すべきものであり、新聞雜誌書籍等の驚くべき増加により、國民の知見は日に月に啓發ケイハツされ、思想界は新しみを帯びて發達し來り、自由であり、濶大ワクタイであり、非常に世界的になつて來た。殊に最近、國民的自覺の高まるに隨ひ、國體を明徴にし、日本精神を宣揚する思想運動が活潑に行はれ、國運興隆の



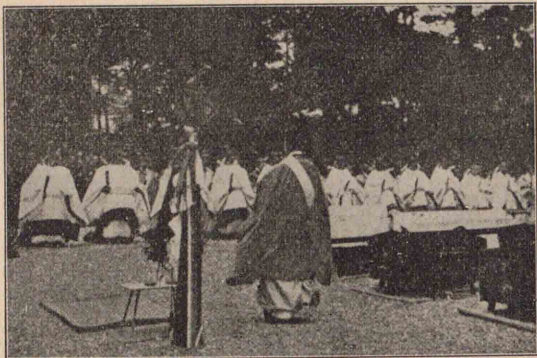
國民文化の特質

健全なる日本  
精神の指導  
祖神崇敬の信  
仰

敬神愛民

將來を約束するがとき觀がある。  
國民文化の特質 政治經濟思想の三方面に互り、明治維新以來七十餘年間の進歩は、眞に驚歎に値するものあり、これを近世の封建時代に比較して考慮すれば、全く隔世の感に堪へないのである。而して、これ等諸方面における國民文化を指導するものは、實に健全なる日本精神であつた。日本精神の中心は祖神崇敬の信仰である。最高至貴の祖神崇敬は、天照大神崇敬である。天照大神は、永遠の存在、不朽の生命でおはしまし、神德昭々として四海に光被したまふ。その直系の御神裔にわたらせらるゝ御歴代の天皇は、即ち現人神でいらせられ、敬神愛民の聖慮到らぬ隈もおはしまさず、國の内外に互つて人類の平和と康福とを軫念あらせられる。臣民は敬神忠君を以て生活の信條となし、臣民たる責任の全部を自己の一身に負擔し、すべてを舉げて君に捧げたてまつることを

外來文化の醇化



修 敬 の 神 事

終生の悦びとしてゐる。これ實に日本人のみが有するところの精神であつて、世界列國にその類を見ることが出来ない。されば現在の國民文化は複雑にして豊富を極めてゐるけれど、これを分解すれば、その中心勢力をなすものは、依然として肇國以來の祖神崇敬の信仰に基く文化である。ことを知り得るのである。儒教を主とする支那文化のごとき、佛教の文化のごとき、キリスト教の文化のごとき、近世歐米諸國の物質的文化のごとき、幾多の外來文化は、悉くこの固有の文化の裡に攝取せられ、融合せられ、醇化せられ、變質せしめられて、わが血肉となり、以てわが國民文化を健全に成長せしめる榮養素となつたの



である。われ等は現在及び將來においても、この強大なる同化力に信賴し、教育に關する勅語の御趣旨を奉體して、健全なる日本精神を涵養し、これに基いて、政治並に經濟をも亦健全に發達せしめようと期するのである。

第十三章 現代の大勢と女性の覺悟

悟

明治時代における國威の發揚  
明治初年の領土

領土の擴張  
琉球の編入  
樺太と千島との交換  
宮古群島と八重山群島

明治時代における國威の發揚 明治維新の後、内政の進歩に伴ひ、國威は大いに海外に發揚するに至つた。元來、明治初年における日本國家は、亞細亞大陸東方の海上にある蕞爾たる一小國として、外人の眼に映じたのであつて、その領土は、本州、四國、九州、蝦夷島、壹岐、對馬、隱岐、小笠原諸島、千島の南半部位であつた。然るに明治天皇の開國進取の大國是に感激せる國民は、孜孜汲々として、内に國力の充實を努めた結果、おのづから外に對して國威が伸張したのであつた。これを領土に就いていふならば、明治四年、琉球は鹿兒島縣に編入せられた。明治八年、露國に樺太全島を與へ、千島群島の全部をわが國に收めた。明治十三年、宮古群島と八重山群島



臺灣・澎湖島

樺太南半部

韓國併合

人口の増加

歳費の増加

世界大戦とわが國際的地位

とが、確實にわが領土に入つた。明治二十八年四月、日清戦役後の下、關條約によつて、臺灣及び澎湖島がわが領土に入つた。明治三十八年九月、日露戦役後のポーツマス條約によつて、北緯五十度以南の樺太島及びその附近の諸島が、またわが領土に入つた。そして明治四十三年八月、韓國併合に至つて、東洋平和の指導者たるわが國の位置は全く確立し、國威の隆々たること前古未曾有の高さに達したのである。人口に就いてこれを見れば、明治初年には、三千萬人内外であつたのが、その末年には既に六千萬を凌ぐに至つた。歳費は明治初年には三千萬圓餘に過ぎなかつたが、その末年には二十倍以上の額に上つた。今日世界におけるわが國際的地位の高いのは、全く明治時代の基礎が存するからである。

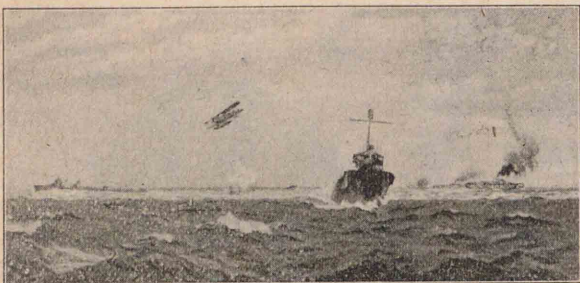
**世界大戦とわが國際的地位** 明治時代の基礎の上に立つて大正時代を迎へたわが國は、世界大戦に参加して太平洋印度洋をは

五大強國

三大海軍國

一九一二年  
支那に革命起る

一九一二年  
清國亡ぶ  
中華民國起る  
袁世凱



地中海に於ける日本海軍の活躍

じめ、遠く地中海に至るまでの海面に活躍し、聯合諸國と共に平和の克復に努力し、講和會議に當つては、英・米・佛・伊と共に「主なる聯合國」として重きをなし、爾來、五大強國の一として國際上に高い地位を占めるに至つた。殊に海軍では、英・米と並んで三大海軍國と呼ばれるやうになつた。そして戦後に出來た國際聯盟においては、常任理事國として世界平和のため、多大の貢獻をなすこととなつた。

清國は、日露戦役の後、國力が非常に衰へてしまつたので、兼てより滿洲人の下に服従するのを好まなかつたものが、明治四十四年、南支那に革命をおこしたところ、それが忽ち擴がつて全國の大動亂となり、同四十五年に至り、清國はつひに亡びてしまひ、これに代つて中華

民國が起り、袁世凱が選ばれてその大總統となつた。尋いでわが國は世界大戦に



一九一五年  
日支條約の要領

際し、獨逸よりその租借地膠州灣を取つたから、その後の時局について深く慮るところあり、大正四年五月、中華民國と條約を結び、(1)わが國は獨逸の山東省において有つてゐた權利を繼承し、後日、膠州灣地方を支那に還付すべきこと、(2)旅順、大連等の租借期限を延長すること、(3)支那はわが國の南滿洲、東蒙古における特種の地位及び利益を認めることなどを約した。その翌五年六月、袁世凱は死んだ。



袁世凱

日支條約は、列國殊に米國に不安の感情を起させる虞があつたので、わが國は特命全權大使子爵石井菊次郎を米國に特派して諒解を求めさせた。そして大正六年十一月、日米兩國は互に外交文書を交換し、(1)米國はわが國が支那、殊にわが國の所領に接續する地域において、特種の利權を有することを認め、(2)兩國は共に支那の獨立を保全し、その門戶開放と商工業の機會均等主義とを支持することを宣言した。

一九一七年

日米宣言の要領

ワシントン會議 世界大戰の終つた後も、各國の軍備競争は容易にやまず、不安の空氣が到るところに漂ひ、殊に東亞及び太平洋

ワシントン會議

軍備の競争

の問題は、日英米間の争の源となる虞があつた。米國は、これ等の不安を除いて、世界の平和を保たうと思ひ、大正十年、ワシントンにおいて、軍備の制限及び東亞と太平洋とに關する會議を開かうと提議し、わが國及び外七箇國の賛同を求めた。わが國は悦んでこれに應じ、海軍大臣加藤友三郎、貴族院議長徳川家達、駐米全權大使幣原喜重郎等をして、これに參列せしめた。會議は同年十一月より翌十一年二月までつゞき、左のごとき事項を議定した。

海軍制限

(1)海軍制限 日英米佛伊の五大國は、軍備の競争を止めるため、現在の海軍主力艦を基礎として、これに三・五・五・一・七・五・一・七五の比率を定め、各國共に今後十年間艦を休むことになつた。

太平洋諸島の防備制限

(2)太平洋諸島の防備制限 日英米の三國は、互に太平洋諸島の防備を現状維持にとり、これを擴張しないこととなした。

四國協約

(3)四國協約 日英米佛は、太平洋において領有する島嶼の權利を互に尊重し、紛議を生じた場合には、四國の協同會商によつてその解決を圖ることとなした。



日英同盟の廢棄

支那問題九箇國協約

膠州灣還付

(4) 日英同盟の廢棄 四國協約の批准と同時に、明治四十四年締結された日英同盟は效力を失ふこととなした。

(5) 支那問題九箇國協約 參加した九箇國は支那の主權と領土とを尊重し、その關稅率改定を承認することとなした。

(6) 膠州灣還付 尙ほわが國は膠州灣地方を支那に還付することとなした。



加藤友三郎

この會議で決定された事項に就き、わが國は、不滿なことが少くなかつたけれども、世界平和のため、快くこれを承認したのであつた。

**大正時代の文化史的意義** 大正時代は、前後十五箇年であり、明治から昭和を連ねる大切な時期をつくつてゐる。この時代には三つの特質があつた。その第一は、守成紹述の精神である。その第二は國民的自覺の發揚である。その第三は轉回進歩の氣運である。この三つの特質が相待つて、大正時代は文化史上に深い意

大正時代の文化史的意義

守成紹述の精神

國民的自覺

義を有するのであり、またこれによつて今日の由つて來る所以を理解することが出来る。(1) 守成紹述の精神に就て大正天皇は、大正元年七月三十一日、朝見式の勅語に、明治天皇の盛徳鴻業を御紹述あそばされる旨を仰せられ、その御聖旨を奉體する政府並に國民は、齊しく明治維新以來の大業を繼承して、これを完成することに努力したのである。こゝにおいて經濟方面においても、政治方面においても、思想方面においても、それ〴〵明治時代を受けついで、更に顯著なる前進を遂げた。即ち大正時代の文化の第一の特質は紹述繼承であり、大正天皇にこれを宣明せられ、國民の努力は、立派にこれを成し遂げたといふべきである。(2) 次に、國民的自覺は、經濟がますます、廣大なる世界經濟の域に進み、國際上の政治的地位がいよゝゝ高まり、思想界の範圍も擴大し、萬事悉く世界的になつた裡において、非常に發揚して來た。思ふに明治維新以來、



歐米文化の模倣

わが國民は、歐米諸國の文物制度を模倣するのに忙しくして、足も空に、ひたすら駆けつゞけ、靜かに自己本來の健全なる生活を内省する暇がなく、そのために世の中の一面には、輕佻浮華、浮草のやうな生活が存在した。然るに他の一面においては、常に脈々たる國民的自覺が働いてをつて、これを批判することを忘れなかつた。日清戰役において、舉國一致、わが國家の名譽のために努力した精神、日露戰役において、上下協力、わが國家の光榮のために奮闘した氣魄は、まことに高尚であり、また莊嚴を極めたものであつた。その精神氣魄は、大正時代においても、亦磅礴として四海に滿ち溢れてをつた。故に世界大戰によつて煽りたてられた好景氣により、わが帝國が一時黄金の波に漂はされ、わが國民の思想が茫然として物質崇拜の風潮に漂はされるに當つては、他の一方に必ず大きな聲があつて奢侈放縱の風、輕佻浮華の俗を戒めてをつた。殊に

一九二三年

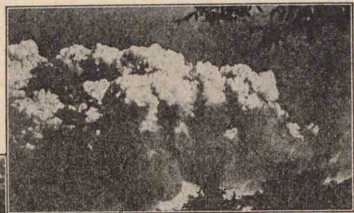
關東大震災

國民精神振作の詔

大正十二年九月一日、東京横濱を始めとして、關東一帶に互り、突如として起つた大震災に際會して、國民は愕然として己に歸り、その胸裡には、深刻なる内省が涌き上り、この空前の大災害を以て貴き天警であると考へ、自ら鞭ち、自ら勵まし、自ら勇み自ら奮つて、躍

然として新なる生活を打ち開かうと努力しはじめた。大正天皇が詔を下したまはりて「國家興隆ノ本

ハ國民精神ノ剛健ニ在リ之ヲ涵養シ之ヲ振作シテ以テ國本ヲ固クセサルヘカラス」と仰せられたのは、方にこの時であつた。而して、打つゞく財界の不景氣の中において、この國民的努力は少しも撓まず、わが國威に何等の暗點をとゞめてゐない。この點におい



今上天皇陛下と  
關東大震災火災









(1) 面積	明治元年	約二四、七九四方里	大正十四年	約四三、七〇三方里
(2) 人口	明治五年	約三、三一一人	大正十四年	約八、三四五萬人
(3) 歳出	明治元年	約三、〇五〇萬圓	大正十四年	約一五二、四九八萬圓
(4) 輸出	明治元年	約一、五五五萬圓	大正十四年	約二三〇、五八九萬圓
(5) 鐵道	明治五年	約一八哩	大正十四年	約一〇、四〇〇哩
(6) 商船	明治十一年	約四三、八九九噸	大正十三年	三、四九六、二六三噸

今上天皇陛下の御聖旨の御見式の勅語

一九二八年

御即位禮のときの勅語

今上天皇陛下の御聖旨 今上天皇陛下は御踐祚のはじめ、昭和元年十二月、朝見式の勅語において、時勢の趨くところを教へたまひ、浮華を斥け、質素を尙ひ、模擬を戒め、創造を勗め、日進以て會通の運に乗じ、日新以て更張の期を啓くべきことを戒め諭したまはられた。越えて昭和三年十一月、御即位の大禮を挙げたまへるとき賜はれる勅語において、

皇祖皇宗國ヲ建テ民ニ臨ムヤ國ヲ以テ家ト爲シ民ヲ視ルコト子ノ如シ列聖相承ケテ仁恕ノ化下ニ洽ク兆民相率中テ敬忠ノ俗上ニ奉シ上

下感孚シ君民體ヲ一ニス是レ我カ國體ノ精華ニシテ當ニ天地ト竝ヒ存スヘキ所ナリ

と宣ひ、

朕内ハ則チ教化ヲ醇厚ニシ愈民心ノ和會ヲ致シ益國運ノ隆昌ヲ進メムコトヲ念ヒ外ハ則チ國交ヲ親善ニシ永ク世界ノ平和ヲ保チ普ク人類ノ福祉ヲ益サムコトヲ冀フ爾有衆其レ心ヲ協ヘ力ヲ戮セ私ヲ忘レ公ニ奉シ以テ朕カ志ヲ彌成シ朕ヲシテ祖宗作述ノ遺烈ヲ揚ケ以テ祖宗神靈ノ降鑒ニ對フルコトヲ得シメヨ

と仰せ下したまはつた。國民はこの有難き御聖旨を體して、日夜君國のために粉骨碎身してゐるのである。

ジュネーヴ會議 昭和の大御代になつてから、わが國際的地位はますく高上し、ジュネーヴ及びロンドン(Geneva, London)の海軍軍備縮小會議においてわが國は重要な役割を演じた。これより先、米國はワシントン會議で、海軍の主力艦に就いての協定を成し遂げたから、更に補

ジュネーヴ會議



一九二七年

助艦に就いても協定をなさうと思ひ、大統領クーリッジは、自ら主唱となつて、昭和二年六月、瑞西のジュネーヴにおいて、日英米三國の會議を開いた。このとき、わが國は朝鮮總督海軍大將子爵齋藤實駐佛大使子爵石井菊次郎等を出席させ、四十餘日に互つて協議を重ねたけれども、相互の意見が一致せず、遺憾ながら會議は決裂した。

ロンドン會議



實藤齋

ロンドン會議

ジュネーヴ會議は決裂

に終つたけれども、列國共に海軍の建艦競争の起るべきことを憂ひてをつたつて、この度は英國政府が主唱となり、昭和五年英國のロンドンにおいて、日英米佛伊等の諸國は、海軍軍備縮小會議を開いた。わが國は前内閣總理大臣若槻禮次郎海軍大將財部彪駐英大使松平恒雄等を出席させ、種々協議の結果、補助艦の比率を、日六、九英一〇、米一

一九三〇年

東亞の形勢

國際主義

一九二八年

〇と定め、各國共に批准を終つた。わが國はその條項に就いて、不満足なところもあつたが、世界の平和に貢獻せんがために、これを協定したのである。これを第一次ロンドン會議といふ。

東亞の形勢

世界大戰の後、歐米列強は、各國互に協調を保ち、世

界の平和を維持しようとして、希ひ、國際主義(Internationalism)が重んぜられ、諸般の國際會議が開かれ、相互の間の紛争を協議の上で解決しようとする風が行はれた。國際聯盟や、ワシントン會議や、ジュネーヴ會議や、第一次ロンドン會議などは、この主義に基いたものであつた。昭和三年、諸國の間に成立した不戰條約も、列國の間に現存する平和と友好とを永久に維持するため、國家が政策を遂行する手段としての戦争を抛棄する旨を定めたものであつた。しかしそれは望まじき理想ではあるが、現實の狀況は必ずしもこれに適應せず、多くの國際的會議も餘り強き權威を有せず、その上各國共、



國民主義

自己の獨立と權益とを確保するためには、結局他力に依頼することなく、自國のことは自ら圖るより他に道なきを以て、別に國民主義(Nationalism)が擡頭して國際主義と相對するやうになつた。この風潮の間に立ちて、わが國は國際聯盟設立以來、常任理事國として



(除砲射高と班毒防)軍那支

て絶えず人類の福祉増進に盡力し、またワシントン會議や、第一次ロンドン會議において、世界の平和のために、忍び難きを忍んで海軍軍備縮小を斷行し、國際間の協調を保つことに努めたのであつ

支那との關係

たが、東亞の形勢は、この協調を危くするものが多かつた。先づ支那(中華民國)に就いてこれを見れば、支那は、革命戦後内亂が相つぎ、孫文は三民主義を唱へて民衆を指導し、その後、蔣介石は南京の國

露西亞との關係

一九二二年

民政府の中心となつて國家統一を主張し、内外の政局を處理するやうになつた。この國はわが國とは古來親密なる關係あり、兩國の協同を要する事業少なからず、またわが商品の消費地として貿易上重要な地域でもあり、わが國は常に善隣の友邦としてこれと和親提携し、以て東亞の平和と繁榮とを確保せんと庶幾つてゐるのであるが、支那はその眞意を諒解せず、世界大戰のとき結ばれた日支條約について夙に不満を懷き、戦後、パリーの講和會議においては、これを破棄して獨逸から直接に膠州灣地方の還付を受けようとして、試みこれは不成功に終つたが、國內には激しい排日運動が起り、日支兩國間の關係は、とかく圓滿を缺いた。しかしわが國は、ワシントン會議の協定に基き、大正十一年、膠州灣地方を支那に還付し、その後も、種々の文化事業によつて常に兩國の親善を圖つた。次に露西亞に就いてこれを見れば、世界大戰の初め、わが國は露西



一九一六年

亞に多額の軍需品を供給してこれを援助したので、露西亞は深くこれを徳とし、大正五年協約を締結して、兩國は相對抗することなく、互に承認せる領土權及び特種利益の擁護のためには相協議すべきことを約した。然るにその後、露西亞は革命によつて共和國

一九二二年

一九二五年



となり、わが國との交際は斷絶してゐたが、大正十一年、勞農社會主義共和國聯邦が成立してから、國情が次第に安定になり、大正十四年、わが國はこれと國交を回復し、再び條約國として交際することとなつた。勞農社會主義共和國聯邦を略してはソヴィエト聯邦といふ。ソヴィエト聯邦は昭和三年以來國力充實のため、資源の開発

ソヴィエト聯邦の航空軍  
農社會主義共和國聯邦が成立してから、國情が次第に安定になり、大正十四年、わが國はこれと國交を回復し、再び條約國として交際することとなつた。勞農社會主義共和國聯邦を略してはソヴィエト聯邦といふ。ソヴィエト聯邦は昭和三年以來國力充實のため、資源の開発

滿洲事變  
滿洲との關係

工業の振興等、産業の發展に努力し、また軍備を整備し、今も尙その方針を繼續してゐる。

滿洲の地位の  
重要性

滿洲の不安

滿洲事變 滿洲とわが國との關係を考ふれば、これを遠くしては、古代において、日本民族を構成するに至つた一部のものは、蒙古または滿洲方面より朝鮮半島を経由して、内地に移住したものであるといふ學説があり、これを近くしては、明治維新以後において、日清戰役といひ、日露戰役といひ、わが國運を賭して争へる大戦は、共に滿洲の曠野を舞臺として行はれたものであつた。蓋し滿洲に他國の大勢力があれば、朝鮮半島は不安動搖を免れず、朝鮮半島が他國に侵迫せられ、ば、内地の安全を保つことが出来ないからである。即ちわが國が自己の獨立を保全し、東洋の平和を安定ならしめるために、滿洲における地歩を確保することは、絶對的必要であり、國防の第一線は實に滿洲に在りと稱すべきである。然る



に清朝滅亡の後、支那の勢力は南北に分裂し、その北方の軍閥の間にも争が絶えず、滿洲に蟠踞せる張作霖は、機會を見て南下し、北京に入つて軍政府を建て、一時威を振つたが、南方の蔣介石が南京に據つて、北方の軍閥政治を排斥し、その軍の北京に迫るに及び、張作霖は奉天に引揚げる途中で死んだ。爾後、その子張學良は滿洲の政權を繼いで悪政を行ひ、頻りにわが國既得の特殊權益を蹂躪して省みず、またわが國人に對して迫害を加へた。そしてつひに昭和六年九月、わが南滿洲鐵道株式會社經營の鐵道線路を奉天郊外なる柳條溝附近において爆破し、わが守備兵を襲撃するに至つたので、多年隱忍し來つたわが國は、自衛上已むを得ずして起ち、張學良の軍閥を一掃し去つた。こゝにおいて舊政權より離脱して獨立しようとする要望が各地に起り、滿洲、蒙古地方三千萬民衆の安寧と幸福とを確保するために、奉天省、吉林省、黑龍江省、熱河省等の

一九三一年  
柳條溝事件と  
滿洲國の建設

一九三二年

代表者が集つて熟議を凝らし、昭和七年三月に至り、新に滿洲國が建設せられ、もとの清國皇帝たりし宣統帝は、首府新京に迎へられて滿洲國執政となられ、大同と建元せられた。わが國は、滿洲國建設の初より、特別に親密なる友情を以てこれを援助し、同年九月、日滿議定書の調印成り、わが國は列國に先んじて正式に滿洲國の獨立を承認し、滿洲國は、わが國が日支條約等により、滿洲國領土内において有する權益を尊重し、日滿兩國は互に、その領土及び治安に就き、共同防衛の任に當ること



日滿議定書調印

日滿議定書調印

を約した。これ實に世界歴史における一大變革であり、滿洲國の健全なる發達は、東洋平和の礎石に外ならないのである。



國際情勢の變化

國際聯盟の態度

國際情勢の變化 滿洲事變の起るや、支那は國際聯盟の力を藉りて、自己に有利な解決を得ようとし、わが國はこれに對し、飽くまで日支の直接交渉によつてこれを解決しようとした。よつて聯盟は、特に調査團を派遣して、滿洲及び支那の情況を調査報告せしめたが、その報告は多くの誤解を含み、到底わが國の容れ得るものでなかつた。然るに聯盟は東洋の實情に通ぜず、事態に對する認識が足らず、わが國と見解を異にすることが多く、わが國が特に全權委員を派して説明討議せしめたのに拘らず、その態度は、つひに東洋永遠の平和を念とするわが國是に合するに至らなかつた。こゝにおいてわが國は博大なる正義の念に基き、昭和八年三月、敢然として聯盟を脱退し、自主的外交を確立し、國民は内外共に重大なる非常時に際會せることを自覺して、互に勵ましあひながら、世界列國の視聽を一身に集めつゝ、堂々として難局を踏破し、一意專

一九三三年 國際聯盟脱退

ワシントン條約廢棄通告

一九三四年

第二次ロンドン會議脱退

一九三六年

ソヴェエト聯邦との關係 滿洲國の發達

一九三五年

心、國力の充實に努めた。そして時代の進展に伴ひ、往年締結せられたるワシントン條約が、現在のわが國情に適しなくなつたのに鑑み、昭和九年十二月、その廢棄を亞米利加合衆國に通告し、更にまたロンドンにおいて開催せられたる第二次海軍軍備縮小會議において、わが公正なる主張の容れられざるに及び、昭和十一年一月、またこれを脱退した。かくしてわが國は全く独自の力量に據つて、國際間に屹立するに至つた。

ソヴェエト聯邦との關係 滿洲國は建國以來健全に成長發達し、昭和九年三月、帝政を施行し、年號を康徳と改め、その皇帝陛下は、同十年四月、親しくわが國に來訪あらせたまひ、皇室及び國民の懇篤熱誠なる歓迎を受けさせられ、御歸朝の後、特に詔を發して、わが國に信賴する旨を宣せられた。この年、ソヴェエト聯邦は、北滿鐵道を滿洲帝國に賣却し、隨つてその滿洲帝國內における勢力は失



滿ソ國境の紛争

はれた。しかし蜿蜒數千料に互る滿ソ國境には、境界線の明確ならざる所少なからず、彼我の間に小なる紛争が絶えず起り、ソヴェエト聯邦の國境警備は日に月に増大せられてゐる。その上ソヴェエト聯邦は、その共產主義を以て世界を攪亂しようとし、歐羅巴

日獨防共協定



蔣介石

諸國に多大の不安を與へてゐるのみならず、亞細亞にては、夙に外蒙古を侵し、支那内部にも勢力を及ぼすに至つたので、わが國は昭和十一年十一月、獨逸と日獨防共協定を結んで、共產主義の防壓を約

し、これに備ふるに至つた。

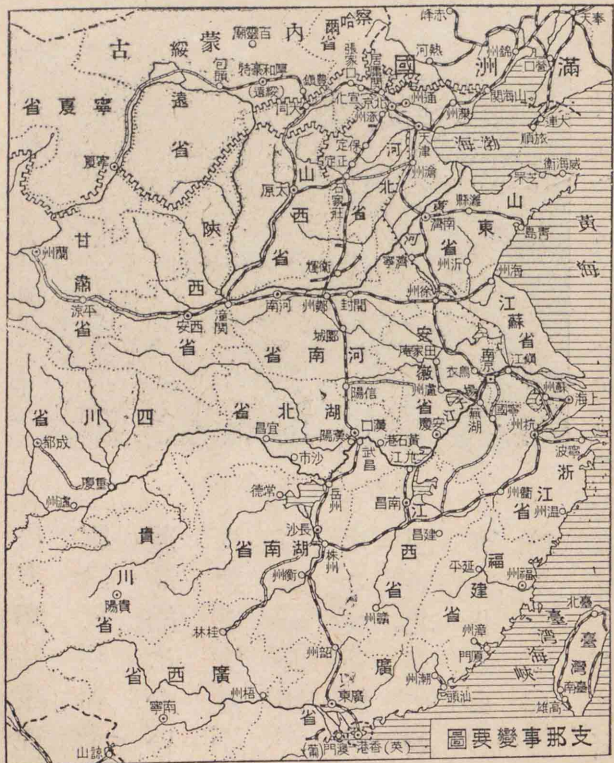
支那事變

支那の抗日運動

支那事變 支那に對しては、わが國は、多年の方針により、これと手を携へて東洋の安定を確保しようとなつたが、蔣介石を中心とする國民政府は、國內の統一を促進するためわが國を排斥し、抗日

昭和七年上海事變

上海停戰協定



支那事變要圖

悔日の教育を國民に施して事端を繁くし、しばしば挑戰的行爲に出たのであつた。

これより先、昭和七年、滿洲事變の最中、上海における支那の軍隊は、暴威を振つてわが居留民の安寧を脅し、これを保護するために上陸したわが軍隊を攻撃したので、わが國は自衛のため兵を出し、善戰健闘能く敵を驅逐し、五月、國民政府と停戰協定を結び、やがて兵を撤した。これを上海事變といふ。



北支那における日支協定

一九三七年  
蘆溝橋事件

また北支那では、冀東(河北省及北平部)冀察(河北省及察哈爾省南部)地方の安寧に就き、また國民政府と協定を結び、以て相互の平和を維持してをつた。然る



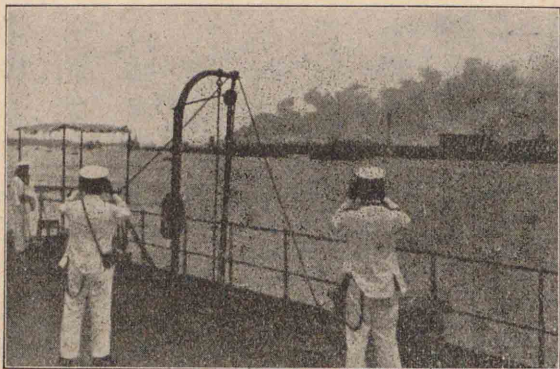
北支山嶽戰

に支那は東亞の大局に通ぜず、その軍隊は昭和十二年七月、北京郊外の蘆溝橋1937において、演習中のわが軍隊に對し突然不法射撃を加へ、國民政府はわが國が事件を擴大せず、穩便にこれを解決しようとするのを無視し、北支における協定を破つて大軍を北上せしめ、以てわれを脅した。加ふるに八月に至り、國民政府はまた先年の停戰協定を破つて、大軍を上海に出動せしめ、わが軍隊並に居留民に攻撃を開始した。わが國は、北支においても、上海にお

北支戰局

中支戰局

南支戰局  
空軍の活躍



わが艦上より上海戦線展望

いても、隱忍自重切に彼の反省を求めてゐたが、國民政府並にその軍隊が暴戻にして、毫も反省の色なきを見るに及び、終に蹶然として起ち、北支においては、先づ北京、天津の敵を掃蕩し、北しては萬里の長城を越え、幾多の險難を踏破して、察哈爾省綏遠省の要地を占領し、南しては諸所の敵軍を撃破し、河北省、山西省を席捲して更に山東省に入り、中支においては上海附近において、敵が多年構築せる堅固なる防禦陣地を次々に攻略し、目に餘る大軍を物ともせず、遂にこれを撃破し、更に西進して破竹の勢を以て江南の要地を略取し、十二月、首府南京を陥れ、また南支においては、廣東並に沿岸の諸要地に攻撃を加へ、敵の肝膽



支那船舶の航行遮断

わが國の目的

日獨伊防共協定

を寒からしめた。殊に空軍の活躍は最も目覺しく、支那内地の樞要なる軍事地域に爆撃を試み、海軍はまた北支より南支に互る沿岸における支那船舶の航行を遮断して、制空權と制海權とを共に完全にわが手に歸するに至つた。この時に當り、伊太利は不逞なる共產主義を撲滅せんがため、十一月、日獨防共協定に参加したので、日獨伊三國を連ねる外交樞軸は、世界列強の間に重きをなすこととなつた。かくのごとくして、わが國は國民政府並に軍隊をしてその誤れる抗日意識を棄てしめ、日滿支三國が相提携して、東亞永遠の平和と繁榮とを齎さんことを期したのであるが、彼等は歐米諸國を頼みとして、長期抗戰を唱へるので、わが國は、昭和十三年一月、今後は國民政府を交渉の相手とせざることを聲明し、わが國との和親を重んずる支那の新政權を助け、ますく、軍を進めて、五月、徐州附近の大會戰に勝ち、海軍は揚子江を溯り、空軍、陸軍と力を

現在の國勢

面積

人口

歳計

産業

交通

協せて漢口に迫り、銃後の國民は總動員の體制を取り、舉國一致以てこの聖戰の目的を達することに邁進してゐるのである。

現在の國勢

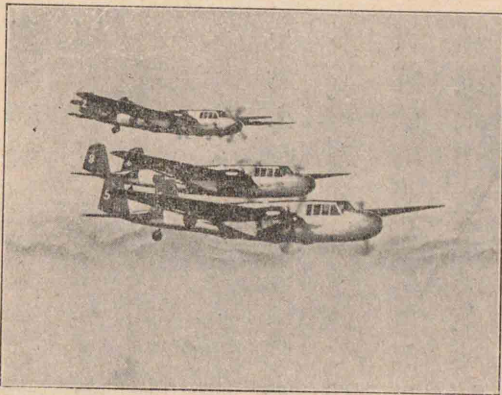
國運躍進の時に際し、わが現在の國勢を省みるに、明治維新を距ること七十餘年、三代の天皇の御統治の下に、わが帝國の力量は驚くべき發達を遂げ、領土の面積は關東州、南洋委任統治區域を除き、六十七萬五千三百六十五平方籽餘、人口の總計は約九千七百七十萬人(昭和十年十月現在)に達し、政府の歳計は近年概ね二十億圓を越え、輸出入額は昭和八年以後、毎年合計四十億圓内外を示してゐる。産業に就いて言へば、耕作地面積は田畑合計六十億八千五百萬餘町、米の收穫高は六千七百三十三萬餘石(共に昭和十一年末)に上り、畜産、林業、水産、鑛業、工業共何れも生産額増加の一路を進んでゐる。交通では鐵道網は全國に行き互り、電車、自動車は、日に月に運轉路を開拓し、造船所は昭和九年において五百九十八箇所に上り、その造



陸軍  
海軍

船數及び噸數は百七十七隻十五萬四千餘噸を數へてゐる。陸軍は近衛師團をはじめすべて十七箇師團を有してゐる。海軍は

空軍



わが空軍の雄姿

全國の海岸及び海面を第一第二第三の三海軍區に分け、横須賀、吳、佐世保の三鎮守府がこれを管轄し、別に關東州の海岸海面を關東州海軍區として、佐世保鎮守府に、また南洋諸島委任統治區域の海岸海面を南洋海軍區として、横須賀鎮守府に管轄せしめてゐる。空軍は陸海軍共に長足の進歩をなし、精銳なる國產機と、平素の猛訓練によつて鍛へられた手腕とは、支那事變の花と讚へられ、東亞の天空を制御する勢を有するは注目すべきである。尙ほ國民教育の根柢をつくる小學校の數は凡そ二萬五千七百七十

國民教育

歳入・歳出

諸學校數及び生徒數

女性の覺悟

われ等の爲すべき事

餘校、その就學兒童數は一千百二十三萬二千餘人に上り、學齡兒童の就學率は、九九五八の好成績を示し、人意を強からしめる(以上昭和九年度調)。

昭和元年には歳入二十億五千六百萬圓餘、歳出十五億七千八百萬圓餘であつたが、同十年には歳入歳出共に二十二億一千五百萬圓餘であつた。そして同十二年度では、歳入歳出の豫算額二十八億七千二百萬圓餘が帝國議會の協賛を経て成立し、別に支那事變に關する豫算額合計凡そ二十四億圓餘が成立した。

諸學校は昭和九年度の調査によれば、中學校は五百五十五校で、生徒數三十三萬九百餘人、高等學校は三十二校で、生徒數一萬八千九百餘人、大學は四十五校で、學生數七萬一千百餘人、専門學校は百十七校で、生徒數七萬餘人、實業専門學校は五十六校で、生徒數二萬四千百餘人である。その中において、官公私立の高等女學校は合計九百七十校、その生徒數は約三十八萬八千九百人、女子師範學校は四十六校、その生徒數は約一萬四百人に上つてゐる。

女性の覺悟

われ等は既に國史、東洋史、西洋史を學んで、世界各國盛衰存亡の跡を眺め、わが國體とわが國民性とが如何に優秀なるかを明確に認識し得たのである。われ等がこれより爲すべき



神徳の景仰

世界文化の創造

東洋平和の盟主

女性の責任

事は、從來學修し得たる知識を活用して、(1)わが國體の本義を宣明し、わが臣道の精華を體現し、肇國以來一貫して易らざる日本精神の光輝を發揚し、以て皇運を扶翼したてまつり、天照大神の御神徳を宇内萬邦と共に仰ぎまゐらせることに努め、(2)また日本文化を中心として、東洋文化と西洋文化とを攝取融合し、以て博大なる世界文化を創造し、人類永遠の幸福に寄與することである。この大理想を實現せんがために、われ等は先づわが國是たる東洋平和の盟主とならなければならぬ。そのために、われ等は常に隣邦と相親しみ、左提右携、共存共榮の康福を共にせんことを庶幾うて已まざるものである。若しこれを拒み、これを妨げるものがあれば、それは即ち國際正義の蹂躪者であり、東洋平和の破壊者である故に、われ等は敢然として破邪顯正の利劍を揮はねばならぬのである。この時に當り、わが國の人口の半を占めるわれ等女性の

家庭

社會

國家

生活の中心觀念

責任を省るならば、肅然として自ら恐れざるを得ない。凡そわれ等の生活は、その立場によつて、家族と社會と國家とに分れる。その中、家族はわれ等の本據であり、父母に孝、兄弟に友、良妻となり、賢母となり、健全なる家族を構成することは第一に努むべき大切なる仕事である。しかし家族は孤立するものでなく、廣い社會に包まれて存在するものである故に、朋友相信じ、恭謙己を持し、博愛衆に及ぼし、互に扶け合ひて共榮の悦びを分つことも亦大切である。然るにその社會は、國家の統制によつて、秩序と安寧とを保つものであり、その國家は天皇陛下を中心と仰ぎたてまつることによつて成立つてゐるのであるから、畢竟するに、われ等の生活の中心觀念は、實に忠君に存するのである。君に忠に國憲を重んじ、國法に遵ひ、義勇公に奉じ、皇運を扶翼したてまつることは、實にわれ等の最も高尚なる任務である。この最大の任務を果すためには、それ



非常なる時局

ぞれの家族が健全に構成せられることが必要である故に、われ等は先づ自己の家族生活を整へ、それより延いて社會生活のために貢獻し、以てわが國家生活の隆昌を期するのである。われ等の責任は、實に重大であると言はねばならない。今やわが國家は非常なる時局に直面してゐるのであるが、それは一朝一夕の間<sup>テク</sup>に起つて來たことではなく、數百年來、西洋諸國が、亞細亞諸國を侵略して來たところに、深因<sup>シンイン</sup>が存するのであるから、眞に東洋の平和を得るためには、一時の成敗<sup>セイバイ</sup>を以て心を動かすことなく、堅久<sup>ケンキウ</sup>持久<sup>チキウ</sup>の覺悟を以て最後まで戦ひ通さなければならぬ。一波<sup>イハ</sup>去るも一瀾<sup>イツラン</sup>は直に襲<sup>オサ</sup>うて來るのである。この國難<sup>クニガタ</sup>沓至<sup>カクシ</sup>の時に際會<sup>サイカイ</sup>せるわれ等は、日本臣民として生れたる恩寵<sup>オンチュウ</sup>を感謝しつゝ、天皇皇后兩陛下の御威徳を仰ぎまゐらせ、皇室を戴くことによつて光輝を放てる萬邦無比の國體を擁護し、健全なる同化力を有するわが國民性の長

所を發揮し、各自臣民たる本分を勤め、國運進展のために一意邁進<sup>イツメイジン</sup>すべきである。

子女綜合新國史

高等女學校  
高學年用 終



昭和十二年十二月二十一日  
 昭和十二年十二月二十四日  
 昭和十三年八月九日  
 昭和十三年八月十二日  
 印刷  
 發行  
 訂正印刷  
 訂正發行



子女綜合新國史 高等女學校  
 高學年用

定價 金壹圓貳拾錢

著者 中村孝也

發行所 東京市神田區西神田一丁目三番地  
 株式會社 帝國書院

印刷所 東京市牛込區山吹町一九八番地  
 株式會社 宗文社印刷所

發賣所 東京市神田區西神田一丁目三番地  
 株式會社 帝國書院

關西販賣所 大阪市東區橫堀四丁目三番地  
 三宅莊藏書店  
 振替口座大阪六九番



8  
20

広島大学図書

2000081620





正 誤 表

(中村女給國史高學用)

頁	行	正	誤
二七	八	わが國はその文化を盛んに受容するやうになつた。	その文化は盛んにわが國に流れ入るやうになつた。
三二	五	美術を攝取せる……	美術を模せる……
三三	六	東ローマ等の面影をも認められる傳來	東ローマ等の影響を認められる輸入
三四	二	……直接に攝取され……	……直接に流れ込み……
三六	一三	……大陸文化が取入れられて……	……大陸文化の刺戟を受けて……
三八	一二	大陸文化の攝取	大陸文化の活用
三九	欄外	……大陸文化を攝取し……	……大陸文化を活用し……
五三	一	律令を参考として	……律令を母法として
五四	九	唐の文化を攝取して 次の如く修正す	唐の文化を輸入して



一〇五	一〇二	五八	五七	五四
一	八七	三	三	欄外 一三四
<p>わが國に傳はり、わが國でも東山時代の前後に互り、……横線の文字追加</p>	<p>その事柄は…… わが文化を養ふことが少くなかつた。</p>	<p>大陸文化の長所が取入れられ…… わが文化を養ふことが少くなかつた。</p>	<p>……そのまゝ持つて來たやうな感じがある…… 大陸文化の長所が取入れられ…… わが文化を養ふことが少くなかつた。</p>	<p>遣唐使の往來の頻繁であつた頃は、唐人は固より、西域人・印度人などの來朝するものもあり、その地方の文化もまた傳へられた。 唐の文化の傳來 その傳へた宗派は天台宗と眞言宗とであつた。 奈良時代の諸宗はまだ本當に日本化されず……横線の文字追加</p>
<p>この影響は…… わが文化の發達に常に刺戟を與へた。</p>	<p>……そのまゝわが國に移し植えた観がある…… 大陸文化は絶えず輸入せられ…… わが文化の發達に常に刺戟を與へた。</p>	<p>……そのまゝわが國に移し植えた観がある…… 大陸文化は絶えず輸入せられ…… わが文化の發達に常に刺戟を與へた。</p>	<p>……そのまゝわが國に移し植えた観がある…… 大陸文化は絶えず輸入せられ…… わが文化の發達に常に刺戟を與へた。</p>	<p>唐の文化の移植 天台宗と眞言宗とは支那に於て既に立派に發達した宗派であつた。</p>